

產政塾

XIV

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

PHYSICS DEPARTMENT

目次

- 産政塾XVの発刊によせて

（財）中部産業・労働政策研究会

小田 桐 勝 巳

- 殻の外へ

東海理化労働組合 浅野 清 輝

- 心の穏やかさを保ちましょう！

デンソー労働組合 大川 博

- 産政塾 バンザイ！

株式会社松坂屋 奥 丈 治

- 殻の外に踏み出そうとする努力

トヨタ車体株式会社 梶 田 進

- 「殻」について

豊田自動織機労働組合 梶 原 昭 二

- 知らない自分に出会うこと

株式会社デンソー 川 崎 貴 之

35

29

21

15

7

1

● 産政塾 参加前・参加後 41

アイシン精機株式会社 栗原 尚子

● 三十五歳の前向きな独り言 49

松坂屋労働組合 小嶋 直樹

● 陸上競技と私 57

アラコ株式会社 佐藤 源信

● 月末の格闘〜横浜編〜 65

刈谷市役所 白井 崇夫

● 産政塾を振り返って 73

全トヨタ労働組合連合会 鈴木 輝行

● 『壁』のはなし 79

中部電力労働組合 鈴木 利幸

● 殻の外へ踏み出そう・・・自己変革のすすめ 89

中部電力株式会社 苑田 隆之

● 殻は破れたのか？ 99

トヨタ車体労働組合 千種 徳充

● 成長 107

豊田市役所 柘植 孝悦

● 瑞 方 記		113
---------	-------	-----

● 自分「カイゼン」		121
	トヨタ自動車株式会社	長岡 享 史
	アラコ労働組合	藤 原 誠 二

● 殻Ⅱ可能性		127
	名古屋鉄道株式会社	堀 田 大 祐

● 『自我』『自分』『自己』		139
	トヨタ自動車労働組合	山 口 健

● 産政塾を振り返り		147
	アイシン労働組合	山 下 邦 彦

● 職場慰安会にみる我が人生の殻叩き		155
	株式会社豊田自動織機	吉 田 研 太

● 私が専従になった理由（わけ）		165
	丸栄労働組合	渡 辺 憲 司

● あとがき（事務局の独り言）		171
	中部産政研主任研究員	竹 川 智 雄

● 産政塾活動記録		179
-----------	-------	-----

● 歴代卒業生		195
---------	-------	-----

産政塾XVの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十四期の活動を修了し、今年も二十二名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の若者二十名あまりにご参加をいただき、約一年間にわたって行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出席して体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができるとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。

今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第十四期にあたる二〇〇三年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「獨創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十四期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。

塾長 小田桐 勝 巳

殻の外へ



東海理化労働組合

浅野 清輝

<プロフィール>

あさの きよてる (36歳)

- 1967年 9 月 岐阜県に生まれる
- 1991年 4 月 (株)東海理化電機製作所入社
7 月 実験部配属
- 1992年 2 月 同社研究開発部へ
- 1997年 2 月 同社開発部へ
- 2001年 8 月 同社生技開発部へ
- 2002年 9 月 東海理化労働組合
執行委員 (専従)

現在に至る

<家 族> 独身

<趣 味> ゴルフなど

《はじめに》

産政塾に参加して半年余。振り返ってみると正直なところ不完全燃焼な気持ち大きい。組合で勧められ、何気なく申し込んだのは間違いのないところだが、「参加するからには当然皆勤」という心構えでスタートしたにも関わらず、終わってみれば開塾式を含めて3度のみの参加で、全体の半分にも満たなかった。

書き始めからパツとしないことを書いてしまったが、では参加した意味はなかったのか？いやそんなことはないと思っている。初めて会った人たちとの交流は新鮮なものを感じられたし、訪問先でも新しい発見が幾つかあったと思う。SAFではドライバーとナビゲーターの関係から、我々の会社生活・日常生活に通じる貴重な話を聞くことができたし、メーテレ（ナゴヤテレビ）でも、一見華やかに見える業界での苦労話など、実際に見聞きしないとわからないことが多くあった。まさに『百聞は一見にしかず』であり、体で感じられたことが参加して一番よかったことだと思う。

《殻？》

私は自己主張が苦手な人間で、その原因は歩んできた人生にあると思っている。小学生時代、同級生54人という小さな学校で過ごしたが、中学になると1学年9クラスになった。つまり中学では大半が他の小学校出身者で占められ、自分の小学校下の話をして分らない人がほとんどで、自然と出

身者の多い地域の話になり、いつしか自分もその話を聞く側になっていった気がする。高校も地元から多少離れた学校に通っていたため、同じ状況は続いて今の性格が形成されていったと思う。それがどうしたと言われるかもしれないが、自己主張が苦手というのも『殻』の一つで、『殻』というものは自分が歩んだ人生の中で、上述のように外因があつたにせよ、自分で作ってきたものだと思う。

『自分にはできそうもない』『苦手だ』など自分で決め込んだ境界線が『殻』と表されるものであり、全てが自分の内側の話である。

ではどうして境界線を作ってしまうのか。やはり居心地の問題だろう。自分ができると分かっている範囲であれば、なにか頼まれても順序も含めイメージできるため、一種の安心感とともに遂行できる。それが自分はやったことのない話となると、『できるかどうか』『間に合うかどうか』など不安が出てきて、精神的に不安定になる。人間誰しも精神が平靜でないと健康的に生きていけないので、『殻』というものを作り始めるのだと思う。

《殻を破る?》

数年前、ビール製造会社Aの役員さんのエピソードを聞いたことがある。役員さんがまだ課長時代に、いわゆる窓際族として第1線から遠ざかっていた頃があり、その頃の日々の過ごし方についてである。一般的な人なら、さほど重要でない仕事をしながら、漠然と勤務時間を過ごすところである。しかしこの方は『せっかく有り余る時間があるのだから、有効に使おう』と消費者のビールに対する

嗜好についてのマーケティングに時間を割き、かの大ヒット商品スーパーD○イを生み出したのである。要は同じ状況であつても氣の持ちようで随分変わってくるという話であつた。

話を聞いた当時は、そんなに上手く気持ちを切り替えられるものかと、特別な人の事例といった程度しか考えていなかった。実際、そのような見方はなかなか出来なかつたが、少しずつでもそう思うよう心がける事にした。そうすると不思議なもので、途中経過は記憶にないものの、物事の捉え方が変わってきた氣がする。仕事が変わつたことに對し不平不満を言う人がいるが、新しいことが出来ると思えば歓迎すべきことだと思ふし、人付き合いで悩む人も多いが、『この人はこういう性格だから』と思えば悩むことも減るのではないかと思ふ。確かに、新し物好きで飽き性、樂天的な性格を持った私だからそう思えるだけかもしれないが、一度しかない人生なのだし、うつむいて過ごすより楽しく過ごしたいと思つてゐる。誤解を招く言い方だつたかもしれないが、決して面白おかしく過ごすのが良いと言つてゐるわけではなく、前向きに考えれば自然と楽しくなるし、活路も見出せると考えたほうが良い。

召使いを何十・何百人と抱える大富豪で、何事も自分の思う通りに出来る人（日本にそういった人がどれほどいるかわからないが）でなければ、誰しもストレスを受けて日々を過ごしているわけだが、ストレスに對し押しつぶされるよりは、ストレスと上手く付き合う方法をまず考えるべきだと思う。だんだん哲学的になつてきて恐縮だが、言うならば恐妻家が奥さんと上手く付き合つてゐる方法を、他のことでもやつてみることだと思ふ。

労働組合の役員になつた時も同じ。一般組合員から見れば、日々何をやつてゐるのかわからない部

分があるだろうし、実際自分もそうだった。未知のものがあると興味が出ると同時に恐れを感じるが、自分が身を投じるとなると恐れ・不安が興味より大きくなって来るのが世の常である。また噂というものも基本的にプラスの噂よりはマイナスの噂の方が良く伝わるし、人の心に残りやすい。組合についても『毎日深夜まで仕事』とか『土日が無い』など、一部を誇張した噂がある。もちろん毎日早く帰ることが出来るわけでもないし、土日が潰れる事もあるが、いつもそうである訳でもない。印象としてマイナス面が強調されているためか、声が掛かったときにふたつ返事で引き受けるというのは稀である。では一步踏み込んだ時に（役員になったときに）、大変なことしかないのかと言えば、もちろんそんなことは無い。役員にならなければ体験できないことも多いし、各支部の人とも会うことは無かっただろう。人とのつながりや経験は、有形・無形の財産になると思うし重要なもののひとつだと思う。一步踏み込むという行為が、次の自分を作り上げてくれ、その積み重ねによって自分が大きくなれると思う。これこそが『殻』を破ることに繋がる気がする。

《今 後》

基本的スタンスとして、いろんなことに対しポジティブに考えたいと思う。例えば「海外赴任は、会社がお金をくれて異文化に触れさせてくれる」とか、目立たない仕事でも「基礎がしっかりしていないと家は倒れる。自分は家を支えているのだ」とか。せっかく毎日生活するなら、楽しくありたいと思う。俯いてばかりいては、毎日がつまらないし勿体無い。厳しいからと言って難しい顔ばかりす

るのではなく、時折自然と笑顔が出せるようにしたい。できることなら、周囲も含めてそんな雰囲気
が職場に作れたら最高だと思う。ただ思うだけではなく、そうして行くための方策を今後考えていき
たい。

やはり『物事を前向きに捉えると人生楽しい』という心構えで過ごしたい。大変なことでもやり遂
げたら充実感はあるし、そういう仕事の仕方をしたいと思う。

《最後に》

第14期の産政塾は終了したが、色々尽力いただいた事務局の方々に感謝しつつ、塾生の皆さんとは
今後も継続した交流ができれば良いなと思う。

心の穏やかさを保ちましょう！



デンソー労働組合

大 川 博

<プロフィール>

おおかわ ひろし (32歳)

1971年6月 愛媛県生まれ

1996年4月 日本電装(株) (現(株)デンソー) 入社
冷暖房企画部配属

2000年9月 デンソー労働組合執行委員
現在にいたる

<家 族> 妻

<趣 味> テニス (週1でスクール通い)

○はじめに

産政塾の卒業論文作成という課題に取り組むにあたり、「殻の外へ踏み出そう」という塾生の共通テーマについて、あらためて考える機会を得ました。非常に奥の深い言葉だと思いますが、あらためてその意味するところに思いを寄せ、また参加させていただいた各種企画の中から（すべて思い出深いものですが、中でも）印象に残ったものを取り上げ、それに絡めて話を綴ってみたいと思います。

○殻の外へ踏み出すために

人間も30年以上も生きてくると、自分なりの考え方や、生き方の指針みたいなものが、はっきりしないまでも、おぼろげながら形づくられてくるかと思います。それなりの生活基盤や、人間関係、またその中で生きていくための処世術みたいなものも程度の差こそあれ身についてくることでしょう。その元になっているのは自分自身の経験であり、実際に体験したことから得たものもあれば、人から聞いたこと、教えられたことがベースになっているものもあります。この経験は人が生活していく上で大切なもので、個々人がそれぞれのレベルで身に付けていくべきものですが、これらが実は産政塾のテーマで謳われている「殻」の一部になっているのではないかと私自身は考えます。短い間に作られたものもあれば、長い時間をかけてじっくりと覆っていくものもあり、またそれらを破るとなると意識的にそれをやつていこうと心がける人もいれば殻を破ることに消極的な人など、個人差も出てく

るでしょう。私自分はどちらかと言えば後者のタイプで、変化に対しあまり積極的でないように感じています。プライベートの中で考えてみると、次から次へと新しい趣味あるいは自己啓発といったところに積極的に取り組む人が私の周囲や友人にもチラホラいます。が、私の場合は社会人になってから会社同期の人間に誘われて始めたテニススクール（スタートからして受身です。）に通い続けていることぐらいで、後はこれといったものはありません。新しい趣味を進められても、「どうせあまり長続きしないだろうな。お金の無駄が増えるだけだ。」という言葉（これも今までの経験に裏付けされた言葉ですが……）が頭をよぎり、なかなか重い腰があがらないところがあります。仕事においても同様で、同僚や上司に対し「あの人はすごいなあ。」と思うことはありますが、じゃあその人をめざして何かを変えてみようというトライがあるわけではなく、変えるにはそれなりのパワーもいるわけで、ついつい今のままが楽だなあと感じてしまいます。その手のタイプの人間には、やはり外からの刺激、体験に基づく新しい刺激を自分自身に与えてやるのが有効と思いますし、そうしないとなかなか殻の一枚さえも破れないのではと思われまます。産政塾は、そのきっかけとなりうる有効な刺激のひとつだと思いますが、その企画内容を自分たちで考えアレンジしていくことが、もう一段の有効な刺激になる可能性を秘めており、日常生活では触れることのできない体験や話を聞く貴重な機会をいただいたと感じています。

○精神鍛錬　　心の安定の大切さ

さて、参加した各種企画それぞれに貴重な体験をさせていただきましたが、私の班が企画立案したこともあり、第6回企画「精神鍛錬　ブレッシャーに打ち勝とう」は特に記憶に残っています。これは京都の有名な寺、南禅寺にて座禅と法話、写経の体験をするもので、精神統一をはかり日常のストレスやブレッシャーから平穏な気持ちを取り戻すのが狙いです。

まず座禅のやり方ですが、特に細かい作法や型のようなものにはこだわらず、一番大切なのは息を整えること。余計なことを考えず、強く息を吸ってゆっくりと吐く。吐くときに「ひとおつ」と数え、十まで数えたらまた一から数え始める。意識が数える作業に集中することもあり、感覚的ではありませんが、頭の中は空っぽになった気がします。また、大きく呼吸を行うことが、思いのほか心の落ち着きにつながり、人間の基本的な営みである呼吸を、しっかりと行うことが意外な効果を生み出すことを強く感じました。環境としても静かな庭園に囲まれたお寺の中で、聞こえるのは流れる水の音だけという中で、少し視線を落として座禅を組むだけで、外の世界から閉ざされた空間の中で自分を見つめ直すことができます。時間の動きを感じることなく、頭の中は空っぽ、心の中も落ち着いた感覚というのは、いつ以来でしょうか。自分でも思い出せないくらい、久しぶりに感じる感覚でした。普段座禅をすることがないので、望ましい状態にはまだまだでしょうが、それでも普段の心の状態とは違うものを感じたのは私だけではなかったでしょう。

どちらかというと短気な性格ゆえ、いらいらするのは日常茶飯事の私。妻にもよく指摘されますが、

本当に小さなことでいららするみたいです。(逆に大事なことにとはトンと気が付かないようで、その辺が妻のストレスの元凶らしい。) 挙句の果てには「男のくせに、小さなことで、くどくどと…」と妻に言われる始末。自分でもうすうす感じたりはしていましたが、ぐうの音も出ないほどずばり指摘されるものです。女性というのは結構ストレートに、しかも的確に言うのに長けていたりするわけで、こちらとしても言い返す言葉がなく、それでも最初のころは訳のわからないことを言ったり、大声を出してごまかしたりしていましたが、その行為自体が子供じみていると逆にやりこめられるため、最近は妻の言い分を黙って聞いて、最後には謝ることが多くなりました。思うに社会人というのは、年齢を重ねるごとにどつしりと構え落ち着いてくるものですが、私の場合、どつしりとしてくるのは体型ばかりで、心にゆとりが出てきたことを感じることはありません。私が若いころに見た30代の方は随分大人に見えたものですが、今の自分がその雰囲気醸し出せるのはいつのことでしょうか。

話が脱線しましたので、少し元に戻しますと、この座禅を通じての心の安定というのは、すべてに通じるものがあるのではないでしょうか。よくこの精神の問題が取り上げられるのはスポーツの世界です。20年くらい前は技術を磨く練習をとことんやり、苦しい練習に耐えたものだけが勝利を掴むという考えが根強くありましたが、近年ではイメージトレーニングの手法がいろいろな競技で取り入れられ、メンタル専門のトレーナーも一般化してくることなどは、心の安定が競技に与える影響がいかに大きいかの表れです。

我々サラリーマンの世界でもその大切さはいろんな場面で感じます。特に私は現在、本業の方を小

休止しまして専従で労働組合の執行委員をやっている立場上、人前で話す機会も増えてきました。人から質問を受けて答えるときなどは特に心の落ち着きというのは重要であります。後から冷静に考えれば回答できたことがその場では舞い上がってしまいつかり回答できず悔やまれる機会も多いものです。また、逆に組合員さんの話を聞くことも多いわけですが、心を落ち着けて人の話をじっくり聞くことが実は意外に難しいことだと感じています。内容はとても真剣なものでも、話し方によってじれったく感じることもあるし、内容にかかわらず、別の仕事を頭の中で引きずっていて落ち着いて聞いてあげられなかったり、時間とかが気になって相手が話し終わる前に自分が話し始めていたり…。ひどい時だと相手の意見を頭ごなしに否定してしまうことや、否定はしないまでもその気持ちが表情に出てしまったりします。（他の執行委員に言わせると、私は実に心の変化が表情に出やすいタイプの人間のようなです。ポーカーフフェイスとは無縁でしょうか？）

また、人との関わりではなく、自分の頭で考える仕事のときも同じです。心の安定があればスムーズにいくものも、限られた時間の中であせるがゆえにかえって時間がかかってしまったりとかはよくあること。また、別の仕事を考えているときでも、他の仕事が気になってそれゆえに今やっている仕事に集中できなかつたりすることも案外多かつたりします。（これは、心の安定だけでなく、多分に仕事の進め方のまずさとか、準備不足という部分も多いと思いますが、ここではそれらの要因はおいておいて、心の話に戻しましょう。）

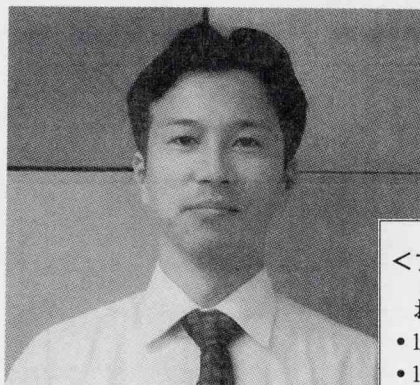
座禅体験をした後、僧侶の法話を聞きました。遠い昔には、この南禅寺を舞台として、人々の争いが繰り広げられたとのこと。今は物質的にも恵まれ、私達は平和に暮らしていますが、今なお世

界のどこかで飢餓に苦しみ、お互いに傷つけあう人たちはいます。そう思えば、私たちは常に現状に甘んじることなく、人を敬い自己鍛錬を行う必要がある、というようなお話をされました。あまりにも崇高過ぎてこの境地に達することは容易ではないでしょうが、僧侶の穏やかな語り口もあって、座禅で落ち着いた心が法話によりさらに澄み切った感じがしました。この話は「殻の外に飛び出そう」という塾の共通テーマにも合い通じるものである気がします。僧侶の立ち居振舞いも実にゆったりしており、法話をお聞きしているだけで時間の過ぎるのを忘れてしまうくらいです。この落ち着き、穏やかさの何分の一でも私が持ち合わせていれば、妻に謝る機会も少なくなるだろう、そう感じる私でした。

○最後にお詫びもかねて・・・

しかしながら、そういう体験をした私自身が実は心の安定を保つことなくあせりの中でこの文章を書いております。納期も随分過ぎていますが、なんとか規定の字数にたどりつきそうです。事務局の竹川さん、本当にご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。塾生のみなさん、もし発行日が遅れていたら、それは竹川さんのせいではなく、わたしのせいです。この場を借りてお詫び申し上げます。こんな私ですが、見捨てることなく、ぜひまた集まってあの祇園祭の夜のように一緒に飲みましょーう！

産政塾 バンザイ！



株式会社松坂屋

奥 丈 治

<プロフィール>

おく たけはる (33歳)

- 1970年10月 和歌山市生まれ
- 1995年4月 (株)松坂屋入社
名古屋店婦人ランジェリー・ナイトウェア売場配属
- 1999年3月 名古屋店秘書課へ異動
- 2000年3月 本社人事部へ異動
現在に至る

<家 族> 妻(?歳)、長男(4歳)、長女(2歳)

<趣 味> ドライブ、野球観戦(オリックス一筋33年)

< 夢 > 宝くじで3億円当てること

△はじめに▽

私が産政塾に参加するきっかけとなったのは、昨年末に上司から手渡された一通の「産政塾第14期生募集案内」であった。最初、「産政塾」という言葉を耳にしたとき、小・中・高校と「塾」に通い詰め（予備校にも大変お世話になった）、受験戦争をなんとか乗り越えた辛く苦しかった過去（カラーで例えるならばグレーだと思う）を思い出した。そのような重い空気に包まれながら募集概要に目を通してみると、さすがに「塾」と名が付くだけに少々堅苦しい印象を受けたが、産政塾の基本テーマである「殻の外へ踏み出そう」という言葉に不思議な魅力を感じた。しかしながら、別に現状に不満があるわけではなく、入社以来、進級もすることができたし、海外研修も経験することができた。また家庭を築き子供にも恵まれるなど自分ながらに順調な人生を送ってきたつもりである。ただ、現状よりも、もう一つ上のレベルに自分を引き上げるためには、何かが必要であり、産政塾に参加することによって、その「何か」を見つけることができるのではないかという期待が自分の中で高まったのである。

このようにして、私は産政塾に第14期生としてデビューを果たすことになった（もちろん、会社の援助があったからであるが…）。

△「殻」とは？▽

産政塾の基本テーマは『殻の外へ踏み出そう』である。では、「殻」って一体何だろう？」という

疑問がわいてきた。「殻を破る」や「殻の中に閉じこもる」などという言葉は、時折、耳にすることはあるが、実際に「殻」とは何ですか？」と問われたときに、明確に答えることのできる人はごく少数しかいないのではないだろうか。なぜなら、それは「卵の殻」のように色や形があるわけではなく、人それぞれによって捉え方が異なるからである。私も、今回の産政塾に参加するまでは「殻」などということを考えたこともないので、自分にとっての「殻」とは何なのかを自身の過去を振り返って自問自答してみることにする。

私が勤める会社の研修制度には、支店のあるフランス・パリにおいて最新ファッションやヨーロッパの流通事情および日本とは異なる生活・文化を修得し、その経験を仕事や生活または人生全般に役立てることを目的とするパリ業務差遣研修があり、幸運にも私は入社3年目の終わりに、この研修で2ヶ月間の海外生活する機会に恵まれた。入社当時からこの研修に興味があり、いつかはパリに行ってみたいと強く思っていたのだが、実際に差遣されることが決定したときには嬉しい反面、不安を感じるこの方が強かった。なぜならば、学生時代から海外に対する興味は強く、英会話スクールに通うなど準備はしていたのだが（あまり上達はしなかった）機会を逃したというか実行に移せずにいたので、私には海外経験がなかったのである。

だが、実際に現地に赴いてみると、目にするもの、口にするもの、触れるものすべてが新鮮に感じられ、何よりも憧れが現実になったという喜びが私から不安を取り除いてくれた。また、会社が経費を使って自分を差遣してくれているので時間を一時も無駄にすることができないという想いが強く、休日はすべて美術館や史跡を巡ることに費やすなど、忙しく充実した毎日を過ごしたので不安など感じる暇もなかったのである。そして、帰国を2週間後に控えたある休日に、私はパリから西へ約300km、

ノルマンディー地方とブルターニュ地方の境界に位置し、世界遺産でもある幻想的な小島「モンサンミッシェル」を訪れた。モンサンミッシェルに行く交通手段は2通りあり、1つはパリからの観光客向けのガイド（ツアー）バスで行く方法と、もう1つはTGV（鉄道）とバスを乗り継いで行く方法である。前者は、バスに乗り換えれば目的地まで連れていってくれるので精神的な不安がなく、また団体料金なのでコストも低く抑えられるなどのメリットが大きかったが、私は敢えて困難が待ち受けているであろうと予想される後者を選択した。道中では、言葉が通じないという苦労があったが、思い切って行動してみることで何とか目的を成し遂げることができた。

何か行動を起こすこと（「殻」を破ること）は大きなエネルギーを必要とし、失敗というリスクがつきまとう。また、時にはその失敗によって恥をかき、精神的に不安定になる場合があるかもしれない。しかし、それを怖れるあまりに何も行動を起こすことがなければ、自分自身の成長もなく、後々に後悔だけが残ることになる。だから、「羞恥心」や「消極的な自己保身の心」という「殻」を飛び出し行動したたことによって、私は「行動を起こすことで必ず未来は拓ける」という自信を手に入れることができたのである。

△雨の中の行進▽

今回の産政塾の企画で忘れることができないのが、5月中旬に第4回企画として訪れた自衛隊豊川駐屯地における体験である。

その豊川駐屯地は自宅から電車で片道約2時間以上もかかる豊川市にあり、私はそこに行き着くま

では甘い旅行気分に含まれていたが、事前の企画案内で「運動ができる服装を準備」と記載されていた点が、しだいに気になってきた。なぜならば、昔、テレビの体験番組で見た「歩腹前進」やら「密林地帯でのサバイバル体験」などという自衛隊での過酷な訓練が待ち受けているような気がしたからである。

当日、まず到着後すぐに大食堂で他の隊員の方々と一緒に昼食をとったのだが、その日のメニューはカレーライスで分量、トッピングともに自由であったので、つつい食べ過ぎてしまい、その後の体験訓練で動くことができるか心配するほどであった。

そして昼食後、講義室、資料館へと場所を移して約1時間近く講師の方から説明をうけ、ついに体験訓練に突入しようというとき、雨が激しく降ってきた。その時、私の頭の中には、訓練といっても体験なのだから、雨がやんでから訓練をするか、または訓練を中止して別のメニューを実施することになるだろうという考えが浮かんできた。しかし、講師の口からは「雨が降っているが訓練をする！」という言葉であった。そして雨の中で訓練が始まったのであるが、雨具などはなく、全員ズブ濡れ状態であった。さらに訓練の途中で雨が激しさを増してきたので、私は「今度こそ、訓練を終了するだろう」と思ったが、結局は多少雨除けになる自転車置き場の屋根下に場所を移した程度で、約1時間にもわたる基本動作や行進を雨の中でやり遂げたのである。

私はこの訓練を終えて、自分自身を非常に恥ずかしく思った。なぜならば、いつの間にか自分自身の中に「当然こうあるべきだ」「こうでなければいけない」という既成概念の「殻」が築かれていたからである。

それまで、現在の自分の中に「殻」など存在するはずがないと思っていただけに、この自衛隊での

訓練は、初めて自分の中に存在する“殻”というものを実感した貴重な機会であり、いつまでも心に残る経験となった。

△最後に▽

今回の産政塾の企画全部に参加できたわけではないが、どの企画においても貴重な経験をすることができ、また基本テーマである“殻”についても、自分にとっての“殻”とは何なのかを考えることができたことは非常に満足である。今後はこの経験を活かして、いつも“殻”を意識して、そして“殻”を飛び出して仕事に取り組んでいきたいと思う。

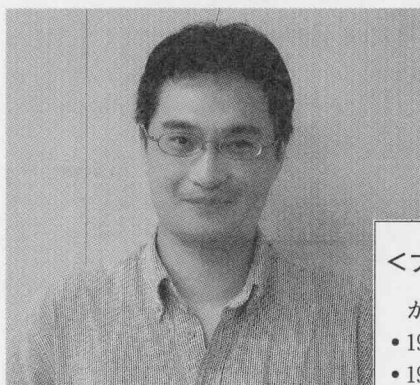
ひとつ残念なのは、私たちのグループの企画が台風の影響で中止になってしまったことである。リーダーである名古屋鉄道（株）の堀田さんには、最後まで企画の実行にご尽力いただき、本当にありがとうございました。またいつの日か、機会があれば、私たちのグループだけでも中止になった企画を実行したいと思っています。

最後になりましたが、私たちのさまざまな企画にお付き合いいただきました塾長である小田桐中部産政研理事長、事務局の竹川中部産政研主任研究員、依頼を快く引き受けていただきました講師の方々には、本当に感謝いたしております。また産政塾14期生の皆さん、短い間でしたが大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

それでは、また今度は同窓会でお会いしましょう、今から楽しみにしております。

産政塾の増々のご発展と、第14期生の皆さんのご活躍をお祈りいたしまして、『産政塾 バンザイ!』。

殻の外に踏み出そうとする努力



トヨタ車体株式会社

梶 田 進

<プロフィール>

かじた すすむ (32歳)

- 1971年 愛知県名古屋市生まれ
- 1993年 トヨタ車体㈱入社
人事部労務課配属
- 2002年 人材開発部人事室へ異動
現在に至る

<家族> 妻、娘1人

<趣味> 草野球、ゴルフ

1、はじめに

「殻の外に踏み出そう」というのが産政塾のテーマ。ところで「殻」って何のことだろうか。難しい質問だが、たぶん「今の自分自身のこと」だと思う。一般的にはこれを個性と呼ぶ。個性には長所と短所がある。ということは、短所を克服することが「殻の外に踏み出す」ことではないだろうか？したがって、自分自身の短所を再認識するために、この機会に、これまでの自分の歩みを振り返ってみようと思う。

2、誕生から幼年期

1971年2月6日、私は生まれた。当然その時のことは全く覚えていない。誕生のときはさておき、私は幼年期（小学校に入るまで）のことほとんど覚えていない（誰もがそうかも知れないが）。このころ既に自分の個性の形成が始まっていたとは思いますが、記憶がほとんどないので仕方がない。次に行こう。

3、児童とき

小学生の時は、どういう児童だったのか。記憶として印象が強いのは部活動のことである。小学校

では野球部に所属していた。「どんなことでもいいから何かに継続して取り組むべし」という親父の教育方針により入部したものであるから、練習をさぼるようなことをすると親父の鉄拳が飛んできた。したがって、好きで野球をやっていたというよりは、仕方なく続けていたという印象が強い。「継続することの大切さを覚えた」と言いたいところだが、親父には悪いが、正直そんな気にはなれない。それぐらい「親父に叱られることが怖くて練習に行っていた」という印象が強く残っている。ちなみに、小学校の野球部では万年補欠だった。少なくとも目立つ選手ではなかった。

4、生徒のとき

中学でも野球部に入った。小学校で野球部だった人は通常中学でも野球部に入る。私が中学でも野球部に入った理由もそれである。好きで入ったようなそうでないような。まあ、野球以外のスポーツをしたことがなかったからと言えればそれまでだが。

野球部も中学になると練習がとてきつい。小学校のように練習をさぼって親父から叱られることはなかったが、野球部の仲間から「お前だけ楽（ラク）しやがって」という冷たい眼で見られることになる。したがって、さぼるわけにはいかない。毎日雨が降ることを願っていた。ちなみに、特別上手ではなかったが、中学ではなぜかレギュラーになることができた。

ここで重要なことは、野球が小学校・中学校の生活の中で大きなウェイトを占めていたにも拘らず、その野球を「好きでやっていた」とは言えないということである。親父や仲間管理されているので、

仕方がなく野球を続けていたと言わざるを得ない。

勉強はどうだったかと言うと、これも自分からすすんで勉強をするタイプではなかった。中学まではテスト前に勉強をしていないと父親から叱られるので、仕方が無く勉強をした。また、決して裕福な家庭ではなかったにも拘らず何故か家庭教師をつけてもらっていたので、家庭教師の管理のもと、仕方が無く勉強をした。とにかく中学までは勉強にしろ部活動にしろ、父親の管理のもとに行動していたという印象だ。「中学生までは子供として扱う」というのが父親の基本的な考えだったので。その証拠に、高校以降は父親から何か指示をされたり、行動を制限されることは全くなかった。

「もう大人なのだから、自分で決めて、自分の責任で行動しなさい」と言ったところか。(具体的にそう言われたことはないが)

前述したように、父親による管理は中学生までだったため、高校に入学すると全て自分の意思で選択・行動することとなった。と言いたいところだが、私が入学した高校は当時管理教育で有名な高校であったため、父親による管理から学校(先生)による管理に変わっただけと言っても良い。勉強をキチンとやっているかどうかを父親に管理されることはなくなったが、学校からそれ以上に徹底的に管理された。ただし、部活動だけはもちろん自分の意思で選択できるようになったが、野球部がない高校であったため、友人に誘われるままに硬式テニス部を選択してしまった。最初の自分の意思で選択する機会を友人に委ねてしまったことになる。

このように中学生までと高校生以降では父親との関係は大きく変わったが、誰かに管理されながら

生きているという面ではあまり変わっていないかったと言える。

5、学生るとき

自分の意思で地元の某私立大学に進学したわけだが、これも特にこだわりがあつて選択した大学というわけではなく、自分の学力で受かる可能性がある地元の大学を受けて見たら合格したというだけである。

大学に入るとさすがに何もかもが自己選択・自己責任の世界である。父親も何も言わない。学校も何も言わない。そうなると自分のような管理されていないと何もできない人は、楽（ラク）なことしかしなくなる。授業には出ない、テスト前以外に勉強するなんてことはまずない。積極的に取り組むことは所属していたテニスサークル活動と友人との交友ぐらい。現在会社で採用担当という立場である自分の眼から見ると、全く典型的な勉強をしないダメ学生であり、自分のような学生は絶対に採用しない。

それでも、大学4年間で全く無駄だったとは言わない（言いたくない）。サークル活動・友人との付き合い、バイトなどから学ぶものもあつたし、十分な勉強はしなかったが、一定の法律的な知識を身に付けることはできた（ちなみに私は法学部）。単純に楽しい4年間であつたことは事実である。ただし、サークル活動を除くと充実した学生生活とは言い難いというのも事実であり、勉強をはじめもう少し様々なことに取り組むことができれば良かったと思う。

6、会社に入って

会社を選ぶことは、当然自己選択・自己責任である。今の会社はもちろん自分で選択した。ただし、地元の優良企業（メーカーに絞ってはいたが）を色々と採用活動する中で、たまたま最初に内定がもらえたというだけである。

仕事は基本的に与えられるものである。課題（やるべきこと）を自分から見つけることが必要だとよく言われるが、その課題だって、会社方針や職場方針からブレイクダウンされたものであり、結局は与えられたものと言える。昨今「自己選択・自己責任」という命題のもとに自己申告制度やFA制度などを導入する企業もあるが、誰もが自分が好きなこと（仕事）を選択できるなんてことはあり得ないことであり、「自分の好きなことができないかわりに一定の給与が補償されている（もちろんやるべき仕事をキチンとやることが前提）」というのが会社員そのものだと思っている。（自分の好きなことをやりたいならば、脱サラして好きなことをやれば良い。そのかわりリスクは高い。）

したがって、私も基本的には与えられた仕事もこなしているだけと言ってよい。言い換えれば、会社から何をすべきかをしっかり管理されているのである。

7、これまでを振り返って

中学までは父親に管理され、高校では学校に管理され、会社生活では会社管理され、唯一誰から

も管理されなかった大学では充実した学生生活を送ることができなかった。

つまり私は誰から管理されていないと楽（ラク）な方向に流されてしまう人間の典型なのである。したがって、会社生活・個人生活ともにやらなければならないことや好きでやっていることはキチンとこなすが、新しいことややらなくても済むことにはなかなか取り組もうとはしない。新しいことに取り組むことは楽（ラク）なことではないからである。これが私の個性（短所）であり、「殻」なのだと思う。

自分の「殻」が何かが認識できても、その殻の外に踏み出すことは容易なことではない。短所を克服することはとても難しい。よく「短所を克服することより、長所を伸ばすべき。」と言うが、少なくとも短所を克服する努力をしなければ人間は成長しないと思う。だって短所は単純に「悪い」ところなのだから。

まさか今頃（32歳）になって自分自身のこの短所を初めて認識したわけではない。ずいぶん前から気付いていたが、今回改めて再認識したといったところである。自分の殻の外に踏み出すこと＝短所を克服することは容易ではないが、生きている限り努力をしていかなければならないと思っている。新しいこと・自分が知らない世界に誰かから言われなくても自分から眼を向けていきたい。豊田佐吉翁の言葉「障子を開けよ、外は広い」の精神である。

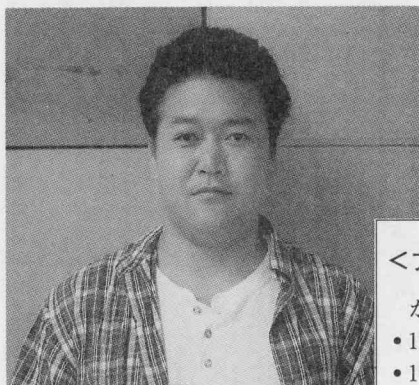
8、最後に

「殻の外に踏み出そう」というテーマで始まった今回の産政塾。自分の担当のイベントをメンバーとともに企画したり、各回のイベントに参加したり、夜の懇親会で情報交換したりと、自分なりに刺激にもなったし、得るものもたくさんあった。また、今回のような文章を書いたことは本当に良い機会であった（こんな機会は滅多にない）。

思いつくまま取りとめもなく書いてしまったことをお許し願いたい。自分の人生を文章で振り返る機会があるとは思ってもいなかった。これが塾誌として残り、諸先輩方の目に触れることは大変恥ずかしいことではあるが、数年後にこれを読み返したとき、殻の外に踏み出すために努力している自分に気付くことができるようにしたいと思う。

最後に、産政塾という機会を与えて下さった会社や上司、ならびに中部産政研に感謝します。また、楽しく有意義な時間を過ごさせていただいたことに対し、熟生のメンバーならびに事務局の竹川さんにお礼申し上げます。

「殻」について



豊田自動織機労働組合

梶原 昭二

<プロフィール>

- かじはら しょうじ (35歳)
- 1968年 8 月 名古屋市に生まれる
 - 1987年 4 月 (株)豊田自動織機に入社
共和工場
電子事業室 製造室勤務
 - 1992年 4 月 大府工場
鋳造製造部 鋳造第一課勤務
 - 1993年 5 月 大府工場 安全衛生環境課勤務
 - 2002年 9 月 豊田自動織機労働組合 執行委員
現在に至る

<家 族> 妻、娘1人、息子1人

<趣 味> スポーツ観戦

私は、豊田自動織機に入社し、製造・事務・労働組合と様々な部門を経験させて頂きました。現在は、今までの経験を生かし労働組合の仕事に従事しています。家庭では、妻・3歳の長女・1歳の長男の4人家族で、特に最近では子供達の成長の早さに驚きを感じながら、毎日の生活を送っております。

産政塾に参加し、とても大きな事を2つ学びました。1つ目は、産政塾のテーマでもある「殻を破る」という「殻」についてです。

「殻」とは何かを考えなければ「殻」は破れないと思い、「殻」について考えてみました。当初は「殻」について考えれば考える程「殻」とは何か解らなくなりました。当然、今までに考えた事のないことについて考える訳ですから直ぐに「殻」とは何か答えがでる訳がないと思い、まずは色々な企画を楽しみ、その中で答えを出そうと企画に参加しました。

色々な企画に参加してまず感じた事は、企画を通じて色々な方の話を聞く事ができ、色々な考え方・生き方があることを感じました。今までの考え方で判断すると、とても良い生き方・考え方をしているとは思いませんでした。しかし、色々な方の話を聞いているうちに、今までの自分の考え方・判断の仕方が間違っている事に気付きました。自分の経験・知識の中で考えても自分の知識・経験の範囲内の話であって、自分より知識・経験の豊富な方は数えきれない程世の中にはいます。今までは、直ぐに自分の物差しに当てはめて物事を考えていたように思います。そう思い始めた時に、何となく「殻」について理解できた気がしました。「殻」について、簡単に破る事のできないものと解って

ますが、何年か掛けて、自分が今思っている「殻」について破るためにはなにをするのかを考えていきたいと思います。今までは、自分の物差しが周りの人達の手によって伸びていましたが、今後は、自分の手で少しでも物差しを伸ばしていきたいと思います、

2 つ目は

「自衛隊を訪ね、日本の防衛について学ぶ」という企画で自衛官から言われた「一言」でした。実際には、数多くの事を学んだ訳ですが、訓練中にその「一言」を言われた時は、自分の中では本当に「自分は何をしているのか」と考えさせられました。

参加した企画の中でも一番印象に残っている企画でした。自分達が企画したからという訳でもなく（企画については、他のメンバーに任せつきりでしたが）、本当に、忘れられない体験をさせてもらったからです。この企画に参加する前は、戦車を見たり、飛行機を見たり、色々な物を見学し、簡単な体力測定をする程度と考えていました。実際にも、自衛隊の歴史や、最近の活動状況等を紹介して頂き、自分が思っていた自衛隊とは、実際は色々な形で世の中の為に貢献している事も教えて頂きました。自衛隊の厳しい訓練も、何故あそこまで厳しい縦社会を形成するのか？今の時代にそこまでの訓練が本当に必要なのか？と疑問の思う点多々ありましたが、実際に話を聞いて、人の命に関わる仕事をするわけですから、間違いは許されません。絶対に間違いを起こさないためにも厳しい訓練が必要な事が解りました。

毎日厳しい訓練を行っている自衛官に訓練を行って頂き、指先の位置まで指導をして頂きました。

訓練中に「前に出てやって見る人」と言われて誰も塾生からは前に出ませんでした。その時に、自衛官に「何のために来たのか?」「殻を破るために来たのではないのか」と言われました。今でも思い出します。自衛隊に来た目的を考えると自衛官の言われた通りだと思いました。また、「初めにやることに意義があり、2番目にやることは誰でもできる」とも言われました。「殻」を破るためには、自分から一步を踏み出さないといけないと思いました。

訓練の最後には、「労働とは」と質問もありました。「自分が会社の為に貢献し、その見返りとして賃金を貰う」と教えられました。特に会社に入りいつの間に自分自身が受身になっていた気がしました。その時にふと高校時代を思い出しました。

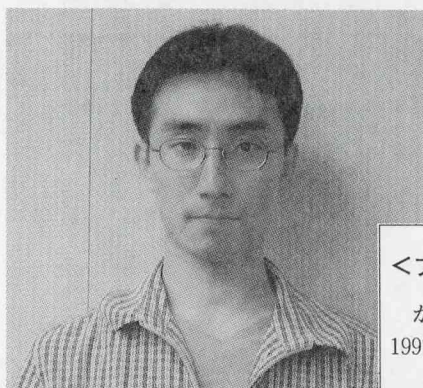
高校時代、私はラグビーをやっていました。ラグビー部に入部した時は、同級生の中に中学校からラグビーを経験している仲間達に、ルールも知らない私が何とか同級生に追いつきたい。また、追い越したいと高校1年生の時思っていた自分を思い出しました。2年・3年生の時は、レギュラーになり愛知県で優勝したい。同じポジションの先輩を「怪我をさせてでも試合に出たい」と、常に目標を持って高校生活を送っていた自分を思い出しました。現在、目標を持たずに生活している訳ではなく、以前に比べて自分で目標を立て、その目標に向かって自分から行動する気持ちが無くなっていると言った方が良くくらいになっている気がしました。無論、高校時代の気持ちに戻る事はできないと思いますが、自分で目標を立て、目標に向かって生活する大切さを痛感しました。

産政塾に参加し、自分を見つめ直すきっかけができ、今後の組合活動・会社生活・私生活に大変有

意義な時間を過ごす事ができました。また、普段では知り合う事のできない方々と産政塾を通じて知り合う事ができました。ただ、全ての塾生の方々と交流を深める事ができませんでした。これも自身がある「殻」の中に入っていた結果だと思っています。閉塾後は、組合関係以外の方々とは中々出会うことは少ないと思いますが、是非、次の機会には、「殻を破って」交流を深めたいと思っています。

最後に、今後の人生の中で、色々な「殻」を破っていかないと成長しないと思っています。直ぐにできる事、性格上中々できない事、色々あると思いますが、産政塾で得た事を單なる思い出にすることなく、何年後には産政塾に行ってから、自分の中で変わったと思えるようになりたいと思います。そのためには、何事も「やらされ感」いう考えを捨て、どうせ同じ事をするのなら、楽しさを見つけ一生懸命自分のために行っていきたいと思っています。

知らない自分に出会うこと



株式会社デンソー

川崎 貴之

<プロフィール>

かわさき たかゆき (28才)

1997年 (株)デンソーに入社

人事部に配属

現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 野球

「カワサキ タカユキ」：

長所：協調性がある。地道に努力する。指示されたことは確実に行う。

短所：自主性に欠ける。積極性がない。広い視野で物事を見ることができない。

これは、アンケートの結果をもとにコンピュータが打ち出した「私」という人物の診断結果である。人事を担当していることもあり、人物を客観的に見るためのこのような診断ツールを自分自身で試す機会が多い。ただ何回おこなっても、おおよそ似たような結果である。そこには特に驚くような新しい発見はなく、せいぜい「やっぱりそうだなあ」と再認識する程度であつた。そして新しい発見がない理由は、約30年生きてきた中で自分の「長所や短所」は確立され、それを誰よりも自分自身が把握しきっているからだと思つていた。

「心の4つの窓（ジョハリの窓）」ということばをご存知の方も多いと思う。これは自己洞察を行う際の考え方の1つであり、どのようにして、「自己理解」がなされるのかを4つの象限によって表現したものである。（「自分でも自覚しており、かつ外にも見せている領域」「自分では自覚しているが外には見せていない領域」「外からは見えているが自分自身では気づいていない領域」「自分も他人も知らない領域」の4つ）。つまり私たちは自分だけでは気づくことができず、色々な角度から見なければ開拓されない領域を持つているのである。この領域を知らなければ本当の自分を知ることではできない。これで考えると、先ほど述べたように自分を把握しているというならば、今までの人生の中の多くの人との出会いや、これまで置かれてきた環境、さまざまな経験によって、もはや私の中の「外からは見えているが自分自身では気づいていない領域」はなくなったということになる。果たし

て本当にそうなのだろうか？

突然だが、あるプロ野球でのエピソードを紹介したい。ヤクルトが西武を敗つて日本一になったときの不動の一番バッターであつた飯田と名将野村監督との話である。入団当時から、飯田の素質は厳しい野村の目を持つてしても一級品であつた。しかし彼はずっと二軍でくすぶつており、苛立ちを感じつつも、自分の限界として現実を受け止めていた。当時彼の守備位置は高校時代から守っているキャッチャー。その適正に疑問を持つた野村は野手への転向を命じた（その時野村は「俺がそのキャッチャーミットを買い取つてやるから、その金でグローブを買つて来い」と言つたそうです。野球選手にとつて今まで守つていたポジションを変えることはとても勇気があること。この言葉には「責任は全部俺が持つ」という意味がこめられていたのでしょう）。野手にコンバートしてからというもの、飯田の野球選手としての素質は見るうちに開花し、あつという間にレギュラーのポジションを獲得したのだった。しかし軌道にのつたと思われた矢先、今度はその素質がマイナスとなる。彼は素質におぼれ努力をしなくなつてしまつた。ある時、故障してしまい、二軍落ちした彼を、野村は故障が治つても一軍にはあげず、全く接点すら持たなかつた。故障前の活躍を考えれば、すぐにでも一軍で使いたかつたはずだが、彼が自分で技術や素質以上に必要なものを感じ取るために、二軍という環境に置いたのである。そこで飯田がどのような思いを持つていたのかは定かではない。ただそれからの野球に対する姿勢、活躍ぶりを見れば、明らかに何かが変わつていた。野村は彼を例に出し、あるインタビュでこう言つたそうだ。「感性が二流であるがゆえに一流の天性をみすみす生かし切れない選手がいるんだ」飯田は二軍に据え置かれた時期に大切なものに気づいたのである。

私は、このエピソードのポイントは2つあると考えた。1つめは新しい環境に身を置くことによって、気づくことの大きさである。彼がもしキャッチャーを続けていたならば、きつとここまでの活躍はできなかったであろう（余談だが彼の入団後、古田という日本一のキャッチャーが入団している）。キャッチャーに固執せず、野手という新しい環境に身をおき、自分の可能性を試してみることによって、自分でも気づいていなかった素質を知ることができたのだ。2つめは感性（考え方）がどれだけ大事なものであるか、ということである。素質だけでは決して成功できないのだ。

自分に置き換えてみるとどうだろう。これまでに自分でも驚くような可能性を感じたことがあるだろうか？もしかしたらそのようなものは初めから持っていないかもしれない。どれだけ探しても見つからないかもしれない。しかし、そのために自分を違う環境においたことがあるだろうか？自分がこちよいに限られた範囲の中ばかり生きてきたのではないだろうか？可能性があるかないかも分からない中で「自分を理解した」と言い切ってしまうのは、間違いなく「感性が二流」だからであろう。自分の可能性を色々な角度から探さなければ。まだまだ「自分自身では気づいてない領域」があるはずだ。

産政塾のテーマである「殻を破る」とことと「自分の領域を広げる」ことは共通だと思う。「殻」はなぜあるのだろうか？それは外の厳しい環境や敵から大事な子供を守るためである。人間の「殻」も一緒だ。「これまでの自分」が一番可愛く大事であるため、それを守ろうとして「殻」をつくり、その中で無難に生きていこうとするのである。きつと今まで築いてきた自分が「傷つけられてしまう。なくなってしまう。」ことが怖いのではないのだろうか。しかし、今回の産政塾で得た経験により、

これは大きな勘違いであることが分かった。「殻を破ること」「自分の領域を広げること」は決して今までを否定するものではない。自分の可能性をさらに広げていくことなのである。卵と違い、人間の殻は何度も破ることができる。これからの人生で何回殻を破ることができるのだろうか？殻はほっておくと、どんどん硬くなるようだ。

今回参加した産政塾は、ある意味強制的に新しい環境に身をおくことで「自分自身では気づかない領域」を開拓できる、殻を破ることができる、またとないチャンスであった。冒頭に書いたように短所が「自主性に欠ける。積極性がない。広い視野で物事を見ていない。」と思っていた私にとって、最初から前向きであったわけではない。参加者名簿には、仕事でつながりがありそうな人はほとんどなし。年齢を見ても先輩ばかり。それに加え企画立案および運営は基本的に自主活動となっている。第1回目の会合に向かう足取りは本当に重かった。しかし回を重ねるごとにそのような不安が楽しみに変わっていった。その楽しみとは少しずつではあるが、変化していく自分に気づくことである。先ほどの飯田選手が新しいポジションにて素質を開花させたように、私の中に隠れていた「積極性」が見え始めたのだ。全く違うフィールドにて活躍されている講師の方々のどこまでも前向きな姿勢やとてもない大きな夢に身をもって触れ、異業種の塾生の皆さんと交流する中で知らず知らずのうちに前に出て色々なものにチャレンジしてみようとしている自分がいた。これは間違いなく「自分自身で気づいていなかった領域」である。

卒塾にあたり、事務局の竹川さんや塾生のみなさんのおかげで本当に楽しい塾生生活を送ることが出来たことへの感謝の気持ちで一杯である。ここに参加していなければ、ラリー車に乗ることも、座

禪を組むことも、ましてや雨の中で行進することもなかったであろう。どれも最近感じることになった「ワクワク感」を与えてくれた。日々の会社中心の生活の中で本当にいい刺激となった（業務時間中というのが、また刺激的だったのかもしれない）。これからもメーテレを見たり、愛知万博の話を聞くたびに、この半年間を思い出すことであろう。そして何よりも素晴らしい仲間に出会えたことはこの上ない財産である。この機会がなければ間違いなく出会うことはなかった皆さんである。せっかく得た財産を決して手放さないよう、これからも大事にしていきたい。最後に、このような自己成長の機会を提供してくれた上司、毎回業務を押しつけられても、文句もいわずに気持ちよく送り出してくれた職場のメンバーに感謝したい。

今、あらためて自分はどのような人間かを診断してみる。

カワサキタカユキ：長所：協調性がある。地道に努力する。与えられたことは確実に行う。積極性がある（ときもある）

短所：時として殻の中に閉じこもりうとする（しかし、そのような時は意識的になるべく早く、殻を破るように気をつけている）

ただ、どのような人間なのかはまだまだ把握できていない。現在も自分の可能性を探している途中である。

産政塾で学んだもの、それは「知らない自分に出会うことの楽しさ」であった。

以上

産政塾 参加前・参加後



アイシン精機株式会社

栗原尚子

<プロフィール>

くりはら なおこ (28歳)

- 1975年12月 刈谷市生まれ
- 1998年4月 アイシン精機株式会社 入社
人材・安全衛生部配属
現在に至る

<家族> 父・母・兄

<趣味> ビーズアクセサリーづくり

△はじめに▽

2003年1月の寒い日から始まった7ヵ月間の産政塾が閉塾し、早数ヵ月が経過しようとしている。開塾する前は産政塾の限られた期間が長く感じられたが、始まってしまふとあつという間の出来事だった。今年、幸いにも与えられた「産政塾への参加」という一つの事象を通じ、私が感じてきた、そして今 感じていることを拙い言葉ではあるがここに書きとめ、自分の卒業論文としたい。

△参加前の私▽

今回のお話をいただいた時、私は入社から5年が経過しようとしていた。会社では入社以来、上司や先輩の指導のもと 言われた仕事を滞りなく進める毎日を重ね、休日には平日が忙しいのを理由に疲れを取ることが最優先になるなど、日常生活に大方一つの流れができあがっていた。

そんな毎日に特に疑問を持たず生活していた私に「産政塾からの問題提起」である。普段そんなことを考えることもなかったが、何はともあれ、せっかく与えられた参加の機会。きっかけは勧められたからであつたが、「何か変わるといいな」という密かな期待を抱いて参加することにした。そして、産政塾の活動は私の期待を裏切らないいくつかの「発見」をさせてくれたのだった。

△発見その１―流れに任せること▽

塾生のみなさんにとってもそうだと思うが、私にとって産政塾はいろいろな体験の場となった。パリダカの話、テレビ局の見学、自衛隊での訓練、坐禪・写経といった企画自体もさることながら、私にとって一番思い出に残っているのは自分のグループのリーダーとなってしまうことである。

常日頃、率先して動くことは少なく、追従するメンバーの立場が多かった私がリーダーに……。数人のグループとはいえ決まった時は本当に困惑し、何をすればよいのかわからなかった。しかし、今思ふとこのことにより「流れに任せること」の面白さ・大切さを教わった。

私たちのグループの企画実施は7月で、最初からやりたいことは決まっていたため、早々に実現に向けて手配をすませ、当日を迎える算段だった。だが、実際にはそんなうまくはいかなかった。メンバーが揃って打ち合わせる機会はなかなかとれず、結局 事務局の皆様にご尽力いただき、企画が固まったのは6月末だった。しかも、下見ができない企画ゆえ当日になるまでどうなるかわからない部分もあった。普段、仕事での私はいろいろキチンとしていないと心配で仕方ない性質であるのに加え、一応とはいえリーダーなので企画が成功するのか不安で、大好きな京都が近づいてきても若干ブルーな気分だった。そんな状態での本番だったが、細かに決まっていなくてもそれが十分プラスに働き、思い出に残る企画となった。そんな京都の一件より、決めたとおりに物事が進むことを重視するだけでなく、ちょっとした心の余裕を持って物事を進めていくのも面白い？と思うようになったのである。また、これについては浅賀ドライバーの砂漠での経験談に「謙虚になる」という別の側面で取り上

げられていた。今まで「流れに任せる」ことができず、あたかも何かに挑むかのごとく頑張ってみたり、自分で流れを作ろうとする生き方をしてきたが、最近そんなスタイルを疲れるように感じ始めていた。そんな私に二つの「流れに任せる」…、これは私の今までのスタイルを省み、心の余裕を持つような心がける契機となった。

△発見その2―能動的に動き、楽しむこと▽

産政塾もいつの日から行かされ感が全くなり、企画も反省会も楽しんで参加するようになった。最初は初対面であることに加え、女性一人という状況下で他の塾生に話しかけるのも躊躇していたが、そのためらいがなくなってから活動を楽しめるようになったと思う。このようなことから「能動的に動き、楽しむこと」の必要性を感じた。

誰でも初めての環境で戸惑い、また初めてやることに対して失敗を恐れた経験はあるだろう。今回の私の経験では、女性一人の中で仲間を作るのに躊躇し、またリーダーとして動くことに対して戸惑いを感じたことが該当するだろう。しかし、塾生としての7ヵ月を過ごし、それもすべて良い思い出になっている。なぜならば、その結果 産政塾の主旨どおり自分の所属組織外に話ができるネットワークを作ることができ、人と関わって物事をやり遂げた時の充実感を強く感じる事ができたからである。

「能動的に動くこと」、これについては自衛隊での訓練で川尻二曹からの熱い指導をいただいたと

おりである。私にとってあの指導どりの能動性を持つまでの道のりは非常に遠い（というかできない？）だろうが、日常生活の小さなことから心がけていければと思う。それは、自分が能動的に関わることであれば、どんなことでも前向きに「楽しむこと」ができ、そしてたとえ失敗したとしても一つの経験として自分に蓄積され、後の自分にとってプラスとなるのではないか、という楽観的な考えを若干持っているからである。

△発見その3ー仲間で産み出す力のこと▽

産政塾の企画は、塾生が力を合わせて一つずつ作り上げていくものだ。参加する側・企画する側をそれぞれ経験し、企画ではグループで協業し、作り上げていく。どのグループも各メンバーに役割があり、誰か一人が欠けても円滑に回っていかないことから、お互いがフォローしあって進めてきたと思う。

これを逆に見る立場となったのが、メーテレでの副調室見学である。ミスのないニュース報道の裏側ではスタッフ一人ひとりのパフォーマンスでのミスが許されないことは当然だが、当日見学の際には普段と違う雰囲気からか、ちよつとしたミスがあった。しかし、そんな時 彼らはそのチームワークで後に影響を与えないようカバーしていた。また、もっと過酷な状況でのチームワークについては、砂漠で生き抜き、レースを行なっていく上でも不可欠、という浅賀ドライバーのお話が印象的だった。つまり大げさに言ってみれば、チームワークは人間が生命を保持する上でも、社会的環境をより良い

ものにする上でも欠かせない重要なファクターだと言えるのかもしれない。

もちろん、私たちの業務の場においてもチームワークは必要である。一人でできることには限界があると思うが、それを自ら限界と決めてしまうのではなく、それを乗り越えるために何をすべきか、何ができるのかを常に考える。そして、限界を乗り越えるための手段の一つにチームワークがあるのではない。小さな一人ひとりの力を合わせて、大きな一つのことをやり遂げた時、その達成感は格別のものだ。しかし、達成すべきことが大きければ大きいほど、単純な一人ひとりの力の合算ではどうにもならない。そこにチームとしての連帯感の有無が影響してくるのである。今まで私が携わってきた業務も、チームでなければ達成できないものがほとんどだった。そんな中、私はメンバーとして指導を受けつつ自分に与えられた課題をこなすのが精一杯だったが、そろそろもう少し自分の外にも目を向けて、その組織における役割を自発的に組み取った上での行動が求められる時期になってきたのかもしれない。

△おわりに▽

以上、稚拙な表現で書き記してきたが、結局のところ 産政塾で私が得た最たるものは「今の自分を振り返る」機会だったと感じている。企画を通し、今まで興味がなかったことを面白いと感じ、見たことのない世界を見、一人では経験できないことを経験することができた。また、塾長、塾生、講師の方々との語らいの中から自分では見えない、気づかなかった物事の見方や考え方があることを知

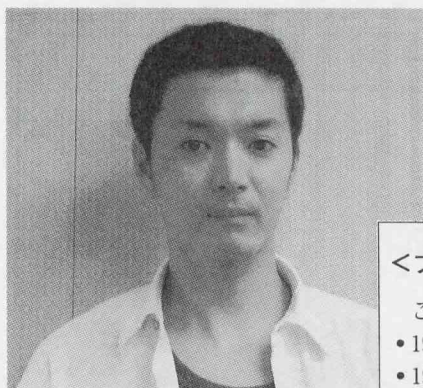
る貴重な機会でもあった。

私自身、問題提起として掲げられていた「殻を破る」がこの7ヵ月間で実現できたとは到底思っていない。ただ、自分を客観的に見て、いろいろと感化されたことが今後の私にきっとプラスに作用するだろう。…というよりも、プラスに作用するように行動していきたい。「これからがスタート!」という塾長の言葉を記憶に留めながら…。

7ヵ月という短い間ではありましたが、塾長、竹川さんをはじめとする事務局の方々、第14期塾生の皆様にはたいへんお世話になりました。初回、心細そうな顔をしていた(はずの)私も、皆様のおかげでご存知のとおり大きな顔して参加するようになりました。非常に楽しい時間を持てたこと、感謝しております。産政塾を通して築いたネットワーク、これからも大切にしていきたいと思っています。産政塾は終わってしまいましたが、これからもお互いに刺激を与えつつ、それぞれに「殻とは何か?」を思索しながら今後の人生も過ごしていけるといいですね。

最後になりましたが、今回 私に参加を勧めていただき、活動への出席の快諾やアドバイスをいただいた上司および職場の皆様にご心よりお礼申し上げます。

三十五歳の前向きな独り言



松坂屋労働組合

小 嶋 直 樹

<プロフィール>

- こじま なおき (35歳)
- 1968年 愛知県生まれ
 - 1992年 (株)松坂屋入社
名古屋駅店和洋酒缶詰売場配属。その後婦人洋品売場に異動。
 - 1996年 販売促進課 (現業務推進課) へ異動
 - 2001年 松坂屋労働組合名古屋支部名古屋駅分会書記長 (非専従)
現在に至る。

「家族構成」独身、独り暮らし

「趣 味」映画・音楽鑑賞、コンサートへ行く、料理、読書、資格取得

「モットー」前向き、前のめり

1、はじめの独り言（産政塾生としての独り言）

「殻を破る体験」をしたいというテーマのもと、産政塾に参加させていただいたわけだが、参加した企画が少なかったこともあり、自らの殻を破る程の体験は得られなかった。しかし、同世代の異業種の方たちと出会い、ひとつの企画を作り上げる過程（といってもほとんどリーダーのお力に頼る所が大きかったのだが。）を経験ができたのは、貴重だった。我がチームの企画が台風の直撃に遭遇し、実行できなかったことが非常に残念だったが、ここで培われた連帯感を大切にしたいと思う。

2、殻を破れなかった人間の独り言

スタート時に提示されたテーマである「殻を破る」とはそもそも自分にとって何であつたかを開塾式の時点まで振り返ると、知らない人とコミュニケーションをする中で、企業を離れた一人の人間としていろんな人の様々な価値観に触れる事で刺激を受け、自分自身を変えていくこととただ漠然と思っていた。しかし今回の経験を通じて、自分自身が今一歩他者とコミュニケーションを進んで行えず、思ったほどの成果が上げられなかったことを素直に受け止めたい。そしてなかなか思うように殻を破れなかった私は、産政塾での体験とは全く関係のない内容も含まれているが、この場をお借りして今後の抱負を書き連ねることで、これからの人生で殻を破っていけるような、自分を変革していくための所信表明としたい。

3、名古屋市民としての独り言

産政塾の閉塾式で、愛知万博の会場視察に参加させていただいたが、案内役の方の熱意に圧倒され感銘を受けた。彼の言葉のひとつひとつには、愛知万博にかける意気込みが感じられ、まだほとんど形にはなっていない会場に立体的なイメージを想起させてくれた。そして愛知青少年公園がまるで世界の中心のように感じられた。

名古屋には、街としてのパワーが感じられない。他府県から友人が尋ねてきたときに、

案内できるようなスポットがあまりにも乏しいように感じられるのは私だけではないはずだ。最近になって、名古屋市の魅力を高めるための、「都心部将来構想案」が打ち出され、名古屋の中心街の再開発の計画が示されたが、私はこれに大いに期待するとともに、その取り組みに何らかの形で少しでも参画しなければならないと感じている。なぜなら、「愛・地球博」を訪ねて愛知新国際空港に降り立った様々な国の人々が、名古屋の街を体験した後に、もう一度名古屋に来たいと思わせるような街のしかけづくりは、ひいては企業の業績を向上させ、私達一人一人の生活を必ずしも豊かなものにしてくれる事を確信しているからである。しかし、そのためには、決して大きなプロジェクトに参画しなければならぬわけではないと思う。名古屋に住む私達一人一人が国際都市名古屋の将来像を共有し、それぞれの企業の中で働きながら絶えず自覚していくことで、底上げが図られていくのではないだろうか。幸い私は、名古屋の玄関口ともいえる名古屋駅地区の企業に勤めている。これからの仕事の中で必ずこれを胸に秘め、形となるよう努力していきたいと考えている。

4、企業人としての独り言

唐突だが、天候は人間性に大きな影響を与えると共に、消費にも大きな影響を与えていると思われる。海外に訪問した際には、天候が温暖な国の人は陽気で明るく（イタリア等）、天候不順な国の人は少し陰気（イギリス等）な国民性を実感した。また日本国内でも湿度の高い名古屋市民はやや粘着質なタイプの方が多いように思われる。

消費の現場に身を置いている私だが、最近特にその業績が気候に左右されているケースを見かける。特に今年の3月～5月にかけては、雨が降る日が非常に多く、大きな影響を受けた。また夏は夏で冷夏となり、結局私は一度も外で泳ぐ事はなかった。地球温暖化が叫ばれて久しいが、季節は時を追う毎に曖昧になり、四季というものが不明確になってきたように思う。このまま環境問題を放置すれば、近い将来に私が住んでいる地域は水没するそう。そうならないために地球に住むひとりの人間として努力をしていくのはもちろんだが、消費の現場にいる私は、そんな不安定な天候にできるだけマッチするような「モノやコト」をお客様に提案していきたい。天候のいい日はさらに気分がよくなるような、また、天候の悪い日は、それを感じさせないようなしなかけ作りができたと思う。

5、労働者としての独り言（アナログ世代とデジタル世代の狭間で）

私は今年で35歳になる。今の業務に携わって以来、多少パソコンを触ることとなり、

今では、いわゆるITのメリットは否定すべくもない。一方、私達の世代よりもっと上の世代ははっきり言ってPCを使いこなせないばかりか、使いこなす必要がないと思っている方も見える。確かに今まで培った経験をもとに業務を進める上でほとんど支障がないため、必要なことのように思われているふしがあるが、使っている部下の立場に立つて物事をみる視点を持ってない。しかし、その培われた経験は、かけがえのないものであり、必ず後世に伝承しなければならない貴重な経営資源と言える。また一方では、私達よりもっと下の世代では、学校教育の時点から当たり前のようにIT（携帯電話等のPDAも含む）を使いこなしている世代であり、その日常生活における価値観は非常に重いのと思われる。あるテレビ番組で行ったアンケート結果では、渋谷の若い人に聞いた最も大切なものの一番目に携帯電話を上げるほどの位置付けである。（水や空気よりも重いらしい。）極論すれば、IT文化に依存している世代とも言え、多分に効率ばかりを追求し、人間として本来必要と思われる生身のコミュニケーションを疎む傾向さえも伺える。

こういったジェネレーションギャップは、労働組合の活動の中でも顕在しており、様々な課題を検討する上で、この世代間闘争のようなものが年々大きくなっているように感じられる。私はこの双方の気持ちを理解できる世代の人間として、世代間を繋ぎ、コンセンサスを得る橋渡役を担っていきけるよう努力していきたい。

6、日本人としての独り言

今年の正月、私は知人の工場長と飲む機会があったのだが、今、もの作りの現場を支えているのは、日本人ではなく、外国人であることを知り少なからず驚いた。上がりつづける失業率に相反して、いわゆる一昔前3Kと言われた重労働の業種には多くの求人があるという事実、いわゆる労働需給のアンマッチの具体例を示されたわけだ。少子高齢化は、先進国の避けては通れない現象と言われるが、このまま高齢化を続けると、国力を維持するために近い将来日本は多くの移民を受け入れざるを得ないという事実もある本で知った。また最近、日本人が将来移民となるといった亡国論をテーマにした本や映画をよく見かけるようになったのは、こういった時代背景への警鐘とも思われる。

また一方では、若い世代の乱行が目立つ。未成年が殺人を犯してしまう現代社会は、日本全体の閉塞感の現れではないか。横並び意識の強い国民性は憂いても仕方ないのかもしれないが、中高生が欧米のスーパードラッグの商品を持ち歩くのはもはや正気の沙汰とは思えない。私は、市内の公団住宅に住んでいるのだが、つい先日にも夜中に非常階段でシンナー遊びに耽る女の子を見てぞつとしてしまった。またある時には、コンビニの店頭の地面に寝そべり、携帯電話をかけているセーラー服姿の女子高生を目撃するにつけ、そのマナーうんぬん以前の態度に、驚きを通り越して、日本の未来に対する不安を強く感じずにはいられなかった。日本人としてのマナーや誇りやモラルはいつたいどこへ行ってしまったのだろうか。

私がみた事例はごくごく極端な一例にすぎないのかもしれない。若い世代でも、もちろん人生を真っ当に生きている人達がいることは理解している。むしろ私はこの現象をいろんな瑣末な悪い現象の積み上げが形となって現代社会に表れているものと捉えている。

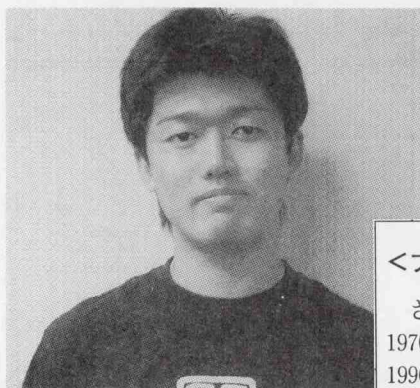
私の親は戦争を経験している。たまに実家に帰り、かつての古き良き時代の日本や日本人の姿について話すのを聞く度に、ある種の憧憬とそんなことを言われても成熟してしまったものは仕方がないのではないかという複雑なジレンマを抱いてしまう。ただ、戦後の高度成長期に彼らが頑張って豊かにしてきた日本が失われてしまうような事態は何が何でも回避しなければならないことは間違いない。

7、おわりの独り言

ここまで長々とつまらない文章を書き連ねてきたわけだが、結局全体のトーンを統一している私の課題が、「情報の伝達とコミュニケーションの活性化」に尽きることに最後に気付かされた。いささか堅苦しい表現だが、私はこれからの人生の様々な場面の中で、これを永遠の課題として取り組んでいきたいと考えている。

最後に、産政塾Cチームの皆さんに感謝の意を申し述べるとともに、この私の「独り言」がひとりでも多く人に伝わり、共感を得られることを祈念して、末筆とさせていただきます。ありがとうございました。

陸上競技と私



アラコ株式会社

佐藤 源 信

<プロフィール>

さとう もとのぶ (32歳)
1970年12月 名古屋市生まれ
1996年 5 月 アラコ株式会社入社
人事部配属

<家族> 妻、長男

<趣味> ジョギング、ツーリング

《始めに》

「産政塾に参加してみないか？」と上司に言われ、『第十四期生募集』の案内に目を通した。

そこには『新たな次代を担う活力ある若人の派遣を』とか『将来のリーダーとなる人材に・・・』などの文句が書いてあり、「いったいどんな事をする集まりなのだ？自分が行つて大丈夫だろうか？」と不安になりました。

そこで昨年の参加者に話を聞くと「山に登ったりボクシングをしたり。それと毎回懇親会があり、酒が飲めて楽しいところだった」と意外な返事でした。とりあえず机に座っているだけの研修会ということではなさそうなので少し安心しました。

もともと断ることなど出来ません。強制的に参加が決定してしまいました。

《殻とは？》

「殻の外へ踏み出そう！」がテーマの産政塾ではあったが、このテーマの意味を考えてみることにします。

ここで言う「殻」とはいったい何なのだろうか、よく「自分の殻」なんて表現をしますが、「自分の殻」というのは比喩的表現であり、言葉を変えれば自分の価値観みたいなものだと思うのです。今まで経験してきた中で形成された自分の中の常識とか判断基準と言えるかもしれません。では自分

の価値判断を理解しているかというと今までに真剣に考えたことが無かったため答えがハッキリ出てきません。そこでまず、「自分の価値観」は何か?という観点で改めてこれまでの自分を振り返ってみることにします。

《陸上競技》

○キッカケ

今までの自分を振り返る上では欠かせないのは中学のころから15年続けていた陸上競技（長距離走）です。始めたきっかけは中学の1年生のときに持久走（千五百m）を走って学年で一番速かったからというのがキッカケです。小学校のころは勉強も運動も出来なくて自分に劣等感を持っていたのですが、始めて「俺ってすごいじゃん!」と思えるものがあって、そのときから将来は陸上競技の選手になりたいと思っていました。

○目標の重要性（自分の殻）

そんな感じで始めた陸上競技だったのですが、中学、高校、大学、実業団、と長く続けていくうちにあることに気付きました。それは「目標の持ち方によってその選手の競技力は大きく変わるのではないか?」ということです。目標の重要性と言っても良いのですが、例えば、県大会優勝を目標にしている選手では全国大会での優勝を目標にしている選手には勝てないのです。目標とは「こうなりた

い」という自分を思い描くことだと思うのですが、それは言葉を変えれば「自分の殻」と言えるものだと思います。その設定が低ければ低いほど競技力の向上は難しいでしょう。もちろん目先の目標は低くても良いのですが、将来的な大きな目標が重要になってきます。高い目標を設定して、「いつまでにどのくらいのことをしなければならぬか？」を真剣に考えている選手のほうが監督に言われたままに練習を行っている選手に比べ強くなると思います。自分の力が数字（タイム）になって現れる陸上競技は各選手の実力がわかりやすい反面、自分の限界を作りやすい競技だと思います。もしかしたらすごい力があるかもしれないのにこんなタイムで走ったら最後まで持たない。と自分のなかで限界を作ってしまうのです。ですから少しずつしか記録は伸びていけないのが一般的ではないかと思えます。

○環境の変化による殻破り

わたしの場合、中学時代は全国大会に出場しようとかは全然考えてなくて学校のなかで何番目とか、せいぜい市の大会で入賞したぐらいで喜んでいました。ところが、高校は陸上の強豪校へ入学したので、周りのチームメイトはすでに高い目標を持っていました。そういう環境の中で、自分の目標も自然に高いものになって行き、競技力も上がっていきます。環境が変わったことにより自分の殻が破れたのです。

○仕事は走ること

大学を卒業し、実業団に入ると学生時代のクラブ活動との違いに戸惑います。練習の質・量が違うのはもちろんですが、私の入った会社では時間・手当てを考慮してくれました。給料をもらって走っているという点が一番大きな違いだと思います。通常の仕事も一応はするのですが、勤務時間も短く、時には合宿で一カ月近くも出社しないので、仕事についてはあまり多くを求められません。「走る」というのがメインの仕事になるのです。当然、そうなれば結果を求められます。この「結果を出さねばならない」というのが結構なプレッシャーで、要求されている結果を出せなければその環境に居られなくなってしまうです。

そんな環境でしたので「走って結果さえ出していれば他には何もしなくて良い」という考えをもつようになりました。またそのころ出会う人の多くは陸上関係者でしたので皆、同じような価値観を持っています。（自分がそう思っているだけかもしれませんが）

今思うと他の心配をしなくて良いほど競技に集中できる環境を作ってくれた会社や監督に感謝していますが、選手時代は引退してからのことはほとんど何も考えていませんでした。自分が引退した後イメージがつかめず、考えなくなかったのが本音かもしれません。

○引退（心が折れてしまった。）

しかし、一生競技を続けていけるはずも無く、引退は必ずやって来ます。私は自己管理が悪いのか、非常に故障の多い選手でした。まあ年間で10、000km弱も走っているところと比べると痛くなるものです。28歳の頃になると『日常的にいつでも足が痛い』という状態が続くようになりました。

朝起きると足が痛くてまともに歩けません、布団のなかでマッサージをしてから起床し、歩きながら徐々に足をほぐしていくのです。そうしないと普通に歩くことすら困難です。それでも何とか日々の練習をこなしていたのですが、ある日『事件』が起きました。練習中に足をひねって転倒してしまったのです。そのときの怪我自体は単純に捻挫したぐらいのレベルだったのですが、精神的にはなぜかものすごい喪失感があり、心が折れてしまったのです。

「引退」が現実的なものになるとすごく不安に襲われました。自分は今まで走ることにしかしていないが、今から会社員として働いていけるのだろうか？

○特殊な走る仕事から会社人間に

引退することにより、今までの生活はガラッと変わることになります。それまでは片手間にやっていた仕事が生生活の中心になってきました。28歳になってようやく仕事を始める自分です。引退して体は楽になったのは良いのですが、今までとは違うプレッシャー・ストレスを感じました。

それまでずっと働いてきた人と同じように仕事は出来ません。ところが第3者から見れば28歳ならこのぐらいの仕事は出来るだろう。というような目で見られます。それは今になっても私を苦しめているのです。

また、現役時代は自分のことを考えます。個人スポーツだからかも知れませんが、極端に言えば自分の競技力向上のためなら他はどうなっても良いのです。もちろん駅伝はチーム競技ですが、それも各個人の力があつてのことです。「人のことを考えている余裕は無い」というのが正直なところでし

た。ところが仕事となるとそうはいきません。集団での協調性のとり方、人間関係、今まであまり考えなくても良かった「集団の中の自分」を考えることが重要になってきます。学生時代からの自分の価値観を変えなくてはなりません。走れなくなった自分には今までの価値観は合わないのです。そして、価値観だけでなく自分の中で「目標」がなくなってしまうことに気がきます。与えられた仕事を漫然とこなしていく、そこには「目標」であった「夢」みたいなものを持ちにくいのです。目標の重要性は前に書きましたが今の自分には明確な目標が無いのです。

○会社人間としての自覚と心構え

そうはいっても「陸上部を引退した社員は仕事では使い物にならない」と会社に思われては、今後引退する後輩たちの可能性を閉ざしてしまうことにもなります。会社勤めをする以上は、仕事を全うすることが目標でもあるわけですし、陸上部を引退し会社に残ったモデルケースになる様、頑張らなければなりません。

《産政塾に参加して》

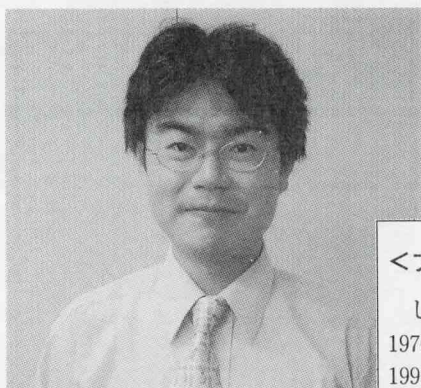
引退し、仕事を始めて約5年。いまだ新しい価値観、目標を模索している中での産政塾への参加は私にとって貴重な経験になりました。パリダカ、TV局、万博会場、そこには、今まで私が過ごしてきた環境とはまったく違った世界がありました。そこで活躍する人たちは私とは違った価値観を持つ

ています。その人たちの価値観を考え受け入れること。その上で良い部分は吸収し、自分の成長に必要なれば良い。『殻を破る』とはそういうことではないかと思っています。

《おわりに》

最後になりましたが、今回の産政塾に当たりましては事務局の方々、14期生の皆さんには大変お世話になりました。皆さんのおかげで本当に楽しいときを過ごさせていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

月末の格闘～横浜編～



刈谷市役所

白井 崇 夫

<プロフィール>

しらい たかお (33歳)

1970年 7月 刈谷市に生まれる

1993年 4月 刈谷市役所入所
都市計画課配属

1998年 4月 同所 市民税課勤務

2001年 4月 同所 税務課勤務

2002年 4月 同所 企画政策課勤務
現在に至る

<家族> 妻

<趣味> まずはビール、パソコン、
キャンプ・スキーなどアウトドア全般

締め切り間近

唐突だが今、横浜にいる。ホテルの部屋でこのレポートを仕上げている。なぜかというところ、私は職場で担当している広報の仕事の関係で、今日から2日間、横浜などとみらいで開催されている一眼レフカメラによる撮影技術習得のためのセミナーに参加している。またなんどこんなどころまで来てこんなものを書いているかというと、このレポートの締め切りがなんと明日に迫っているからである。ずっとやろうやろうと思いつながら、結局このていたらく。何でもぎりぎりのところまで引つ張つてしまいがちなのは、私の悪い癖だ。最大限に時間を掛ければ、それだけ良いものができるのではないかと無意識の意識が働いている節がある。またはその切迫感を逆にエネルギーにしようなんて考えているのか。しかしてその実体は、ただのものぐさ太郎。

だいたい第8回「閉塾式」の案内が届いたときに、「やれやれ最終回。これで一区切りだな。」と思いつつ読むと、最後にレポート提出の案内が……。あれ、フォーラム係のレポートを書けば終わりかと勝手に思ってたけど、まだこんなのがあったのね。たぶん初回の入塾式で説明なぞ受けたのかもしれないが、すっかり抜けていた私には、2000字書いてさらに4000字の宣告に正直「うへえ」。

また同じネタで書いてもしょうがないし……。などと今さら愚痴ついてもしょうがない。ともかくも進めることにする。

プロの仕事

今日は主に雑誌向けの写真を撮影している講師から、一眼レフカメラでの撮影のいろはを教えてくださいました。やはりプロの技術は大したものだ。アドバース一つ一つがツボを押さえており、結果がそれについてくる。目や体ですとんと納得できる。去年、広報に来て初めて一眼レフに触れ、これまで「これ写したの誰だ?」「こいつです!」とカメラを指すごとく、ほぼカメラ任せばかりの写真を撮撮っていた素人が、半日の実習であつという間に露出の合わせ方や光の使い方、構図など次々と学び、なんだかもう、かなりわかったような気持ちになっている。今日撮影した写真の良し悪しは、まだ明日の現像結果を見てみないとわからないが、それでも自分なりにいい手応えを感じている。

産政塾の企画でもそうだったが、毎回、その分野の専門家の仕事に触れ、その現場を見たりと仕事に対する心構えなどを聞いたりするにつれ、プロの仕事はこうであつたのかとの感銘や、自分の仕事との比較の中から教訓を得られたりした。自分で言うのもなんだが、元来、私は素直な性格である。毎回の企画ごとに、職業体験の学生に戻つたような気持ちで、新鮮な驚きを覚え、おおそつたのかと感激することができた。とても良い経験だつたと思つている。

自分の仕事

こうしていろいろと覚えられ、自分の身についていく作業は楽しい。以前は税務の仕事をしており、

そこでは税金のことなら俺に聞いてくれと言いたくなるぐらいになれるのを目標にしていた。今は、カメラのこと、ホームページのこと、広報編集のことなど、任してくれと言える自分が目標である。どうせやるからには、いいかげんな仕事はしたくない。誰にも負けたくない。負けず嫌い？頑固者？何とでも言うて欲しい。自分がそうしたいと思っただけなのだ。

ただ、どうしても新しいことには及び腰になってしまふ。「最初から上手にできるわけないし、そこまで期待されているわけでもない。」（by 第4回自衛隊川尻2曹）妙に構えず取り組めば良いのかもしれないのだが、なかなかそうはいかない。理屈っぽくて融通がきかないと思われるフシもある。これも私の「殻」の一つなのだろうか。

はじまり

話は1月にさかのぼる。「殻を破る」、このテーマが今回、つまり第14期産政塾の案内パンフレットに書かれていた。参加が決まった時、どうやらこれから私が行くことになった産政塾というところは、私についている殻を破る手助けをしてくれるらしい。そもそも殻って何だ？普段どおり仕事をやってる中で、目の前の仕事に埋没し、そこから先の自分が見えない、漠然と周囲に控える壁のことだろうか。破ってしまったてはまずいタブーのようなものなのかも。感じ方は人それぞれ。そんなめんどくさいことという悪魔のささやきを振り払い、でもそこに感じる壁は、自分の可能性の限界値。今は見えないその先を見られるのかもしれないというのなら、やってみるのも悪くはない。

入塾式

これからやることも趣旨もよくわからないうちに、初回の入塾式を迎えていた。職場で広報担当となつて2年目、日々締め切りに追われる中で（思えば今も塾誌の締め切りに……）、面白そうではあるけれども、もう一つ余分な仕事を抱え込む気がして、複雑な心境であつたことを思い出す。新しい仲間と初顔合わせ。あわただし名刺交換。

自己紹介では、みんなつるつるしゃべるしゃべる。やはり天下のトヨタ、また大企業の社員とになればこうなのか。先年、産政塾に参加した先輩から伝え聞き、きごちないながらも、印象を深めてもらおうと話に工夫をなどという考えて話し、それなりにうまくやったと思つてはいたが、やはり皆さん話のツボを心得ているというか……。きつと結婚式の司会などもさりと勤めてしまうのだろう。こんな芸達者さんたちとこれから渡り合つてゆくのね。置いていかれないようにがんばろう。

この日は皆で体験してみたい案を持ち寄つた。この中から選ばれた5つの企画に、この後、順次参加していくこととなる。私たちのグループの企画は「自衛隊訪問」。私自身、行つてみたくて出した案が通つたのがうれしい。ポイントは産政塾初の企画というところ。ほかのグループの企画も興味をそえられる、面白そうなものが並んでいる。どうやら楽しくやつていけそうである。

企画あれこれ

企画は3月からスタートした。それぞれの様子は既にレポートに書かれており、改めて詳細を記すのは控えることにする。

第2回、世界の第一線にいるラードライバーにパリダカの話聞き、出場車に乗せてもらった。これ以来、パリダカに関するニュースは、私の楽しみの一つとなった。

第3回、名古屋テレビを見学した。憧れの大川アナウンサーに会えて、かなり感激。夕方のニュースも、なかなか見ることはできないものの、次に見るときには視点も変わっているのだろうと、やはり楽しみになった。

第4回、自衛隊の厳しい訓練と独特の職業観に接し、特別教練で雨に洗われた。以来、航空祭や基地の開放日にはぜひまた行ってみたいなどと思ったりしている。

第5回は、北九州に遠征の予定だったが、台風のため中止となった。先回に続き、どうも雨に祟られているかのよう。楽しみにしていた企画だけに残念だった。

第6回の京都は、幻と消えた北九州の後では、正直ともかく遠くへ行けるというだけでも魅力を感じていた。たどり着いた南禅寺は、京都東山の麓、時代を経た緑に囲まれ、真夏だというのに涼気を感じる。遠くに滝の音が響く静かな禅堂。そんな中で一度はやってみたいと思っていた座禅と写経。やってみた感想は？毎日1回、いや1週間に1回でもいいから、無心に遊ぶ時間を持つのはいいことだと思う。心に平安が満たされ、「不動心」を養えば、物事があるがまま、受け止められる力となるような気がする。難しいことではあるが、続けてみたいと言っていた塾生の気持ちかわかる。

最終回は閉塾式のみの予定であったものが、万博会場の見学が加わった。最大のイベントとなるは

ずであつた北九州がなくなり、レポートのネタに困ることのないようにとの事務局の心配りでもあつたりして。ここでは、図らずも十数年前、自分がやりたいと思つていた仕事の現場を見学する機会を得た。ブルドーザーとダンプが走り回り、まだまだ土を掘つたり均したりしているだけに見える会場予定地。2年後、ここに世界のお客様をお迎えすると、案内役の方は情熱的な語り口で説明をしてくれる。もしかしたら自分がそんな役をやつていたのかもしれないなどと想像しつつ、やはり再来年にはきつと見に来ようと思つてしまう。

殻って何？

いずれの企画でも、いろいろな人に話を聞く中で、興味も広がり、幸せな経験ができたと思う。ところで、そもそもの「殻」は一体どうなったのか？

最終回の閉塾式で誰かが言っていたのだが、8か月に及ぶ産政塾で、新しい仲間と知り合い、今までしたことのない体験を重ねてきて、そもそもそれら自体が「殻を破る」ということではなかったのだろうか。

殻とは何であろう。自分を取り巻く殻？それとも自分の心の中の殻？

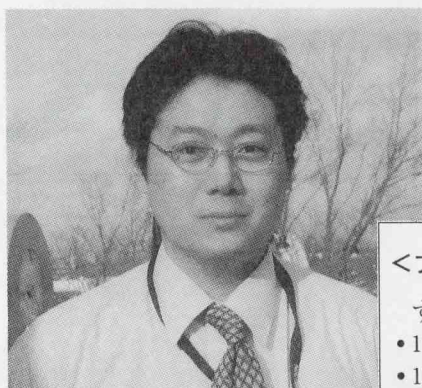
殻を破るということは、内なる秘めた積極性、心の声に、「失敗したら恥ずかしい」「めんどくさい」などと耳をふさぐことなく、物事に取り組む姿勢を指すのではないか。自分を取り巻く殻も、先ずは自らの殻を打ち破ることによって、開けてくるのではないだろうか。

この産政塾に参加して様々な経験と新しい仲間恵まれたことを糧とし、これから開ける現実に対して前向きな挑戦の心を忘れず、その時々に出会っていくであろう新しい仲間とともに挑戦・消化して自分の血肉に取り込み、再び糧としながら、これからも殻を破り続けていきたいと思っている。貴重な機会をいただいたことに感謝している。

・・・

さて、目下の問題は、せっかく書いたこの原稿をどうやってメール送信するかだ。本日の安部屋はインターネット非対応である。はてさて。

産政塾を振り返って



全トヨタ労働組合連合会

鈴木 輝 行

<プロフィール>

すずき てるゆき (31歳)

- 1972年11月 豊田市生まれ
- 1996年 8 月 アラコ(株)入社
- 1998年 9 月 アラコ労働組合執行委員
- 2002年 9 月 全トヨタ労働組合連合会へ派遣
現在に至る

<家 族> 父・母 ※独身貴族

<MYブーム> 鏡月(焼酎)の緑茶割
(むちゃくちゃ美味しい)

「自分の殻をやぶる」という非常に大きなテーマで産政塾はスタートしたわけであるが、産政塾を終えた今、正直言つて「殻」というものが何で、それが破れたかと問われるとはつきり言つて「破れませんでした」と回答するしかない。しかし、今回の産政塾の塾生に選んでいただき、みんなが体験することのできない「きっかけ」「チャンス」を頂いたことに、今、この「レポート」を書く上で、改めて再認識し、感謝している。

【目の輝き】

産政塾の企画で、ラリーでの経験を通して「挑戦」することの大切さ・素晴らしさをご講話いただいた。その中で、ドライバーの方の「目の輝き」に頭をハンマーで殴られた位の衝撃を受けた。それは何か、言葉で表現することが出来ない「苦勞」「試練」「葛藤」「喜び」等を経て勝ち得た「自信」から来るものなのだろうと感じた。正直な話、「60近いおっさん」である。そのおっさんの眼はまさしく「少年の眼」をしていた。はたして自分自身振り返つてみてどうだろうか。「少年の眼」Ⅱ「いきいきとした眼」を持つているだろうか。ほんの少し前にある知り合いの方にこう言われた。「最近丸くなったなあ」「昔はもつと尖つていたのになあ」これはどういう意味か。言われた当時は意味がわからなかった。

捉え方によつては、「人間的に成長した」と捉えることができる。しかし、今思うと、「入社当時はいきいきとした眼をしていたなあ」「今のおまえは眼が死んでいる」このことを僕自身に言いたかつ

たのではなからうかと思い、改めて反省している。では、実際どうすれば「いきいきとした眼」を持つことができるのであろうか。机上で「ああだの」「こうだの」考えても始まらない。当たり前の事が当たり前に出来なくなりつつある自分自身対し、何に対しても常日頃から「素直な気持ち」を持つことを改めて心がけよう。そして、自分自身が「60近いおっさん」になった時、周りの人のひとりでも「あのおっさんいきいきとした眼してるなあ」と思われるような生き方をしていこう。

【賛成塾の塾生ではない】

次に、陸上自衛隊（豊川駐屯地）を訪ね、「日本の防衛について現状を知る」という企画で自分自身が「なるほど」と感じたこと、それを受けて思っていることを書くと思う。

テーマは非常に重すぎて、難しい。ただ、雨の中の「基本訓練」で、教官に「まずは自分が最初に動く事！2番目・3番目に動く事は誰でもできる。」「最初はできなくて当たり前、失敗を恐れて誰かを見て真似してではダメです。」この言葉は改めて心に残る言葉であった。

自分自身を振り返ってみて、特に「仕事」においてこの「失敗」という言葉を気にしすぎていたところが多分にあったから特に気になっていたのであろう。人間誰でも「失敗」は嫌なものであり、「上手くこなしたい」という気持ちは持っているはず。しかし、あまりにこの「失敗」を恐れる事によって、「自分らしさ」を押し殺していいのだろうか。本来自分はこのように思っているが、「周りがかう言っているから」なんて、周りに流され、本来言うべきこと、考えるべき事を自ら否定し続けて

いないだろうか。みんなで論議し、決めたことに対し、みんなで守る。この過程において、「論議」という自らの意見を発する場に同席しながら、今の自分の役割りににおいて、責任を果しきれているかどうか。長いものに巻かれすぎているだろうか。ただ、自分の意見を言わず、ただ、「賛成」するだけの「賛成塾」の塾生に成り下がってはいないだろうか。改めて考えさせられる教官の言葉であった。

【チャンスを活かす】

産政塾に参加し、自分の殻を破るということを考える「きっかけ」を頂くことが出来た。

ただ、未だに「殻を破るとはこれだあ」と断言できずにいる。しかし、僕自身がおかれている環境の事を考えると、まさに「チャンス」なのである。労働組合という会社とは違う組織に身を置き、「組合員の為に何が自分自身にできるだろうか」ということを常に念頭におき、今現在に至っているそうした中で、「こうしたら良いのではないか」「ああしたら良いのではないか」とみなで論議し、結果を導き出す。その中で、周りの上司、先輩、同僚の方々と同じ目標を持ち、その中で「損得勘定抜き」で、真剣にぶつかり合うと同時に理解し合える。互いを認め合い、認め合うからこそ生まれる様々な考えややり取り。その過程において、「なぜ、そこまで・・・」「そこまで言うか・・・」などの激しい論議もしばしば行われる。しかし、それは同じ目的を持つ仲間同士がともに新しい取り組みに挑戦しつづけるからこそ生まれる産物なのである。そんな環境下で、僕自身「自分には何かが不足

している」という「気づき」があり、その「何か」を自分の物にしようと「もがく」。今は結果として形にはなっていないが、きつとこの「不足している何か」を手に入れた時、初めて「殻を破る」とになるのではなからうか。

何十枚何百枚もの人生の殻のほんの一枚に過ぎない殻だが、必ずや「殻を破る」ことが自分自身にとつての「自信」に繋がるのであろう。（繋がって欲しい）それと同時に、改めて自分自身の「殻を破れた」のは、周りの方々の「目に見えない協力」あつての事と実感するであらう。（実感したい）

【最後に】

今回、産政塾への参加によつて自分自身を振り返るといふ貴重な機会を与えて頂いた。正直仕事も私生活もこれと言つて「挑戦」しようとか、この「目標」に向かつてといふことを考えていたように考えていなかった自分を反省し、少し大げさだが、今後の人生に活かしていきたいと思う。ていうか、この「反省し今後に活かす」この考え自体が「殻を破る」ということにつながるのかもしれない。

鏡月（焼酎）の緑茶割（むちやくちや美味い）

『壁』の「はなし」



中部電力労働組合

鈴木 利 幸

<プロフィール>

すずき としゆき (32歳)

- 1970年12月 静岡市に生まれる
- 1993年 4 月 中部電力(株)入社
長野支店大町電力センター発変
電課配属
- 1997年 8 月 長野支店工務部計画グループ勤務
- 1999年 8 月 本店工務部計画グループ勤務
- 2002年 6 月 中部電力労働組合

本部常任執行委員

現在に至る

<家 族> 妻、娘 2 人

<趣 味> 音楽鑑賞・カラオケ
他マニアな趣味少々

「殻がどうしたって？」

友人は聞き返した。さすがに金曜日の居酒屋は騒がしく、会話も聞き取りにくい。

「だから『殻の外へ踏み出そう』って話だよ。」

彼は少し大きな声で答えた。

「あのなあ、そんな小難しい話はまた今度にしてさ、阪神タイガースの話でもしようぜ。あつ、店員さん、生ビールもう一杯！」

「別に小難しい話じゃないだろ。」

「じゃあ、訊くけどさ、『殻』って何だよ。」

既に顔が少し赤くなっている友人は、突然真面目な表情で尋ねてきた。

「えっ!？」

二人の会話が一瞬止まり、店内の賑やかな会話がいつそう騒がしく感じられた。

「どっかのSFアニメにもあっただろ、『なんとかフィールド』とかって。」 友人が口を開いた。

「ATフィールドだろ、エヴァの。」

「えっと、そうそう『心の壁』! 人ってさ、他人との間に壁つくっちゃうだろ。人なつつこい、とか人に接するのが得意な人はその壁が薄いつてことだし、人見知りする人は分厚い壁を速攻で自分の心の中に作っちゃうつてことだよな。」

「ふうん。」

わかったようなわからないような曖昧さを残しながら彼は相槌を打つ。

「もうひとつ、人は壁作っちゃうんだよ。わかる？」

「さあ？」

彼の返事にはあいかわらず力がない。

「自分の中に『限界』って壁作るんだよ。例えば、中学や高校の体育とか部活で長距離走らされて『もう限界！』って言ってグラウンドにへたるだろ。でもさ本当に限界かって言えばそんなことないよな。死ぬ気になればまだ走れるよな。そういう事、今でもあるんじゃないか。」

「・・・」

「仕事がかくそ忙しくて、『もう間に合わない』とか『仕事量が多すぎる』なんて言いながら、自分で自分に『限界』を作ろうとすることないか？」

「それは・・・あるよな、やつぱり。」

「だろ？」

俺の言う事は正しいのだ、という自信を含んでいることがありありとわかる語気で、友人は続けた。その壁ってさ、さっきの『心の壁』とは全然違うような、違うんじゃないような、結構難しいと思うんだ。『心の壁』は対人関係で『限界の壁』は仕事とか苦労のような自分の問題だ、そう理解してしまえば、全然別の話だし、心の中に作られる『何かいやだな、ダメだな』って気持ちだと理解すれば、同じようなものだと考えられるだろ。」

「訳わかんなくなってきた。」

「だから言つたら、小難しい話だつて。お前が振つたんだぜ、この話題に。」

「それは・・・そうだけど。」

「まあ、いいや。次の店行かないか、もつと静かなところ。」

彼は友人の提案に黙つてうなずいた。

友人に連れられて入った店は、静かなバーだった。よくこない店知ってるな、と喉まで出かけたが、きつと彼女を連れて来てるのだらうと思い、彼はそのセリフを飲み込んだ。

さつそく、友人は話の続きを語り始めた。

「お前の言う『殻』がどんなもんかよくわからないけどさ、自分の『殻』をイメージできなかったら、そもそも『殻の外に飛び出す』なんてできないぜ。」

「・・・」

「まあ、いいや。それで、お前その『なんとか塾』で何してきたわけ？」

「産政塾！ えっと、パリダカに参加している人の話聞いたり、自衛隊で基本教練の体験したり。」

あとは、京都で座禅と写経。」

「ふうん。おもしろそうじゃん。それ自腹？」

「違う。組織が負担する。」

「いいなあ。会社の金でそんな体験できるなんてうらやましいぜ。ウチの会社なんてよ、通信教育だつて半ば強制なのに自腹だぜ。ましてや、体験学習なんて中学・高校の社会の授業じゃあるま

いし、全然関係無しさ。」

「普通そうかもな。」

彼は他人からそういう感想を聞いて、産政塾に参加できるというのはやはり非常に恵まれていることなのだと言認識した。

「でさ、産政塾とやらに参加した後、参加する前とは何か変わった？」

友人は少しにやつきながら尋ねてきた。いや、友人は実際にはにやついていないのかもしれないが、彼にはそう感じられた。

「変わったかつて訊かれれば・・・そんなに変わらないかな。」

彼はそう答えながら、痛いところを突いてくるな、と思った。

「そりゃ、そうだろう。そんなに人間変わるもんじゃないぜ。」

「それはそうかもしれないけど。」

「1軒目で話した『壁』の話の続きだけどさ。」

「あ、ああ。」

「多くの人と触れ合ったから『心の壁』が無くなるってでもないぜ。そりゃ、人に会わなくて済むのと、会わなきゃいけない状況に置かれるのでは、無論違うと思うよ。でも、『壁を作ってしまう意識』というものは各個人の性格に依るところも多いしさ。自分の性格ってそう変わるないじゃん。」

「まあな。同窓会でも『全然変わんないな』って思うくらいだし。それは話ちよつと違うか。」

「それと『限界の壁』もさ、突破するにはマジでギリギリまで努力しなきゃダメだろ。よく、試合の好結果は練習の成果だって言うよな。あれはさ、本当に一生懸命練習したらさ、無意識に体が練習でやったように動くって事もあると思うけど、もう二つは、あれだけ辛い練習に耐え抜いたんだから、少々の苦難でも突破できる自信になるんだと思うぜ。」

別にバリバリの体育会系でもない友人にそんな説教されるなんて思ってもみなかったが、真顔で語る様子に彼は妙に納得してしまっていた。

「そういう俺も、酒飲むと語っちまう性格は変わらないけどな。」

ふと、我に帰ったのか、友人は少し照れ臭そうに言った。

「一生変わらないよ、その性格は。」

彼は思わず苦笑いを浮かべた。

「だからさ、産政塾だろうと、なんとかセミナーだろうと、そういうのに参加したからって、『殻の外に踏み出す』なんてすぐにはできないと俺は思うよ。」

「じゃあ、意味無いってことか？」

「そうは言っていないぜ。」

友人はまたにやつきながら答えた。

「ガッコウで習った公式とか年号って今でも覚えてるか？ 微分積分とかさ。」

「忘れちゃってるさ、そんなの。1年前に取った資格の内容だって、人の名前だって忘れるぐらい

だ。」

「普通そうだな。でもさ、『授業のあのシーンは覚えてる』とか、『なぜかあの内容だけは忘れない』って1コマあるよな。」

「あるある。他の公式とか文法はすっかり忘れてても、それだけ覚えてるってやつある。As soon asと同じ内容で、No sooner thanとHardly beforeがあるとか。」

「ま、まあ、そういうやつ。」

英語嫌いな友人は思わず引いてしまったようだ。余計な事を言ってしまうことも自分の変わらない性格であるとその瞬間彼は思った。

「今回の産政塾の体験がそんな1コマになればいいんじゃないかな。」

「例えば？」

彼は友人に尋ねた。

「そうだなあ、例えば・・・ お前、人前で喋る機会あるだろ。」

「あるよ、500人近い人の前で喋ることもある。」

「そんな時さ、例えば自衛隊の人のように背筋ピンと伸ばしてみるとか。別にいつも目一杯伸ばしてなくてもいい。ていうか、そんなことしてたら疲れちゃうし。」

「まあね。」

「お前猫背だし。」

「ほっとけ。」

「だからさ、人前に立つ時にさ、ま、その時じゃなくてもいいけど、産政塾の自衛隊の事を思い出したらさ、背筋を伸ばしてみるってのも良いかもよ。」

「それが、何の意味あるわけ？」

彼はあえてまた友人に尋ねた。

「そりゃ、背筋伸びてる方が見た感じがいいだろうよ。」

「それだけ？」

「ま、今のは例え話だけど、背筋伸ばして一呼吸おいて喋るとき、落ち着いて聞きやすい言葉で喋ることができるんじゃないか？ あとは座禅してきたんだろ？ それを思い出して気持ち落ち着かせるとか。そんな細かい事でも、自分の仕事の仕方や過ごし方にプラスになるぜ。」

「なるほどね。」

「別に『殻』がどうか、無理に優等生ぶることないんじゃないかねえの？ 少なくとも俺はそう思うね。」

「すぐ変わらなくていいってこと？」

「難しく考えんなってこと。今後仕事していく中で、もつと言うと生活していく中でさ、産政塾であんな事したなあって思い出すことがあって、思い出した直後ぐらいいは気合い入れたり一呼吸おくことができればOKでしょ。『壁』に少しずつでも穴開くつもんじゃない。」

「優等生ぶるな、って言う割には、今の発言は『超』優等生だぜ。」

笑いながら彼は友人に突っ込んだ。

「30過ぎて『超』はねえだろ。それと、この店はお前のオゴリな。」

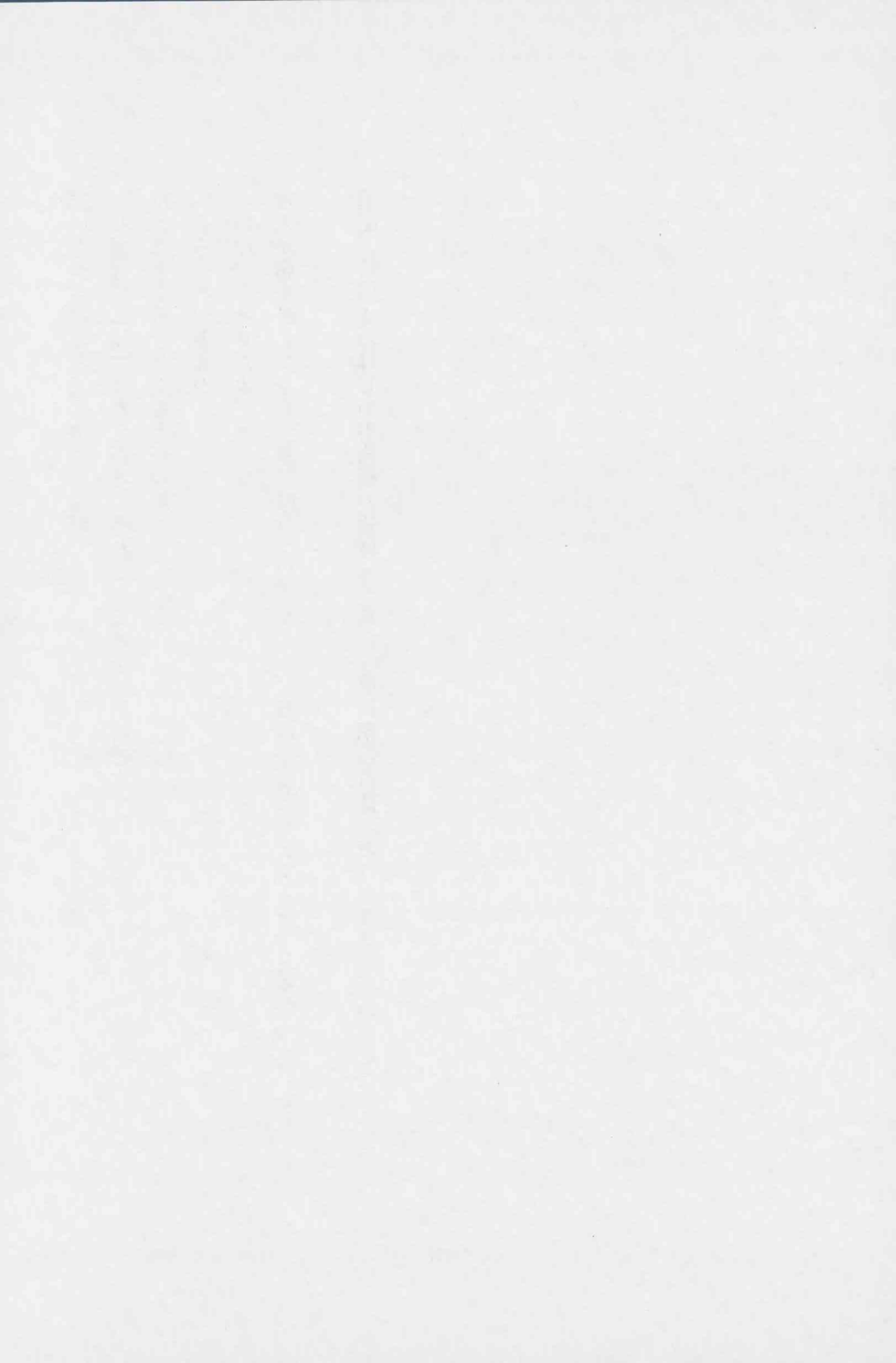
友人はそう言っていると立ち上がった。

「そろそろお開きか？」

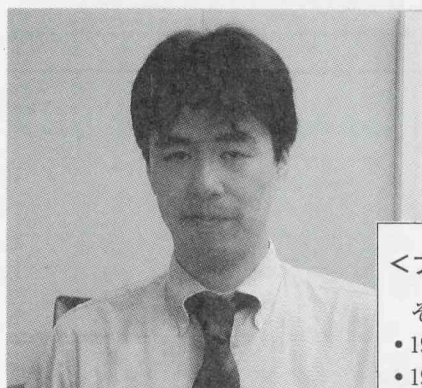
「いや、トイレだよ、トイレ。」

友人が席を外してから、彼は時計に目をやった。日付が変わるまであと5分を切っていた。

追記 竹川さんはじめ事務局の皆様、それから第14期の皆様、ありがとうございました。



殻の外へ踏み出そう・・・ 自己変革のすすめ



中部電力株式会社

苑 田 隆 之

<プロフィール>

そのだ たかゆき (32歳)

- 1971年 神奈川県鎌倉市生まれ
- 1995年 中部電力株式会社入社
(名古屋支店中営業所に配属)
- 1997年 人事部人事グループに配属
現在に至る

<家 族> 妻

<趣 味> 自転車、読書、旅行（特に東南アジア放浪、国内秘湯めぐり）

△産政塾とは▽

突然の指名により、突如私の生活のなかに入り込んできた「産政塾」。中部産政研は知っていても、「産政塾とは?」。そんなこんなでスタートを切つて、はや10ヶ月。業務が忙しい時期でもあつて、ばたばたしながらも、笑いあり、苦しみあり、悩みあり、そして友情ありの14期の活動であつた。そして、常に付きまとうテーマ「殻の外に踏み出そう」。普段の生活ではなかなか考えることのない課題を意識させられ続けた半年間で、悟りがひらけるとまではいかないものの、多くの出会いと貴重な経験から得られたものはとても大きかった。

1月の入塾式にはじまり、名古屋テレビ（メーテレ）訪問、自衛隊豊川駐屯地への体験入隊、京都の古刹南禅寺での座禅体験そして愛知万博会場予定地訪問、と日頃の会社での業務では触れることのできない貴重な体験ができ、なかなか直接聞くことのできないようなお話に触れ、また異業種でしかも労使立場の異なる塾のメンバーが毎回意見を交換し、ディスカッションするといふかなり珍しい経験のなかで、学び、感じるものも多かった。

この半年間の経験を踏まえ、自分にとっての「殻の外に踏み出そう」とは何であるか、考えたことを書き残してみたいと思う。

△3つの殻の認識▽

これまでの日常生活のなかで、「殻」について意識することはそう多くはなかった。それは、サラリーマンにとっての主要な生活ステージである「会社」といった組織においては、順応や調整といったことが比較的優先される局面も多く、殻というか壁を感じるときには自然と消化してしまうし、また、同じ目標に向かって仕事を進める上司や同僚との関係が人付き合いの比重を大きく占めるため、考え方も均一化する傾向にあるからであろう。そのため社外の友人と議論を交わしたりすると、とても新鮮な感覚を覚えることがよくある。

しかし、ここ1年弱の期間は「殻」について、多くそして深く考えさせられることになった。これは、言うまでもなく産政塾のおかげなのだが・（貴重な休日の朝から一生懸命「殻」について考えながら、このレポートを執筆する苦痛もまさに殻を破る生みの苦しみか）。そして、今、思い浮かんでくるのは、私自身を取り巻く「3つの殻」についてだ。

まずひとつは、半年に及ぶ活動を通じ、自分を見つめ直すという機会を与えてもらったことから、現時点の自分自身の内面における限界というか、不完全な部分に対する気付き。特に、自衛隊豊川駐屯地でレンジャー隊員の方から言われた「おまえら、殻を破りにここにきているんだろ」という言葉が脳裏を離れない。ここで私が感じた殻とは、「自らの気持ちの殻」。失敗を恐れず、最初に勇気をもって一歩前にでることが大切と何度も指導されたが、なかなか踏み切ることができなかった。

次に、自分の生活範囲としての世界について。私は、大学を卒業して、実家のある神奈川県を後にし、名古屋に勤務して10年程度となる。殻の外に踏みだして未知の土地にやってきたわけだが、10年も住むと今度は名古屋という殻に守られ、その範囲から踏み出そうとしない自分がいる。そして、

主に東京で生活している学生時代の友人やゼミの教授などとも少しずつ疎遠となっていく。振り返ってみると、この間で自分の生活圏としての世界を確立していることに気付く。ここで感じるのは、「領域の殻」。

そして最後のひとつは、主に日々の仕事の中で多く感じられる殻というよりは壁のようなものであるが、現状を変えていくというプレッシャーとそれに対するストレスについて。社会全体の成熟化等と相俟って、ビジネスの前提が大きく変化してきているという環境の中、特にここ数年は常に変革を迫られる状況が加速度的に進展している。ビジネスのスキームが大きく変化するなかでは当然であるけれども、常に従来の常識を大きく変革する姿勢が要求される。また、私自身の社内での立場も少しずつ変化しており、それに併せて日々、自己変革していく必要を強く感じている。ここでの殻とは「従来のやり方・常識の殻」だ。

△殻を破る勇氣▽

産政塾での活動を通じて多くのメンバーたちも、「殻」について考え、認識を新たにしたらだろう。いろいろな考え方があったが、一つ一つについて皆で議論し、各人の考え方を理解しあったことも貴重な経験であった。私自身も皆との議論のなかから、自分を取り巻く「3つの殻」の存在について認識できたことは意義深い。しかし、そこから先、殻を破っていく方法は自分自身で考えていくしかない。

確実にわかっていることは、殻を破るには勇気がいるということだ。チャレンジ精神である。

ツール・ド・フランスという自転車ロードレースの競技はご存知だろうか。「勇気」「チャレンジ」という言葉を思うとき、私は、まずこの競技について思い出す。23日間、4000キロに及びアルプス山脈やピレネー山脈を走破する自転車レースの最高峰であり、地上でもっとも過酷なスポーツの一つと言われている。学生の頃、自転車のクラブに所属していた私は、仲間達といずれはそのコースを走るといふ夢がある。もちろんレーサー達のようにはいかないが。

1999年のツール・ド・フランスにおいて「ランス・アームストロング」という選手がこのレースを制した。これは私にとって非常に驚きであった。彼は優秀なライダーと評価されていたけれども、その3年前に睾丸癌に侵され、脳や肺にまで転移した癌によって生存率20%以下という厳しい状況に陥りながらも復活してきた選手であり、もちろん優勝候補には拳がっていないかった。肺を病むことはどんなスポーツ選手にとっても致命的であるし、脳にメスをいれるのはアルプスを時速120キロで下り降りる微妙なバランス感覚が要求される自転車選手にとってはまさに死活問題となる。そして一度落ちてしまった筋肉や競技勘の回復も非常に難しい。当時、この勝利は「奇跡」とさえ言われた。

自転車競技の厳しさのごくごく一端しか知らない私にとってもその困難さと偉業の素晴らしさは十分に理解できた。さらに、アームストロングはその後ツール・ド・フランスで勝ち続け、今年2003年の大会で5連覇を達成した。

私は、ピレネー山脈の氷で覆われたのこぎりの函のような頂に果敢にアタックしているテレビに映るアームストロングの姿を忘れることはできない。

自転車レースは、冷たく、長く、つらい坂道との闘いだ。長い闘病生活の後、病からは立ち直りながらもなかなかレースに戻る勇氣を持てなかった彼が、復帰に向けての決意を固めていくなかで言っている。

「僕の人生は長くつらい上り坂をのぼるためにある」

「殻の外に踏み出す」とは、勇氣やチャレンジ精神をもつて、未知の世界に分け入っていくことである。

△自分の殻との闘い Ⅰ —未知との遭遇—Ⅱ

入れ込んでいるツール・ド・フランスにちょっと寄り道をしてしまったが、仕事を進めていくと、学生の頃に熱中した自転車という競技にとても良く似ていることに気付く。時には失敗と格闘し、雨のなかでは頭をたれ、風に向かつては身を屈める。それでも何とかして毅然と前に進み、少しでも希望を持ちたいと思っている。そして黙々としかし着実に山の頂上に近づいていく。

今、日本という社会全体の価値観なり仕組みが大きく変化していくなかで、会社という組織も変化しようとしている。一時的な軋みや、痛みを訴える声がそこかしこから発せられ、自分自身にも戸惑い、迷いが生じる。確かに従来の方や常識を覆し未知の領域に踏み込んでいくことは相当な勇氣がいる。失敗も怖い。「従来の方や常識」という殻は、その先の道筋もはっきりしないため踏み

出しにくいことは間違いない。

けれども、大切なことは、きちんとした到達点へのアプローチであり、そこに向けての日々のチャレンジではなからうか。そしてその到達点に希望を見出し、それを皆で分かち合いながら少しずつでも確実に前進することでは。

「従来のやり方・常識」という殻、そしてそこから踏み出すということを考え続けて、こんなことを感じている。

△自分の殻との闘い 2 ―領域の殻から踏み出そう―

「産政塾のねらい」を振り返ってみると、3つのことが書かれている。

「幅広い視野の発想や判断、あるいは価値観とはどういうものかを実践により考えていきたい」「これからの企業人・社会人としてのごとを判断するときに、何が大切かを実践により掴みみたい」とある。

そして「ねらい」の3つ目は、「自分の所属する組織の外に本音でものを言える仲間をつくりたい」。代わり映えない仲間と過ごしていくことは安心感があり、楽しくもある（これは社会人である私たちにとっては、主に会社の同僚や上司たちということになるため、人によつては感覚が異なるかもしれないが・・）。

土地についても、「住めば都」というが、学生の頃に経験した東京のラッシュアワーや週末の渋谷

センター街といった驚異的な密集にはもう耐えられそうもないと思う。そうやって現状に安住していくこと自体は悪いことであるとは思わなければ、産政塾の目指す「広い視野や独創的な発想および総合的な判断」の妨げの一要因となることは間違いがなさそうだ。

そうしたなか、素直に仲間を増やし、活動領域についても拡大してくれたのが、この産政塾であった。たわいもないグループメンバーとの会話やディスカッションにおいても新しい発見があり、刺激を受け、いろいろな価値観や考え方を学んだ。私の感じている「領域」という殻も、多少は拡大したと思う。

第14期の産政塾は終了したが、これからは一人で産政塾の活動を実践していくのと同時に、OBとしてやはり14期のメンバーと共に歩んでいけるだろう。

△自分の殻との闘い 3 — 気持ちの殻との闘い —

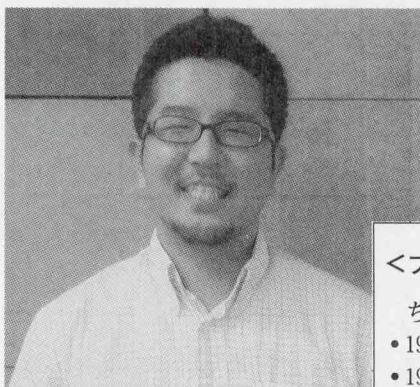
自衛隊の豊川駐屯地で、目の前に自分の心という大きな壁をはつきり感じながら、どうしても一歩を踏み出すことができなかったジリジリした気持ちは今でも鮮明に覚えている。「自らの気持ち」という殻。これは、これからも自分のなかで少しずつ闘っていかなくてはならない殻だ。

△活動の振り返り

この半年間は、様々な経験をさせていただき、第14期のテーマである「殻の外に踏み出そう」を意識しながら、人間としての研鑽を少しでも積み重ねてこられたのではと感じている。自分なりに認識し始めた3つの「殻」Ⅱ「従来のやり方・常識の殻」「領域の殻」「自らの気持ちの殻」については、ここで全て解決したというのではなく、課題を発見したに過ぎないため、これから長い時間をかけて外に踏み出していかなければならないものであるけれども、同じ目標を持った22人の仲間のことを思うと、不思議と楽しさや心強さを感じ、勇気が湧いてくる。お互いに助け合いながら、与えられた宿題にチャレンジしていきたい。本音で語り合え、一緒に闘っていける仲間を得たことはとても幸せなことであった。

最後に、このような貴重な体験の場を与えてくださった産政塾事務局および忙しいなか産政塾に快く送り出してくれた職場の上司、同僚に対して心から感謝し、結びの言葉としたい。

殻は破れたのか？



トヨタ車体労働組合

千 種 徳 充

<プロフィール>

ちくさ よしみつ (33歳)

- 1970年 7月 愛知県豊川市生まれ
- 1994年 4月 トヨタ車体(株)入社
購買部(現調達部) 配属
- 2002年 9月 トヨタ車体労働組合(BW)
専従執行委員
現在に至る

<家族>

妻、新生児(発行時)

<趣味>

プロレス・格闘技観戦(最近はもっばら週刊誌での観戦。)

「はじめに…」

第十四期産政塾のテーマは『殻の外へ踏み出そう』だった。（いつも『殻』のようだが…）。はたして私はその『殻』が破れたのだろうか？ いや、そもそも私の『殻』とは一体どんな『殻』なのだろう？ 私の性格と現在の状況もあわせて確認してみたいと思う。

「幼少期～学生時代」

それでは、私のルーツから探ってみよう（ルーツというほど大したものではないが…）。私は3人姉弟の末っ子として生まれた。待望の長男（のはず）である。姉二人を持つ末っ子の長男。この事が私の人格形成に大きな影響を与えた事は容易に考えうる。

姉との年の差は大きい。分かり易く言うならば、私が小学一年生の時に上の姉が六年生、下の姉は四年生である。圧倒的な体力差と女性2対男性1という不公平な民主主義により幼少期の生活は成り立つこととなる。

例えば、ゴム跳び（2人が両端でゴムひもを張り、1人もしくは数名がそのゴムを跳ぶという女の子がよくやるアレである）。姉達がゴム跳びをする時、私の役割はそのゴムを持つ係である。小さい私はゴム跳びが出来ない。だからゴムを持つ係なのだ。文句も言わずにやっていた気がする。…忍耐強かったようだ。

また、当時どこの家庭でもよくある光景であつたと思うが、テレビのチャンネル争いはまさに悲惨である。事もあろうに少年アニメと少女アニメがバトルしているという状況であつたと記憶している。当然のごとく少女アニメを見て育つたのであつた。おかげで心優しい少年になつてしまつた。…協調性などもあつたようだ。

私が年齢を重ねてもこの状況は続いた。当たり前である。私が小学校高学年になつても彼女らは中学生、私が中学生になつても高校生・大学生である。だからワガママを言つた覚えがあまりないように思う。言いくるめられるのがオチであつたからだ。（さすがに現在では大人扱いをしてかれているようではあるが…）。…従順でもあつたようだ。

また「末っ子長男」としてはご多分に漏れず「ノホホン」としている。そう「甘えん坊」であつたのだ。誰かがやってくれるだろうと心のどこかで思っている（今でもそういうところはあるようだ）。しかしながら、前述の私の基本的な性格とは裏腹に「心配性」という一面も持つていた。そう！こんな私でも悩むということを経験している。それはそれは深い悩みであつた。とにかく心配なのだ。「あんなつたらどうしよう？　こうなつたらどうしよう？」起こりもしないことを心配するのであるが、ある時（何がきっかけであつたか定かではないが）、「悩んでもしょうがない。」と考えたのである。「何事も前向きに考えよう」と。今で言うポジティブシンキングということである。なぜだかわからないが気持ち became 楽になつた。

大学時代は親元を離れ一人暮らしをしていたこともあり、それなりに人生経験を積んだようだ。ポジティブさに拍車もかかり、さらなるポジティブな一面を見せ始めていた。ちなみに私の座右の銘は

「飄々と…」である。

「会社生活と現在」

入社し購買部（現調達部）に配属後はスクスクとその類稀なる才能を発揮し（とはいかなかったが）、何とか業務をこなしていた。

ある時、職場役員をやっていた先輩が「異動が決まった。来期は職場委員をやってくれないか？」と。ポジティブさを発揮し（と言うか特に考えもせず）「いいですよ！」の二つ返事である。晴れて職場役員に信任された時に、その先輩が言った。「このまま職場委員長まで引き受けそうで心配だな。」時に1998年9月のことであった。

ちなみにトヨタ車体労働組合の体制は執行部・職場委員長・代議員・職場委員となっており、職場委員はいわば各職場のリーダー、職場委員長は各職場ブロックの長であり、任期は1期2年である。いずれにせよ業務をこなしつつ組合活動に携わるのは大変である。

職場委員2期目の半年が経った頃、当時の職場委員長から話があった。「期の途中だけど異動が決まった。後任をやってくれないか？」と。さすがに考えた。大変さは傍で見ていた。結局、引き受けることにした。理由は「めったに経験できる事ではない。」ということであった。時に2001年2月、かくして前述の先輩の予言どおり職場委員長となった訳である。やはり業務と職場委員長の二足のわらじは大変であった。が、おかげで色々なことを経験させてもらった。今考えると反省すること

ばかりであるが楽しく、すばらしい経験であった。

まだ続きがある。今度は専従執行部のお誘いであった。非常に悩んだ。…というか前向きに考えた。当時、結婚を控えていた身でもあった為、プレ家族会議も開催した。婚約者（現在の妻）が言った。

「相談すると言うことは、もう答えを決めているのでしょうか？」…そのとおりであった。得てして答えは自分だけで決めてしまう。ちよつと背中を押してほしかったのかもしれない。

まがりなりにも信任を受け、かくして専従執行委員となった。2002年9月のことである。専従の1週間後には結婚式を挙げるというドタバタを経て現在に至るわけである。任期も結婚生活も1年以上経過したわけであるが、とにもかくにも激動の一年であった。二つの大きな環境の変化が一気に訪れたため、いかなる原因により大変なのかは本人だけがわからないまま、時は流れてゆくのである。

「産政塾」に参加して…。

さて、前述の経過の中で専従執行部に籍を置く事となったことが、この産政塾への参加のきっかけとなったわけであるが、ここで簡単に各企画の中で感じたことを…。

- 開塾式：塾長をはじめとする自分以外の塾生の熱い思い、話のうまさに感動する。
- 第1回…トヨタ・チームアラコの浅賀ドライバー・荒川ナビゲーターの人間の熱さに感動する。
- 第2回…名古屋テレビ放送の生放送現場とその緊張感に感動する。
- 第3回…自衛隊・豊川駐屯地の川尻二曹と澤田三曹の心の強さに感動する。

・第4回…台風で中止になってしまったことにある意味感動する。

・第5回…京都南禅寺にて座禅の後に安らかな精神状態の自分がいたことに感動する。

・閉塾式…数年後に、ちょっと大きくなった自分になろうと思ったことに感動する。

各企画を通して、どれだけ自分の『殻』が破れたのか測る術もないが、明らかに言えることはそれぞれに「何かを感じた。」「刺激を受けた。」と言うことだ。何かを経験した時に、誰かとふれ合った時に、「自分の中に何かが生えるか否か。」それが大事なように思う。講師の方々だけではない。塾長にも塾生の皆さんにも感化された。これは後の私の人生の中でも非常に大きな糧となると思われる。

「今、思う」と…。」

今回の経験を踏まえて思うことがある。やはり何事も経験することが大事である。職場で言うところの「現地・現物」ではないが、自分の五感、目でみて、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味わい、手で触り、そして心で感じる事が一番大切である。

私の人生において重大な（かどうかわからないが）転機は得てして向こうからやってくる（基本的に頼まれると断れないと言う性格に起因するとも思われるが）。確かに都度、自分でも考え、結論を出し、現在に至るわけであるが、自分にとっての『殻』とは、実際のところ33年間で培ったこの「性格」なのかも知れない。第一歩がなかなか踏み出せないこの「性格」なのかも知れない。とにかく自分自身でその「第一歩」を踏み出そう。

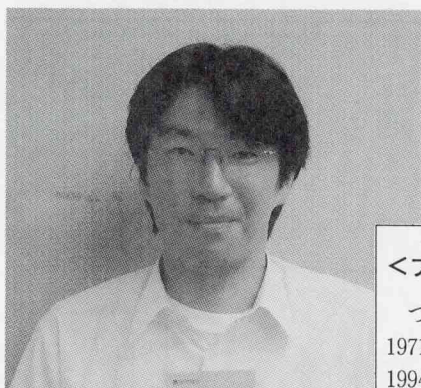
「最後に…。」

この産政塾において私に新たな感動を与えてくださった講師・塾長・塾生・事務局等々関係各位、快く送り出していただいた職場に感謝いたします。

『人が心に強く念ずることは実現する。』

数年後にはさらなる『ポジティブシンキング』と『飄々さ』を身にまとった自分であるよう強く心に念ずる33歳であった…。

成 長



豊田市役所
環境部環境政策課
柘 植 孝 悦

<プロフィール>

つげ たかよし (31歳)

1971年12月 愛知県生まれ

1994年 4 月 豊田市役所入庁

豊田市福祉事業団に派遣

第二ひまわり学園勤務

1997年 4 月 理財部契約課配属

2000年 4 月 環境部環境政策課配属

現在に至る

<家族構成> 妻、長女

<趣 味> 現在の趣味は、長女（1歳）と
歌って遊ぶこと

はじめに

今回、産政塾誌の原稿を書くということで、あらためて産政塾の活動や自分自身を振り返り、テーマ「殻の外へ踏み出そう」を意識するきっかけをいただきました。きっかけを作っていただいたことに感謝して、産政塾の活動を振り返り自分の「殻」について考えてみたいと思います。

産政塾の活動

（第1回 開塾式、企画を討議）

振り返ってみると私は企画案を考える段階で、殻の外へ踏み出す準備ができていなかったのではないかと思います。せっかく自分の見たいことややりたいことを考えて提案することができる機会があったにもかかわらず、無難にできる企画や、他の方が提案した企画に安易に賛同してしまったような気がします。

しかし、結果的に私たちのグループの企画は私自身にとっては未知の世界で興味もあり、内容も大満足となるものでした。他のグループの企画もいろいろな経験をさせていただき、必ず今後の自分に役立つ経験になったと思います。

（第2回 パリ・ダカールラリー出場チームを訪ねて）

なんといつても浅賀ドライバーの年齢に一番驚きました。とても還暦一步前とは見えずつても若々しく、熱いエネルギーを感じました。いつも好きなことだけをやり、常にチャレンジしているのが元気の秘訣と言われていました。

私はよく実際の年齢より上に見られますが、常にチャレンジする気持ちを持っているかといわれれば「はい」とは答えられません。老けて見られるのは外見だけの問題だと思っていましたが、それだけでもないかもしれません。

それから実際にパリダカを走破した車の助手席に乗せてもらいオフロードコースを浅賀ドライバーの運転で体験走行していただいたことは大変貴重な体験でした。

(第3回 マスコミの裏側を見る)

秒単位の時間の流れと、緊張感を間近で感じることができました。メーテレにお邪魔してから、ニュースを見るたびに、今あの人がああやって放送されているんだと思うようになりました。

また、放送内容決定の素早さには驚かされました。考えてみれば、刻々と変化する情報に対応するためには当たり前なかもしれませんが、せっかく予定していた内容を全く変更して、今日放送するために数時間で仕上げるということは私の考えでは想像できません。ただ、現在の情報化社会では今の情報でなければ意味がなく、私も仕事をする上で意識して迅速に伝えることができるよう判断していかなければならないと思いました。

(第4回 自衛隊を訪ね、日本の防衛について学ぶ)

私たちのグループの企画でした（・・・が、私は記録係ということで結局何も働かなくて申し訳ありませんでした）。

とにかく雨中の基本教練は強烈な印象を受けました。「最初に手をあげる。勇気を出して自分が一歩前に出ることが重要である。2人目3人目にでるのは簡単だ。」など自分に当てはめて改めて学ぶことは多かったです。自分がやらなくても誰かがやってくれるだろうという意識を持っているということをはっきりと認識した瞬間でした。

また、実際に自衛隊員の方の話を聞いて、戦争のことなど考えたこともない私とは根本的に違った考えを持ち、肉体的にも精神的にも過酷な訓練に耐えて、もしもの時に備えてくれているということがよくわかりました。

(第5回 地球環境・循環型社会について学ぶ)

個人的には今の仕事とかかわりがあるので楽しみにしていましたが、台風のため中止になり残念でした。

(第6回 精神鍛錬プレッシャーに打ち勝とう)

京都南禅寺での座禅、写経によって、なんとなく精神統一することができたような気がします。また、懇親会の鴨川の納涼床も初体験であり、これもなんとなく風流を楽しみ風情を味わうことができ

たと思います。何か本気で言うには環境、雰囲気が大事であると感じました。

（第7回 万博会場視察 閉塾式）

愛・地球博長久手会場の工事現場の視察では、博覧会協会の方の思いと計画を聞くことができました。2005年に万博会場に行ったときにどうなっているか楽しみにしておきたいと思います。

殻の外へ踏み出せたか

私には、現在1歳4ヶ月の娘がいます。彼女を見ているとたぶんまだ殻なんて無いのではと思います。どこへでも自分で歩いていき、できもしないのに自分でなんでもやりたがり、こぼしてもこぼしても自分で食べたがる。何でも真似して、だんだん言葉を覚えていく。人間の成長の様子がとてもよくわかります。

それに比べて父親は、固定観念という堅い殻に覆われ、できるわけがないと思ってやってみない。できることだけをやる。そんなことでは、世界が広がらず、成長もしないと思います。

今回の産政塾の活動は産政塾だから経験できたことで、普段の生活では経験できないことばかりでした。好奇心を持って、だめかもしれないけれどやってみると意外といろいろなことができるということがわかったような気がします。また、同じことでも人によっては違った考えがあるということをあらためて感じました（講師の方からそうですが塾生の方からも）。「百聞は一見に如かず」という

ことも実感しました。

ただし、これまでの人生だつて当然いろいろな経験をし、多くの人とも出会ってきました。正直なところ、月に1回たった数ヶ月の産政塾の活動で自分の殻を破ることは無理であつたと思います。しかし、このようなきっかけがなければしつかりと自分の殻を見つけようとはしなかったし、殻の外に出るということなどは考えてみようと思つていませんでした。そのことに気づいただけでも私にとって大きな収穫であつたと思います。

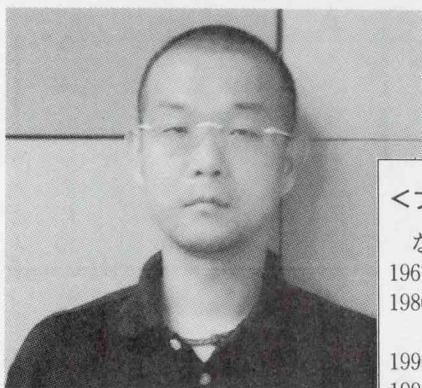
これからの自分

産政塾は、殻とは何かということを真剣に考えてみるきっかけを与えてくれました。本当に重要なのはこれからであると思います。

社会人になって10年ですが、まだまだ、私の人生はこれからです（多分）。固定観念を取り除き、好奇心を持つてとにかくチャレンジしていきたいと思います。言葉で書くとは簡単ですが実際はかなりの勇気と労力が必要であると思います。1歳の娘の成長を楽しみながら、チャレンジ精神を見習い、親父も少しずつ少しずつ成長していきたいと思っています。

短い期間でしたが、塾長をはじめ塾生の皆様、事務局の皆様、誠に有難うございました。すべての皆さんともっともお話をしてあげばよかったなと今になって悔やんでいます。閉塾式の反省会で塾長から提案があつた愛・地球博の開催に合わせたの同窓会でお会いできるのを楽しみにしています。

瑞 訪 記



トヨタ自動車株式会社

長 岡 享 史

<プロフィール>

ながおか たかひと (35才)

1967年 愛知県西春日井郡清洲町 生まれ

1986年 トヨタ自動車株式会社 入社
教育部配属 (技能五輪訓練を受ける)

1990年 ユニット生技部へ異動

1992年 人事部へ異動 (技能五輪訓練指導員)
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 飲み歩き、スキー、野球、麻雀

2003年6月19日 スイス・ザンクトガレン。第37回技能五輪国際大会が開幕した。

世界37カ国から約700名の青年技能士が集まり40の職種で世界の頂点を目指し、鍛え上げた「モノづくりの技」を競う技能のオリンピックである。日本からも全国大会を勝ち抜いた31職種34名の選手が参加した。私は、既存職種の統廃合に伴い新規に立ち上げる職種の視察・情報収集のため18日現地入りした。

なんとか辿り着いた

成田空港からチューリヒ空港へ13時間、ビジネスクラスで行く空の旅は極めて快適だった。

スイスの入国審査はいたってシンプル、パスポートを提示するだけ。係りの人は強面だがそこはこちらも負けてはいない。飛び切りの笑顔で挨拶を交わすとスタンプも押さず、何か聞かれるでもなく「はい、どうぞ」ほぼ素通り、呆気なく入国許可が下りた。初めての海外一人旅で実はビビっていた私だがいささか拍子抜けだった。そんな楽勝ムードもつかの間、問題発生！

空港駅からホテルのあるヴィンタートゥールまでの列車の切符が買えないのだ。

事前に聞いていた通りに行き先、大人1枚、片道、2等車両のボタンを順に押し、券売機にお札を入れるのだが受け付けてくれない。もう一度、もう一度・・・何度やってもダメ。

気がつくと後ろに行列、仕方なく断念して一旦列を外れて脇から買い方をチェック。10分ほど見ていたかどうか、ある事に気がついた。お札の種類（額）である。空港駅からヴィンタートゥールまでは

7、2 C H F（スイスフラン）。50 C H F札でチャレンジしていた私だが他は皆、10か20 C H F札を入れているのではないか。よく見ると、投入口に10と20 C H Fの絵が書いてある。これは、「ここにお札を入れて下さい」ではなく「ここに10か20 C H F札を入れて下さい」という意味だったのだ。この調子だと帰りのフランクフルト空港での乗換えに不安が募る。

オープニング・セレモニー

参加国選手団がアルファベット順に入場してくる。アラブ首長国連邦、オーストリア、オーストラリアと続き最後に開催国のスイス。日本は「J」なのでイタリアに続いて16番目。日の丸の小旗を手みんな笑顔で入場だ。国内大会を勝ち抜き、今大会に向けて積み重ねてきた厳しいトレーニングに裏付けされた自信と、これから始まる4日間に渡る『青春を賭けた挑戦』へのやる気と期待に満ちた笑顔である。

開会式といえは思い出されるのは、2001年 韓国・ソウル大会。9月11日あの忌わしいアメリカ同時多発テロが発生した。ホテルでCNNを見ていた私の目に炎上する貿易センタービルの映像が飛び込んできた。初めはそれが特撮映画の1シーンに思え、画面右隅のLIVEの文字が信じられなかった。一夜明けて開会式。会場は騒然とした異様な雰囲気包まれ、入場者全員に対し厳重なセキュリティチェックが行われていた。セレモニーが始まりアメリカの選手団が入場してくると観客はスタンディングオベーションでエールを送る。その時会場中が一つになった。

それにしてもこの暑さはなんだ！

このところ世界各地で異常気象が話題になっているが、150年ぶりの記録的な暑さに襲われた今年のヨーロッパ。スペインでは、猛牛が闘わずして倒れ、イタリアでは、電力不足による停電でジェラート屋さんの商品が溶けて大損害を被ったらしい。スイスと言えば「美しいアルプスの山々」、「美味しいチーズ」、そして「涼しい処」と誰もがイメージするであろう。（イメージ、いわゆる一つの『殻』である。）ところが、連日35度を越す猛暑。日差しがたまらなく強く、瞳の色素の薄い欧米人でなくともサングラスをかけたくなる。日陰に入ればさすがに日本のような蒸し暑さはなく何とか凌げる。スイスは8月でも最高気温が20度程度にしかならないため冷房設備がほとんどない。ホテルでも最上級クラスでないとエアコンは付いていない。この暑さが選手の作業に影響しないか心配である。

いよいよ競技のスタートだ

会場は「オルマ・メッセ」、広大な敷地の中に大小合せて11の建物からなり、各フロアに40の職種が配置される。それぞれの建物を結ぶ通路には各国の特色を趣向を凝らして紹介しているブースや、今大会のスポンサー会社のコマースアルブース、そして記念グッズやファーストフードの屋台が建ち並び、競技フロアは元よりそのすべてに人が溢れている。学校の課外授業らしき学生や「国際」と名の付く大イベントに駆けつけた地元住民、遙々国境を越えてやって来た観光客、多くの報道関係者も

見受けられる。ちなみに入場料は1日券が15CHF（約1400円）、4日間通し券で25CHFである。最近巷では『高度技能の継承』、『ものづくりの重要性』など技能に関することが取り沙汰され、新聞、テレビなどでも目にする事が多くなり広く一般の方にもその関心が高まってきている。（産政塾の第3会合でお世話になった「メーテレ」でもこの手の特集番組が放送されたと記憶している。）

2007年には静岡県で技能五輪国際大会が開催される予定だ。はたしてどれだけの人を訪れるのだろうか。愛・地球博とあわせて気になるところだ。

さて、話しを競技に戻そう。40の競技職種をその運営方法から2つに大別できる。4日間を通して1つのものを作り上げる職種と、毎日日替わりで4つのものを完成させる職種だ。

いずれも競技当日、スタートの合図で課題図面が選手に配られる、いわゆる「未公開方式」である。選手は初めて見る課題図面を読み取ることから作業が始まる。その形状を把握し作業工程を決め、時間配分、寸法計算、使用工具の選定などを行い加工へと入っていく。工具は使い慣れたモノを日本から持参しているが、中には規格が合わず会場で準備された現地のモノを使わなくてはならないこともある。機械や設備は当然現地のモノだ。操作方法が解らず四苦八苦する選手や、うまくリズムに乗れず普段の力が出し切れない選手も大勢いる。言うまでもないがそれは日本選手に限ったことではない。そんな中、日本の選手たちはその双肩に「技術大国復活への期待」が掛かっているなどというプレッシャーに臆することなく、また前述の暑さの影響を微塵も感じさせずただひたすら目の前の課題攻略に全神経を傾注する。その姿はまさに『若き職人』。

世界への道

今回、私は視察・情報収集という名目でスイスに赴き大会を外から見て思った。

「大会は見るものではなく参加するものだ」と。フェンスの外側から傍観しているだけではつまらない。「その内側で世界を相手に自分の力を試してみたい」改めてそう感じた。フェンスの内側Ⅱ限られた選ばれし者のみが立つことの許される舞台。そこに立つためには全国大会を勝ち抜かなくてはならない。1位と2位との差、それは点数にすればコンマ数点の差でしかない。しかし、その差はとてつもなく大きく、それを埋めるために歩む道は険しくそして果てしない。「自分が出来る事は相手も出来ている」、「ここまで出来れば大丈夫、そう思ったらそこまで」緩みかける心にそう言い聞かせて日々訓練に励む。修行僧が悟りを開くほどではないが、20才そこそこの遊びたい盛りの若者にとってみればそれに近いものはあると思う。

2005年 フィンランド・ヘルシンキ大会への出場権を賭けた国内大会が間近に迫っている今、『フェンスの内側の世界』を目指し全国の若者が鎬を削っている。修得した技能レベル、長丁場の競技を乗り切るための体力と集中力、減多なことでは動じないタフな精神力。それらすべてにおいて互角であれば最後に勝敗を分けるのは、「勝ちたいと思う気持ち」、「勝つ事への執着心」ではないだろうか。（この塾誌が出来上がる頃には結果が出ているだろう。）

最後に

6月18日から24日までの7日間のスイス。その間、日本ではC班企画の第5会合「地球環境・資源循環型社会について学ぶ」が行われた。開塾式の自己紹介で「誘われたら必ず参加する」と言っておきながらすべての会合に参加できない事がとても悔しかった。後日、天候不良のため九州行きは中止だったと聞き、結果的には100%参加する事ができた。企画班と被害に遭われた方々には申し訳ないが台風に感謝である。

14期産政塾、それぞれの回で多くの人と出会い、体験し、考え、刺激し合い、感動し、そして勉強した。「自分自身の考え方、価値観を見つめ直す」「多くのものに触れ知識、視野を広げる」入塾するにあたって思い描いていた姿に近づき、成長したとは言いがたいが「あるべき姿」に向け、取組むきっかけ作りとしては充分過ぎる半年間であった。

事務局の竹川さんをはじめ、14期塾生、講師の方々、そしてこの機会を与えてくれた方々へ感謝申し上げます。

《第37回技能五輪国際大会「スイス・ザンクトガレン」 日本選手団成績》

日本参加31職種中

金メダル 6個（機械組立て、精密機器組立て、旋盤／CNC、木型、自動車板金、電子機器組立て）
銀メダル 2個（メカトロニクス、構造物鉄鋼）

銅メダル 4個（抜き型、曲げ板金、工場電気設備、洋菓子製造）
敢闘賞 9個（機械製図／CAD、フライス盤／CNC、タイヤ張り、配管、電工

石工、左官、美容／理容、自動車工）

自分「カイゼン」



アラコ労働組合

藤原 誠 二

＜プロフィール＞

ふじわら せいじ（28歳）

- 1975年 6 月 豊田市生まれ
- 1998年 4 月 アラコ(株)入社
第1 設計部配属
シートの設計を担当
- 2002年 9 月 アラコ労働組合 執行委員
現在に至る

＜家 族＞ 独身

＜趣 味＞ 映画鑑賞 漫画喫茶
珈琲摂取 交通安全

産政塾との出会い

社会人経験の浅い自分として、様々な産業の人々と共に企画し、共に体験し、共に語らうことは、とても新鮮であり興味深いものであった。初日には期待感と不安感で少々そわそわしていたのを今でも覚えている。

そもそも集まってきたメンバーは自分も含め、普段は何かと上の顔色を覗いながら仕事をしているのであらうというのが僕の勝手な主観。わずかではあるが判断を任されることも出てきたが、肝心なところは上司のひと吹きでひっくり返ってしまう、そんな位置づけにある面々ではないだろうか。今まで与えられた仕事、目の前にある仕事を如何に早くこなすか、如何に成果を上げるかに全力を尽くし、ただ突っ走ってきた中で、ある程度自分の仕事に自信が持ててきた頃ではないか。そんな中で次第に、多くの局面に対応できる能力、幅広い知識、経験の必要性を感じながらも、日常の仕事が一杯で、やきもきしているメンバーといったところだろうか。

そうした状況下で産政塾はスタートしていった。

今までの自分

いつからだろうか、素直に人の意見を聞き入れることができなくなってしまった自分がいた。といつても、何につけても反論するようなタイプではなく、腹の中で何を言っているのだ？ 違うだろう？ なんて思うタイプ。要するに、ねくら、タイプである。そんなねくらはすぐに聞いた意見に対し

逆の発想が働く。人がAといえはBの良さがわかってないといい、人がBといえはAの何がわかるのだと言う。結局はどちらの良さも中途半端にしか理解できず、目の前に提示された提案を否定したくてたまらない、ひねくれ者である。

産政塾に参加してみて

産政塾・塾生の一員として参加し一番衝撃を受けたのは、みんなが実に感情豊かであり、感動屋さんであったということである。

今回産政塾の活動を通して、多くの方々と出会い話を聞く機会があった。もちろん毎回の講師と呼ばれる人は、どこにでもいるいわゆる普通の人、ではない。なかなか自分の周りにはいないだろう、パリダカドライバーであったり、テレビ局のディレクターであったり、自衛隊駐屯地の隊員であったり。そんな特別な人の話の内容を聞いて実に多くの塾生がすごいと感動し、へえと感嘆し、すばらしいと感激をしていた。そしてひねくれ者の自分もまた、素直に感動できた。自分が塾生として、そして周りの塾生に感化されたからこそ、得られた感動だと思う。同世代、異業種の塾生集団がもつ緊張感・価値観・人生観は、新しい事について建設的な目でみる力をもたらえた気がする。

今の世の中、情報が蔓延しすぎて正しいもの、間違ったもの、良いもの、悪いもの、必要なもの、無駄なものが入り混じる。いつのまにか、すべての情報をシャッタアウトしている自分がいた。すべての情報が間違ったものであると端から決め付けてかかるその姿勢は、だまされる事もなければ、自分の身につく事もないのだろう。

大切なのは物事の本質を見極めること。そう、NOと言えない日本人がベストセラーになった時、日本中で意味を履き違えたNOを連呼していなかったか？必要なYESを犠牲にしてまで。悪い意味での、意地である。その悪い意味での、意地が、自分の中で少しずつ崩れていった。

固定観念に捕らわれない

産政塾の中で学ばせていただいた事の一つに、固定観念にとらわれないという事がある。多くの塾生との語り、討論の場から実に多くの考え方があることに気づかされた。自分なりに気づいたものを表現してみると、次のとおりとなる。

スローライフを信条とし、時間は自分の為、家族の為に費やすことに満足する人

⇓ 時間に追われながらも、常に自分のこなした仕事の実績に満足を得る人

メールを配信し、多くの人に一度に情報提供をする

⇓ 一人一人とコミュニケーションをとりながら、手渡しをする

常に前例踏襲を行い、過去の反省点を改善する事で、欠点を最小限に留める

⇓ 既存にとらわれず、常に新しいものを追いながら果敢に挑戦する

この逆説とも言える内容のうちどちらが正しいのかと尋ねられた時、どう回答するか？産政塾を終えた今、回答するならこうである。

【二者択一で判断することこそ、殻を設けることにつながるのではないだろうか！】

もつと順応に、AとBの選択を迫られたとき、両者の良さを併せ持つCという提案ができる時、初

めて殻を破った実感が得られるのであろう。その事に気づかされた時、自分が少しだけ成長できた気がした。

創造的な逆説

舞台演出家ピーター・ブルッグが「殻を破る」というエッセイの中でこう述べている。

死守せよ、だが軽やかに手放せ。(hold on tightly, let go lightly)

専門家がいうところによると、創造的な逆説らしい。予め弁明しておくが、僕は舞台演劇に長けているわけでもなければ、さまざまな文学に精通しているわけでもない。今回この産政塾レポートを書く上で調べた浅い知識で誠に恐縮だが、ピーターのこの言葉の意味についての解説があるので紹介する。

集中して活動をしている間は何があってもその集中を失ってはならず、しっかりとしがみついているなければならないが、いったんその形ができたとき、その形の上にあぐらをかいてはならない——まずそれが表向きな意味ではあるが、しかし、演出家にせよ、学者にせよ、常に形になるものを目指して己の活動を延々と続けていくのが現実であり、「軽やかに手放す」などということは容易なことではない。それでも、「手放す」ことによって新たなスタートを切りつづける大切さを語っているのではないだろうか。

しがみつくのをあきらめるのは難しい。しかし、自らを「なにもない空間」に置かなければ、既成のものによらない、真に刺激的な新しい地平は見えてこない。それはもちろん、最初から何も持たな

い者がゼロからスタートするのとはまったく意味が違い、ある意味で行くべきところまで行ったものが、レベルアップした新しいステージにおいて、使い古されていない新しい手段、新たな視点を模索しながら進んでいくという意味である。しがみつき続ければ安泰な立場を容易に保持でき、権威を構築できるはずの者が、あえてその立場の外側に回りこむフットワークの軽さを持つという事でもある。

自分に置き換えてみると

エッセイの解説を自分に置き換えてみる。自分は社会人として今まで必死に業務をしてきて、成果を少しずつ積み重ねてきた、今そのような状態ではないか。人脈もでき、多少の無理は利いてもらえる。あとは、自分でないとわからない事をできるだけ多く抱えれば、自分の楽なように仕事を進めることができる。すなわちあぐら予備軍であるとも言える状態。

そんな中で「軽やかに手放す」事が自分にできるのだろうか？新しい能力を得るため、新しい考えを持つ為、安泰な現状を打破することができのだろうか？自問自答してみると、意外と不安はない。これも産政塾を通し、業種を超えたさまざまな方の話を聞き、実際に体験したことにより、新たな視点、広い視野をこの手で感じる事ができたためであると思われる。これは「軽やかに手放す」きっかけとなっていくであろう。

最後に月並みですが、今回出会った多くの塾生、事務局の方々にお礼申し上げます。
ありがとうございました。

殻 = 可能性



名古屋鉄道株式会社

堀 田 大 祐

<プロフィール>

ほった だいすけ (35歳)

- 1968年5月 愛知県名古屋市生まれ
- 1991年4月 名古屋鉄道㈱入社
現場実習及び関連会社での派遣
研修
- 1994年6月 総務部配属
- 1998年6月 教育センター配属
- 2003年6月 人事部配属
現在に至る

<家 族> 妻、長女、二女、三女

<趣 味> 野球、ゴルフ、食う寝る遊ぶ

△参加にあたって▽

産政塾開塾式の一週間前、突然の参加打診があった。人材開発担当（現職は人事担当）として次年度の教育計画遂行に邁進している中での出来事であり、なぜ自分なのか、なぜ今頃なのか等々、思いを巡らせながら派遣担当者から参加にあたっての説明を受けた。

産政塾の趣旨・活動内容・テーマを理解していくうちに、もしかしたらこの活動を通して物事の本質に触れることができるのではないか、自分自身の人間力を高めることができる絶好の機会ではないかと思ひ、参加申し込みに至った。

△テーマについて▽

「殻の外へ」というテーマを見た瞬間、自分の参加が必然に変わった。何故ならそれは私が30歳の節目に目標として掲げた「殻を破る」という言葉と偶然にも同じものであったからである。もちろん自ら進んでそのような目標設定をするはずはなく、社内研修で課されたキャリアデザインの5年計画にその言葉があったにすぎないのであるが、まさにタイムリーと言わざるを得ない展開であった。

△目標設定▽

キャリアデザインでは、誰からも信頼されるビジネスパーソン像、良き父親としての家族との生活、ビジネススキルアップを目指した資格取得・語学習得、幅広い人脈・交友関係等、様々な角度からパランスの良い目標を設定してみた。

これまで何事においても「バランス」重視のスタンスで生きてきた自分としては、職業人として、家庭人として、社会人として、人間として etc.、あれもこれも欲張った目標を立ててはみたものの……5年を経過して何ひとつ合格点をつけることはできない自分を猛烈に反省することとなった。

もちろんその時点でも目標はできる限り具体的でなければならぬことは分かっていたのだが、体裁の良い表現にとらわれるあまり、結局「夢・理想」に近いものばかりとなってしまった。

このような経緯もあり、今度こそは掲げられたテーマ「殻の外へ」に対して具体的な行動と成果が得られるようにしたいと意を決しての産政塾参加であった。

この時点では、その思考プロセスに潜む誤ちの存在に気づかずだった。

△開塾式▽

自己紹介が始まりメンバーそれぞれの人物像に触れることができた。多士済々のハイパフォーマーに囲まれ正直なところ圧倒されてしまった。それと同時に今後の展開が楽しみともなった。

その後、塾長から開塾式の余興としてある提案がなされた。このすばらしい提案のおかげで開塾式は大盛況となったのは言うまでもないが、『遊び心を持ってやろうじゃないか』というこの時の塾長の

言葉が特に印象的で、私のその後の活動に大きな影響を与えることとなった。

△グループ企画決定▽

さて、いよいよグループ企画を決定する時がきた。各自が持ち寄った企画案は、宇宙飛行士・スカウト・黒四ダム・気孔術・大道芸等それぞれ斬新でなかなか絞り込めずにいた。ただしグループ企画決定に際しては、通常では会えない人、行けない所、できないこと等を経験したいの这一点で全員の意見は一致していた。

結局、時間切れとなつてしまい、塾生全員の多数決の結果を参考に、当グループ企画は「宇宙飛行士」に決定した。私はたまたまりーダーに選ばれ、企画決定のイニシアティブを取っていたのだが、この時、私の頭の中には先ほどの『遊び心』という言葉がよぎっていた。

以下に参加各企画の感想並びに特に印象的であつた事柄について【】書きで記すことにする。

△パリダカ企画▽

講師の浅賀ドライバーのエネルギーシユで精悍な外見、シユールでウィットに富んだ会話、経験と実績に裏打ちされたマネジメント思考等には感嘆させられた。なによりも並外れた情熱を持ち続けているその姿からは本物の「人間力」を感じることができた。プロドライバーとしては言うまでもない

が、経営者としても一流であると感じた。

【若い人に伝えたい】

勝つためにはフランス人ナビゲーターが有利だが、敢えて若い新人のナビゲーターと組んで出場したのには訳があつた。それはベテランと新人の理想的な姿であつた。

【シンプル】

砂漠という大自然の中で理由もなく涙があふれた体験談。その時に人間と言うものが見えてきて、謙虚な気持ちになり、ただ単に正しい人間でありたいとシンプルに思ったそう。物事の本質に触れた瞬間の境地なのであろう。

△メーテレ企画▽

デジタル放送への対応のため新社屋を建設中の名古屋テレビ放送（メーテレ）でニュース番組制作現場を視察することができた。ニュース統括責任者（編集長）の伊藤氏とプロデューサーの田中氏による番組編成（メーテレキャンペーン）について、視聴率の仕組み、新社屋（デジタル放送）の概要等の説明を受けた。その後、アナウンサー部、スタジオ、編集室等の普段直接見ることのできない空間に足を踏み入れた。見たことのあるスタジオで見たことのある現役のアナウンサーと言葉を交わし、

カメラの前に立った姿を見てまんざらでもないと思ったのは私だけではないはずだ。

【時間の価値】

今自分は常に時間に追われて生活している気がする。というよりむしろ時間管理がうまくできないと言わなければならない。その対極にある究極の時間管理集団を目の当たりにして時間の価値というものに思いをめぐらせた。時間は万人に公平に与えられているが、私の時間は如何に浪費されたものであったか……。あらためてタイムマネジメントの必要性を感じた。

【緊張感】

ビジネスシーンにおいては時に緊張する場面に遭遇することがある。普通の人はできることなら避けて通りたいと思うのだが、その緊張を業とする人々がいる。そうアナウンサーである。ニュース生放送のスタジオ撮影に立ち会ったのだが、その緊張感は相当なものである。それが毎日続く。好きだからこそ、やりたいからこそできるのであるが、それだけでは務まらないはずである。やはりその道のプロフェッショナルである。私のような凡人には不適であり、仕事における適材適所と能力発揮について考えさせられた。

今年は宇宙に関する話題が豊富であった。NHKの連続テレビ小説「まんてん」で宇宙飛行士が採り上げられたほか、スペースシャトル墜落事故、火星大接近、中国有人宇宙船打ち上げ成功等々、ざっと思い浮かべてもかなりのものである。

そこで私は今回の企画に際して「宇宙」にこだわることにした。誰しも一度は宇宙に思いをはせたことがあると思うが、元来無趣味な自分としては、この機会に興味と呼べるものを見つきたいと考えたからである。ちよつとした『遊び心』であった。

しかしこの『遊び心』自体に無理があつたのだろう。当初意図した宇宙飛行士との意見交換はスペースシャトル墜落事故の影響であえなく頓挫してしまつた上、せめて体験プログラムだけでもとこだわつた九州地区での開催も、当日に台風に直撃され中止に追い込まれてしまつた。

もちろん梅雨の時季での開催ということで雨でも対応できるよう室内中心の内容としていたのだが、このような事態は想定していなかつた。かくして塾史始まつて以来の企画なしグループを誕生させてしまつた。

ただ私個人としては今回の一件から得るものもあつた。まずもつて「無理」を実現することに挑戦したこと、その過程における様々な壁に粘り強く対処できたこと、そして結果として企画を開催できず悔しい思いをしたこと等である。負け惜しみに聞こえるかもしれないが正直な感想である。

△南禅寺企画▽

静かに座す機会はこれまでに何度か経験したが本格的な座禪・写経は初めてであった。元々集中力がなく今回も警策での一撃を覚悟していたのだが、木々に囲まれ涼しいマイナスイオンに満ちた環境がそうさせたのか、国宝の仏像や襖絵に囲まれて厳肅な雰囲気 sensed されたのか、これまでにないレベルで集中することができた。総本山での本物の体験は何かが違うのかも知れない。

俗世の人間が無の境地に至るはずもないが、静かに座して思い浮かんだ事柄を整理したり思いを新たにしたりする時間は貴重である。実践していきたい。

【鍛 錬】

住職の説法の中で修行について触れた部分があった。我々が興味を持ちやすいよう面白おかしくアレンジしておられたが、その厳しい日々の積み重ねの片鱗が住職の顔に顕れていた。自分もいい面構えをして壮年期を迎えたいと思った。

【ありがたい】

今自分があることがどれだけの人々のおかげであるのか。「在る」ことの「難さ」。常に感謝の気持ちを忘れないように心がけてきたつもりだが、何に對しての感謝なのかまで掘り下げて考える機会となった。普段何気なく使っている言葉の意味を説かれ、目からうろこが落ちる思いであった。日本語の奥深さを知り、言葉を用いる際は気をつけなければならぬと肝に銘じた。

△愛・地球博会場視察▽

長久手会場・瀬戸会場へは、博覧会開催が決定して以来、年に数度は現地を訪れていた。最近行かなくなったが、一時期新聞紙面を賑わした瀬戸大正池にも何度か足を運んだことがある。現在、会場の造成とパビリオンの建設が急ピッチで進み、各種イベントや展示の概要も明らかになりつつあるなど、開会への期待が一層高まる視察であつた。

【穀　　智】

すぐれた知恵という意味である。21世紀の人類が直面する課題の解決の方向性と地球や人類の将来の姿を見出していくために自然から学ぶのだと言う。是非とも成功させたいものである。商業ベースの採算性をもって成功と呼ばれるのではなく、理念・テーマの具現性を持って成功と呼ばれる博覧会となるよう応援していきたい。

△殻の正体▽

活動の締めくくりに、今一度塾生全員で「殻」について整理することとなった。殻とは何ぞやとの問いかけに対し、それぞれの経験や見方・考え方を交えた感想として「障壁、既成概念、個性（アイデンティティー）、破るためにあるもの」等々の幅広い意見が出された。

テーマの意味する「殻」という言葉は、いかようにもとることができる、分かるようで分からない難しい表現である。ネガティブに捉えるのか、ポジティブに捉えるのか、自分自身の内面・意識というミクロの視点で捉えるのか、社会現象まで含めたマクロの視点で捉えるのか、捉え方にもよるのだ、いずれも表裏一体、紙一重であり、その時の環境・感情に大きく左右される概念であると言える。これらを踏まえ、その正体についてあえていうとすれば、私は「殻Ⅱ可能性」だと思っている。その性質を比較してみると、ここでいう可能性は殻の厚さ連動して上下し、両方とも0%（無くなること）も100%（絶対・破れないということ）もあり得ないものである。そしてそこに挑戦（踏み出す）という力を加えなければ結果は得られない（何も生まれない、殻は破れない）という意味でイコールと考えてよいと思うからである。

私は、人間は無限の可能性を持っており、人間の限界は自らが作り出しているにすぎないと思っている。

△気づき▽

前の△目標設定▽の項で誤ちに気づかずにと述べた。それは「夢・理想」に近い目標ばかりを掲げてしまったことを顧みてのことであるが、殻の正体を自分なりに整理した結果、自分の考え方の本質的な誤りに気づくことができた。

もし仮に「殻Ⅱ可能性」だとするならば「夢・理想」への挑戦は「分厚い殻」を破ろうとすること

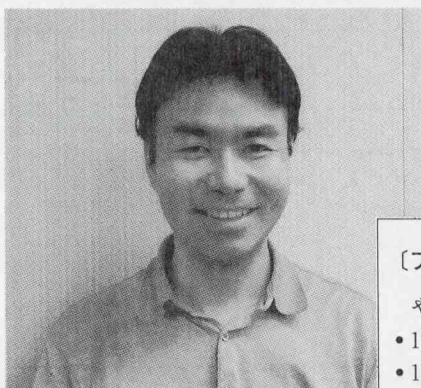
にほかならない。そこで成果にこだわったが故に具体的な目標という「薄っぺらな殻」に目を奪われ、夢・理想という「分厚い殻」への挑戦を諦めようとしてしまったという過ちに気づいたのである。

△閉塾にあたって▽

この度の産政塾への参加によって所期の目的を達成することができた。更に言えば今回の活動を通して『夢・理想を追いつづける』『遊び心をもつ』ことの大切さを心に刻むことができ、本当に有意義なものであった。

私は真面目な人間だと思っている。この真面目さは強みでもあり弱みでもあることも承知している。この強みを活かし弱みを克服する術として、今回の活動を通じて得たことを今後の人生に役立てていきたい。そうすることが産政塾の運営に携わった方々に対する恩返しになると信じている。

殻 と 皮



トヨタ自動車労働組合

山 口 健

〔プロフィール〕

やまぐち たけし (35歳)

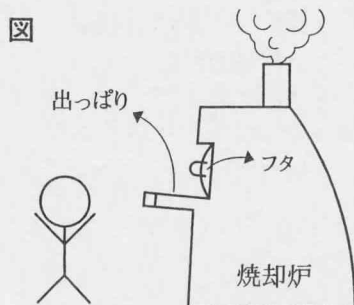
- 1968年 9 月 京都市(南禅寺そば)に生まれる
- 1992年 4 月 トヨタ自動車(株)入社
生産管理部企画室配属
- 1997年10月 同部新車進行管理室勤務
- 2002年 9 月 トヨタ自動車労働組合 執行委員
現在に至る

〈趣 味〉 ゴルフ・カラオケ・草野球
ラーメン屋めぐり

〈最近気にしていること〉
ワーク・ライフ・バランス

自分自身で自我を意識するようになったのはいつからだろう。自分が覚えている一番古い記憶は、多分3、4歳のことだったと思うが、その時既に自分自身の意志をしつかりもって行動していたことがうかがえる。その記憶というのは、詳細は定かではないが、ある日、私が大切にしていた雑誌の付録のおもちやを母が勝手にゴミの焼却炉に捨ててしまったことから始まる。当時私は父の会社の社宅でありながら京都の南禅寺の裏という大変閑静で広い敷地の中に住んでいた。家は平屋でかなり狭かったと記憶しているが、広い敷地には私の家以外に2件の家があり、共同で大きな焼却炉もあった。ダイオキシンといった問題も認識されていなかった頃であり、家の燃えるゴミはその焼却炉で燃やしていたんだと思う。そこに母は私が入っていた紙の付録を知って知らずかはさておき、捨ててしまったのだ。そのことを知った私は当然母をうらんだ。と同時にまだ燃えていないかもしれない、それなら中から取り戻せるかもしれない、と思い半泣きになりながら一人焼却炉に向かった。母に助けを求めず自分一人で行動したのは、幼心に母に対する怒りの表れであつたと思う。幸い火はまだ入れられてなかった。今ならそれほど大きなきないのかもしれないが、当時の私にとってその焼却炉は巨大で、ゴミが溜まっている内部を覗こうとすると、斜め上を向いている焼却炉のフタの手前の出っ張りに登る必要があつた。(図参照)

懸命に出っ張りに登ることに成功した私は、フタを片手で開けながら、もう一方の手にかきまぜ棒を持ち、焼却炉の中を懸命に掻き分けた。炉の中の手前にはまだ焼けていないゴミがあつたが、下の方



には焼けた後の灰が溜まっており、うまくやらないとゴミが灰と混ざってしまう状態だった。しかも私自身、出っ張りから炉の中に落ちてしまう危険もあったことから、落ちないように注意しながら両方の手を使わなければならない過酷な搜索活動を強いられた。結果何が起きたか。前にはかり気がいつていた私は、バランスを崩し、出っ張りから足を滑らせて地面に落っこちてしまったのだ。何が起きたか分からなかったがとにかく痛かった。その後のことはよく覚えていないが、泣きながら自力で家に戻った時には、母が目を白黒させる位おききなタンコブが頭にできていたらしい。今でもこの話をする時、マンガみたいなタンコブが本当に出来ることをその時実感した、と母も笑って当時を懐かしむ。長々と昔の話を書いたが、言いたかったことは、自分の一番古い記憶の中にもはつきりと自分の意志に基づいて行動する自分がいる、ということである。別に意識した訳でないが当時の幼い私にも自我はあったし、その自我に基づき行動する自分自身がいたことになる。

あれから30年以上たち、見た目含めて私も随分変わったと思う。色々な変化があったと思うが、変わるきっかけは何だったんだろう？見たことのないものを見たり、行ったことのない場所に行ったり、体験したことのないことを体験したり。でも一番影響が大きかったのは、自分以外の人と話したり、教えてもらったり、議論したりしたことだったような気がする。親しい友人や先輩・後輩からだけでなく、初対面の人から大きく感化されることもあった。自分自身、自我は大切にすべきだと思うし、自分自身をしっかり持っていない人は正直好きになれない。けれども今の自分に満足し、それ以外の価値観を受け入れない、というのも自分の考えの幅を広げる上ではマイナスに他ならない。ただ、そ

うはいつでも知らず知らずのうちに自分に近い考えの人たちで輪を作ってしまうのが人間だし、新しい出会いをいくら自分自身で待ち望んでも、そう素晴らしい話がやってくる訳ではない。そう考えると、自分が望もうと望まざると何らかの縁があつて自分に回つてきた新しい出会いの機会は常に前向きにとらえて取り組むことが、自分にとってプラスであるような気がする。またそう考えることが自分にとって最も幸せだし、出会う相手にとってもそうだと思う。こう書いた以上は肝に銘じて実践していきたい。

話は変わるが、9月にヨーロッパへ出張に行く機会に恵まれた。今まで数多くの海外に行く機会に恵まれて随分多くの国に行くことができた。中国、アメリカ、カナダ、イギリス、トルコ、台湾、ベルギー、フランス、オランダ、ドイツ等、期間の長短はあるが本当にいい経験をさせてもらっていると思う。

観光で訪れた所はともかく、仕事で行った先では現地人の知り合いも多く出来た。当然車づくり、という仕事を通じての関係ではあるが、一緒に酒を飲んで話をしたりして、中には休日に旅行をして一晩中語り明かした友達もいる。そういった数少ない経験から言えることは、私自身まぎれもない日本人であり、民族の違いや宗教心の違いといった差は明らかに存在している一方で、そういった違いを超えて共感できることもあること。いずれにせよ、先ほどの話に戻るが、彼らと接することは自分の幅を広げると同時に、自分自身を見つめ直す大変良い機会になることだと思う。当然語学の壁という大変やっかいな問題はつきまとうのだが。

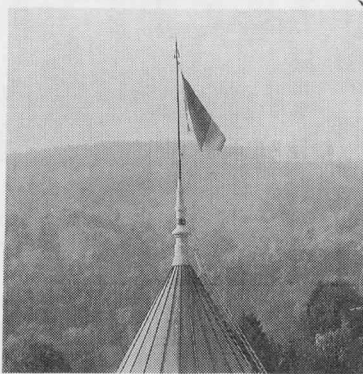
話をもとに戻そう。今回の欧州出張の目的は2点。一つ目は海外出向している組合員の仕事・生活両面での問題意識をヒヤリングして改善が必要なことを経営にフィードバックすること。二つ目は他の自動車メーカーの実態を調査し、競争力の源泉を探ること。一つ目については省略して話は二つ目に絞ろう。

今回調査で訪れたのはメルセデスベンツ初の小型車であるAクラス専用工場。当初ダイムラー以外にPSA（プジョー・シトロエン・オートモービル）の工場も調査対象としてアプローチしたのだが結局うまくいわずに断念した。予断だが、プジョーもベンツも期限とされている訪問の2ヶ月前に調査訪問を依頼し、ベンツは約2週間でOKの回答をもらうと同時に具体的な日程や内容の調整を開始した。一方のPSAは2週間たっても1ヶ月たっても正式な返事がなく、そうこうしている内にサマーバケーションに突入してしまったようで全くの音信不通になってしまった。こちらの予定していた日程の1週間前になってもPSA本社の正式な決裁がおりなかった為、旅券手配の関係から訪問を断念し、PSAに時間切れを理由にお断りの連絡を実施。欧州市場での拡販著しいPSAは是非とも調査したかったのだが、止むを得ないなあ、と思いつつ出張準備の仕上げをしている出発2日前になつて、断つたにもかかわらずPSAから、「この日この工場なら工場見学と昼食懇談が可能です」という連絡が入ってきた。依頼する側で言えた義理ではないだろうが、同じ国内ならともかく、2日前に決まってしまう訪問で話ではないと思うのだが、それも含めてラテン系の会社の片鱗を、今回のPSAとのやり取りで感じられたような気がする。

ベルギーにあるトヨタの欧州統括会社を後にして、スイスにあるフランスとドイツ国境に近いバー

ゼル空港からバスでドイツに入り、鉄道の駅からドイツの新幹線にあたるICEに乗ってバーデンバーデンという町に向かった。バスでドイツに入った途端、何となく町の雰囲気が変わったように感じた。駅で切符売り場がどこにあるかを尋ね、窓口で切符を買い、乗る列車のプラットフォームが何番線かを教えてもらうなど、数人のドイツ人と会話を重ねるにつけ私の思いは確信に変わった。日本から遙か遠く離れたドイツという国は大変日本に似ていたのである。理屈ではない。感覚と言ってしまう。それまでであるが、生真面目で親切で几帳面という国民性を強く感じた。フランス系とオランダ系の民族からなるベルギーとは明らかに違う安心感がそこにはあり、私はすぐにドイツが好きになった。ドイツでの滞在先として選んだバーデンバーデンはドイツで有名な温泉のある保養地で、ドイツ人観光客が大勢集まる街として知られている。日本で言う温泉ではないが軽井沢と言ったところであろうか。そういった街にふさわしく、歴史を感じさせる古い建物のホテルは、無駄な装飾の無い落ち着いた雰囲気、美味しい白ワインに酔った私は、翌朝小鳥のさえずりで目を覚ますまで熟睡することができた。

さて、待ちに待った工場訪問である。ホテルまでわざわざダイムラーの方が迎えに来てくれた。送迎車は言うまでもなくベンツであり、Eクラスの後席で快適な移動を約30分楽しんだ後、ラシユタット工場に到着した。



ラシュタット工場はAクラスのみを生産する工場で、⁹²年の生産実績は約16万台。従業員は約4700人。⁹¹年に先代のEクラスの生産を開始した10年あまりの歴史の工場である。⁹⁷年のAクラス立ち上がり時は3直体制で日当り800台の生産を行っていたが、現在はモデル末期ということもあり、2直の体制で日当り600台を生産している。来年のAクラスのモデルチェンジにあわせて3直への復帰と同時に能力増強も決まっている。通訳含めてこちらの訪問メンバー4人に対して、ダイムラーからは工場の総務責任者と人事責任者、組合の代表など延べ9人の方に対応していただいた。事前に送っていた質問事項に応える形で丁寧なプレゼンを基に、こちらが質問すれば更に詳しい説明がしっかりと返ってくるという大変熱のこもったやりとりを行っていると言った時間はあると言う間に過ぎてしまった。様々な発見があったが、たまたまダイムラーに限ったことかもしれないが、ここでもドイツと日本が似ていることを認識せずにはいられなかった。ひとつは従業員の定着率。欧米一般には自分のキャリアを高く買ってくれる会社への転職をいとわない人が多く、トヨタの海外事業体でもなかなか定着率が上がらず苦労しているところが多い。ところがダイムラーでは定年の65歳まで働きつづける人が大半で、親子で代々ダイムラーで働いている人も珍しくない、とのこと。また工場運営の基本精神には「規律正しさを重んじる」、「継続的な改善」、「チームワークを大切に」といった日本大切にされている項目がうたわれていた。事実、現場の改善活動でも、約10人のグループ全員で取り組む内容を議論し、各メンバーに役割と目標を付与して活動を推進している。個人主義や自分の責任範囲しか果たさない、といったイメージが強い欧米にあつて、この結果は意外であつた。

一方で明らかに異なっている点も存在していた。彼らの現場のリーダーはマイスターと呼ばれる国の試験に合格した職人であり、自発的に専門の学校に通って資格を取得しなければならない。いわば民間企業のモノ造りの現場であつても自分の意志で資格を取らないと指導者にはなれないわけで、日本のように同じように入社した中で上司から才能を認められてリーダーになるのとは根本的に異なっている。総じて自分から前に出ることが苦手な日本人と、自ら進んでリーダー（マイスター）を目指すドイツ人はこの点においては似ていない。そう考えると、先ほども日本とドイツが似ていると書いてきたが、イラク問題における国連でのスタンスが北朝鮮問題を差し引いても大きく異なる点は説明がつくのもかもしれない。

最後はかなり飛躍して、勝手な結論づけをしてしまったかもしれないが、今回のダイヤモンドの訪問が私に与えた影響はけつして小さくないと思う。5月に陸上自衛隊の豊川駐屯地に行った時にも感じたが、自分から先んじて行動することの重要性は常に意識しておかないと実践できないと思う。私はこよなく日本を愛する典型的な日本人なのだから。

おまけ 最後まで読んでいただけた方に、大半の日本人が聞いたらビックリするドイツの常識を一つ紹介しましょう。ドイツの名物のゆでたソーセージの薄い外の皮。日本じゃプリッとかがみ切るのが一般的ですが、ドイツでは、ナイフで皮をはいて中身だけ食べます。これって意外ですよ。やっぱり皮は自分で破らなきゃいけないってことですね。



産政塾を振り返り・・・



アイシン労働組合

山下 邦彦

<プロフィール>

やました くにひこ (35歳)

1968年11月 愛知県名古屋市生まれ

1987年4月 アイシン精機(株)入社

2000年9月 アイシン労働組合執行委員
現在に至る

【家 族】 妻、長男、次男、コーギー (雄)

【趣 味】 バイク、アウトドア全般、スキー、
映画鑑賞、旅行など

『はじめに』

1968年11月11日に愛知県名古屋市中にて生まれ、それ以来ずっと愛知県でスクスク育ち、特に特技もなく幼少期〜学生時代をわんぱくに過ごしてきた。（世間様には迷惑をかけてませんよ）

その後、以前（中学時代の社会見学をして）はトヨタ関連の自動車会社は自動化が進み将来が不安になると勝手に思い込み、それ以外の就職先を選ぼうと考えていた訳だが、いざ就職する時には少しでも大きな会社へと考えアイシン精機(株)へ入社した自分がいた。

さて、それでは私が参加した産政塾について触れていこうと思う。

『開塾式』

03年1月21日開講塾当日を迎えた。ノミの心臓の持ち主である私だが、少しドキドキしながら初めて豊田市の全労済豊田会館に足を踏み入れた。塾長・事務局の挨拶がなされ、次に面白おかしく笑いあいの参加者全員の自己紹介。私は座った配列上後半での発言だったので少しは考える時間が与えられたが、皆の自己紹介が余りにも上手に笑いを取り入れながらの自己PRをしており、逆に自分にとってプレッシャーを生み出す時間になっていた！（笑）さすがに各社・企業・労組の代表として参加されている方々だと痛感させられました。

この産政塾の狙いとして自分なりに整理すると、業種や職種、また置かれた環境や立場の異なる同

年代層の仲間が集まり、日常の会社生活や家庭生活ではまず経験する事が出来ないことを企画し、実行する。その中で得られた体験から自分の殻に気付いたり、破ったり成長を遂げる事だと感じた。しかしながら、今回参加された他の塾生さんはどうか分からないが、恥ずかしながら「自分の殻を破る！」と考えた事は私自身一度もないような気がします。

自己紹介後、各グループに分かれてまだロクに知らない人達を前にして担当決めを進めることになり、進行を早める為にも珍しく自分からEグループのリーダーを志願して進めたがこれが後で大変な業務で度肝を抜かれた。というのは担当決めの後でグループにて話し合い「見てみたい」「体験したい」「聞いてみたい」といった何でも有りの企画作り！「やりたいと思ったら何でも出来る！」と言うのだ！ココまでは、さすが産政塾は凄く力のある団体なんだと改めて感動しておりました。しかし、よくよく話を聞くと、基本的には各グループメンバーで協力し連携を取って自ら企画を進め、企画した先方とはリーダーがアポイントを取り全て運営するのだと知り驚いた。先程までは、グループで言いたい放題！今までの産政塾の企画も参考にしながら、「キコリ体験として木を切り倒しプレート作成」「有名すもう部屋ですもう体験をしてちゃんこ鍋を・・・」「自衛隊の実弾演習見学」、などなど夢のある事ばかり笑いも交えながら企画を進めていたのに、グループ自らが殆んど企画進行することから、リーダーとして実現可能な現実的な論議をしなければならないと、心の中で思いはじめていた。（しかし、これも自分の一つの殻ではないかと思われる、保守的で固定観念の塊で安易にこれは無理！不可能と行動する前から決めつけている自分がいた）だが、優しく、行動力があり信頼のおけるグループメンバーにも支えられ、会議は一つの方角へと導かれた。結果私達Eグ

グループの企画として、自衛隊を訪ねることに決定した。

第2回『猿投アドベンチャーフィールド』を訪ね

第3回『マスコミの裏側をみる』

は残念ながら欠席となった。

『第4回 自衛隊を訪ね、日本の防衛について学ぶ』

ついに我々が企画した自衛隊を訪ねる日がやってきた。2度目の参加が自分のグループになったが、この企画を進めるにあたり自分なりにホームページで調べたり様々な所へ電話問い合わせを実施したがなかなか思い通りにならず頭を悩ませていた。

ある日、同じ班の白井さんから自衛隊に知り合いがいると言う事で、白井さんの方からお願いしてもらうことになった。そして当日を迎えた訳だが、私は名ばかりのリーダーで運営は影のリーダー白井さんに任せてしまった。(私の白井さん、ありがとうございます)

結論から言うと、自分達のグループ担当という愛着もあるが14期の活動の中で私にとって一番印象に残ったのが第4回だ！

当日は豊川駐屯地にて、隊員と同じ昼食を頂き(結構旨い)、本物の戦車・榴弾砲を横目にして企画室長との講話、資料室見学と進みココまでは通常見学と余り遜色なく、隊員訓練時の裏話や防衛についての話も同う事が出来たが、その後の小雨の混じる中での基礎教練！これが素晴らしかった!!

全員がジャージ類に着替え、「右向けー右」と基礎教練が始まったが、屋外で雨が降っている事もありこれは館内で別メニューをするか中止かどっちかな？と思っているとそのまま何事もなく続行！（今、思えばこれも一つの殻ではないか？常識的に雨で風邪を引いてしまうから中止！これも個人の思い込みに過ぎないと思う）一通りの動作を学び「では、前をやってみようと思う方」と川尻2曹からの呼びかけ・・・誰も即答で「ハイッ」とは手が拳がらない、そこで2曹から「積極性の練磨！」「2・3番目に動く事は誰にでも出来る！まず、最初に率先して動く事！」「最初から出来なくて当たり前！まだ完璧にやれる訳がないです！失敗を恐れて誰かを見てから真似をしてでは駄目です」ドキッとした！一生懸命教練を学び習得したが、まだ自分の完璧でない！もう少しやれば自信が持てるのにーと思っていたし、キット同じ気持ちの人もいたと思う。

また、「労働とは？」を問いかけられ これも即答出来なかった。2曹は「会社・事業所等を通して社会に奉仕する事！その奉仕の後に得られるのが俸給・給料である」と言った！また「会社が何かをしてくれる訳でない！会社に養ってもらう訳でない！自分が、会社を大きくするんだ！という気持ちを持ちましょう。自分が社会に、会社に何が出来るか？！社会に、会社に何をすべきか！」とも述べられた。私は会社生活においてそこまで具体的に考えた事がなく心に響いた。考え方一つで前向きに！微力な力だと思うのではなく、変えてやるんだと信念を持ち行動する！改めて自分の殻という物を考えさせられた思いだった。

『第5回 地球環境・資源循環型社会について学ぶ』は台風の為、中止！残り全て参加する気持ち

だったので非常に残念でした。事務局の竹川さんに「どうしても中止？」と悲痛……

『第6回 精神鍛錬 プレッシャーに打ち勝とう』

舞台は京都の南禅寺、ココでは座禅と写経を行ったが座禅の組み方姿勢をシッカリ行うと若干ではあるが無の心を体験し自分を見つめ直す事が出来た。

『第7回 閉塾式』

皆さんの産政塾での感想の言葉も聞き、自分の人生を振り返ってみると、知らない内に自分自身を何重もの見えない『殻』で覆ってしまい、保守的と言うか、安心、幸せ、いわゆる平凡な人生を大切にしようとするあまりに、殻の外へ踏み出せない自分がいたと思う。この産政塾の活動を通じて少なからず効果があり、自分の殻に気付きヒビが入ったと感じられる！

『最後に・・・』

産政塾を通じてたくさんの人と出会い、また日常では余り経験する事のなかったと思われる経験をする機会が得られた事は、自分にとってとてもプラスになりました！今回参加したお陰で企業毎に色々な考え方があり自分の職場（一つの企業）しか見えていなかった自分の視野（考え方）の狭さに気付く事が出来ました。と言うのは、特に今回の14期生の皆さんから聞いた様々な業界の話はとても

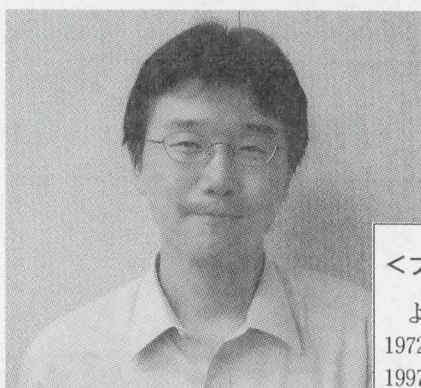
興味深く、同じ自動車業界での組合活動の進め方や行政ならではの苦勞している話、デパートでの愉快な話などなど、そうした何気ない会話が自分にとって視野が広がったと実感しております。主催者であり、このようなキツカケ作りをされている産政塾さんには心から感謝しています。本当にありがとうございました。

しかし貴重な経験をさせて頂いた事には感謝するが、このレポート作成には「マイッタ」と言うしかない！読書感想文以外に長文作成をしたことのない自分が、ナイ知恵と貧相なボキャブラリーの私からレモン汁を搾る想いで筆を握らせていただきました・・・。

これも貴重な経験の1ページということにします。



職場慰安会にみる 我が人生の殻叩き



株式会社豊田自動織機

吉 田 研 太

<プロフィール>

よしだ けんた (31歳)

1972年4月 奈良市生まれ

1997年4月 (株)豊田自動織機入社

1997年7月 人事部 配属

現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 草野球、スポーツ観戦

《職場の慰安会〜パーティ〜》

2001年の1月。場所は幡豆のとある温泉、そして職場の慰安会・宴会会場でのこと。クイズなどお楽しみ企画の後。

慰安会幹事であり宴会の司会者より「ご歓談のところかと思いますが、ここでKさん、Aさんより重大発表です。Kさん、Aさんどうぞ。」

K「えー。実は…、私たちこの度婚約することとなりました…、相手は隣のAさんです。」

一同「えええ!!」「うそー」「聞いてないぞ」「ほんと?」

それを聞いて、信じた人半分。半信半疑の人が残りのうちの半分。残った人が「うそでしょ」と感じた。

だが、こういう時、信じた派より。

「〇〇で食事していたのを見たことがある」

「ラグビー観戦に二人で来ていた」

「そういえば、大阪でも見たことがあった。あやしいと思ってたんだよね。」

「こんなことなら、職場で大きな声であんなにKをおこらなければ良かった。」

そんな声にも押されて場の一同、殆どの人が信じるようになったようだ。

そうはいってもその席上にいたH氏はまだ信じてはいなかった。

余談だが、H氏は当時30歳。Aの先輩であり、明るく面倒見が良かったため職場でも人気があった。のみ

ならず、実はお坊さんでありながらサラリーマンという二束のわらじをはいているお方でもあった。

(ちなみに「人生80年。40迄はインプット。残りの40年でアウトプットを出す」という名言を残し、現在は寺で修行中の身である)

司会者「いや、大変おめでたいですね。ではKさん、婚約指輪をどうぞ。」

手渡されたKはAの手を取り、

「では失礼致します」「では…」「ん!?」「あれ!?」「おかしいな？」

Aは恥ずかしそうに「飲むと手がむくむんです。ちゃんと入ったのに…」

司会者「Aさん、飲み過ぎで手がむくんでしまったようです。入ったはずですが…」

司会者「こういうこともありますよね。あつはは。」

と次の話題に。

司会者「さて、このお二人、仲人も既に考えているようです。だれでしょう。それはHさんです。」

H氏「おいおい、うそ、指輪も入ってないし、みんな騙してる？」と言いながらもとつてもうれしそうだ。

司会者「いままで仲人つてやったことがありますか？」

H氏「やったことないよ。スピーチとかは何回もあるけど。でも仲人か。この歳にして。」

まんざらでもなさようだ。

KとA氏「Hさん。是非、宜しく願います。」

しかし、婚約会見に際して場が盛り上がりすぎたのか、酒のせいなのか、泣いてしまう人まで出てき

た。

Kは流星にやり過ぎかなと内心思った。だが、どこで止めれば良いのか難しく、その後も色んな質問に、流流と答えたのだった。

とこんなドッキリが許されるのも慰安会だからなのだが。

しかし、これは単なるドッキリではなかった。実はKはちょうどこの慰安会の少し前からA氏と付き合っていた。もっとも結婚まではまだ考えていなかったのではあるが…。

結果として、職場で彼女の話題になったり、結婚の話になったりした時、(彼女?)「ええ、Aさんですよ」(そろそろ結婚?)「はい。相手はAさんですて。」

質問者「またまた、冗談は慰安会だけとして…」となつてしまったものである。

そのため、その後も職場の先輩であり、彼女であるA氏との付き合いがバレることはなかった。

つきあっていると思った人もあったかもしれないが、話題に出た時点でお決まりの「冗談」に終わっていたのかもしれない。

《産政塾のテーマ》

今年、産政塾に参加した。テーマは「殻を破る」である。「一皮剥ける」という表現があるが、産政塾のテーマはもう何段も高い。「一皮剥ける」ではすでに周りが見えている状態だ。通常、皮が剥

ける時に目の皮も向けるということは考えにくい。しかし「殻を破る」場合、一見、殻の中は守られていて、安心。でも外が見えていない。こんな状態では実はとても危険な状態なのかもしれない。驚が襲ってきて殻の中では危険に気づかない。寧ろ、早く殻を破って周りの状況を見ようとする。

「殻を破ろう！」にはそんな警鐘めいた切実さがあるのかもしれないと感じる。

しかし、兎も角、自分を変えていく、より良い方向に変わっていくことが大事だということでは「殻を破る」も「一皮剥ける」も似たようなものかもしれない。

《今年の阪神タイガース》

2003年のセントラル・リーグを制したのは阪神タイガースだ。今年の阪神は本当によく勝った。これまで負けていた分を取り返すほどの勢いで勝っていった。私はセ・リーグの他球団に比べ実力が飛び抜けているとは思わなかったが、兎も角、戦力を増強して、何よりも勝負強くなったと感じる。そしてその最大の功労者は言うまでもなく星野監督である。掛布・バース・岡田のバックスクリーン3連発トリオを擁した18年前のタイガースを過去の栄光として封印し、あくまで現実を直視することから始め、大幅に人を入れ替え、闘う集団に変えていくことでセ・リーグの優勝を導いた。その星野監督はエッセイでこんなことを言っている「迷った時は前に出る」と。

毎年最下位のタイガースから星野さんが、監督要請を受けた時、周囲に相当反対されたらしい。「阪神はまとまりのない球団で絶えずトラブルやお家騒動を起している難しい球団。阪神の監督には

勇退とか辞任とか、そういう花道はなにひとつないじゃないか。みんな、その実態は解任とかクビだ。ここまでやってきて食うに困るわけでもないんだから、人生のラストコーナーでなにもボロボロになることはない。みすばらしい姿を晒しに行くことはない」と。

確かに、以前ヤクルトを強化し4度も優勝に導いた野村前監督をもつてしても連続して最下位に甘んじたチームだ。「星野は絶対にタイガースに行くべきでない」が大方の意見だったようだ。そうした中、實際迷いもあつたろうが、タイガースの監督に就任することとなった。

そしてここに男・星野の生きがいを垣間見ることができると。

「迷つたらひるまず前へ。迷つたら逃げずに前に。自分らしい人生をとことん歩いてみよう」

△職場の慰安会△パートⅡ△▽

2003年10月。職場の慰安会。場所は浜名湖のとあるホテル。そして宴会。今年のお楽しみ企画は人気TV番組である『トリビアの泉』を模し、職場の人々について無駄なる知識ながら「へー」と思わせるネタの発表と『退職される姫の物語』がメインテーマであり、毎年同様、凝りに凝ったパワポポイントの映像が準備されている。

『トリビアの泉△職場バードジョーン△』より。

「○○さんは花の新婚時代、残業パンを持ち帰り、翌日の朝食にしていた」

「○○さんはラグビーの名門伏見工業高校出身で3年の時に全国制覇をした。」

「安全点検に来る○○さんは、普段は高さ8 cmのピンヒールを履いている。」

などなど・・・慰安参加者一人一人に対し「この人は実は○○だったのか!？」というネタが仕組まれていた。

ネタはサブ司会者であるKにも前もって知らされていた、はずだった。K自身のトリビアのネタがないのはメイン司会者と共に司会者だからとKは1人で納得していた。

しかし、Kに対してもトリビアが準備されていた。

「K氏には髪の毛の長い彼女がいる」「最近東浦近辺で毎週のようにメタリックブルーのbBを見かける。その助手席には必ず女性がいる。」

そして、何故かビデオ映像まで準備され、髪の毛の長い女性が写されていた。

「I Love K-Chan.」

何じゃこりゃと思ったが、それは何のことはない、上司から奨められて通っている英会話レッスンの先生だった。もちろん、その先生が彼女というわけではなく、Kの知らぬ間に、上司やメイン司会者が手間隙かけてビデオ撮影していたことに驚いたのではあるが……。しかし、Kは必要以上に汗を流していた。そして、その場はそのまま過ぎて、宴会の二次会ではそれだけではすまされない雰囲気になつていったようにKは感じているのだった。

そして、宴会の二次会。

職場の皆からの詰問が始まった。

「ところで、K。髪の毛の長い彼女は一体誰なんだ？」

「もう、分かっているんだから、白状しなさい」

Kは思った。実は職場の人は皆自分とA氏とが付き合っているのは分かっている、こつやつて訊いてくるのではないか？昨日も職場の人に「結婚は何時？」と言われ、「今年度中だよ。Aさんとね。」と言うと、はいはいって感じで流されしまったが、それもいきなりの不自然な質問だった。

こうとなれば、職場の人たちにも言うべきか。

いやいや、しかし、本当に分かっているのかな？

とどうしようか焦っていたのであるが。その時、何故か、最近読んだ星野監督のエッセイの中に綴られた「迷ったら前に出る」という言葉を思い出した。

ここで、職場の皆に言わなければ。こんなシチュエーションも悪くないかと。

K「実は、相手はAさんでして。」

一同「その話は3年前に聞いたよ。それはもう分かったつて。そんなことはいいいから。」

K「いや、冗談でなく、Aさんと結婚しようと考えてまして」

上司「これは、何だ、またドッキリか？おいお前らグルか。室長、冗談は止してくださいよ」

K「あの。今回は冗談でもドッキリでもありません。本当にAさんと……」
後輩「ありえない。絶対ない。」

3年前の婚約ドッキリが相当強烈だったらしく、その場にいる皆がお互いの顔を見合わせては自分
がはめられているのではないかと疑心暗鬼になってしまったようだ。
思わぬ展開になり、その後KとA氏が説得すること約2時間。

最後は皆信じてくれ、晴れて慰安会で本当にKとA氏との婚約会見となった。

最初は全く信じようとしなかった上司もしまいには泣き出し、「いや、ホント良かった。でも新婚旅行は一緒に駄目いかんぞ。仕事が回らなくなるから、別々の日程で行くんだぞ」などとわけのわからないことを言っていた。とはいえ、この3年間、皆を騙してしまっているようで心の重石となっていたものが取り払われ、Kはとても晴れ晴れとした気分になっているのだった。そして何よりも上司はじめ職場の人たちの暖かさに感動をしていた。おそらくA氏も同様だったことであろう。

〈振り返って〉

お気づきかと思いますが、Kとは恥ずかしながら私である。上記のような過程を経て、職場で婚約会見と相成りました。この場を借りてお世話になった産政塾の皆さんにもお伝え致します。

産政塾でのテーマ「殻を破る」ことは難しい。だが、産政塾の企画を体験する中で、自分なりにものの見方を少し変えてみるとか、生活環境を少し変えてみるとか、今までできなかったことにチャレンジするとか。そんな行為により今まで見えていなかったものが見えること、これは結果として「殻を破る」と同じ様の価値を持つこともあると考えるようになった。

そういう意味でも私にとって今年・来年は生活環境の変化という意味で節目の年であり、更に新しい自分を発見できる可能性の高い時期にあると感じている。

自分に枠や殻をつくらず、さまざまなことにチャレンジし、いろんな角度から物事を見れる、或いは自分の考えを持ちながらも色んな考え方を尊重できる、そんな人になりたいと思う。

そんな気持ちにさせてくれた産政塾の塾長・事務局の方々、そしてメンバーの皆さんに感謝したい。そしてまたどこかでお会いできることを楽しみにしています。8ヶ月間本当に有難うございました。

私が専従になった理由（わけ）



丸栄労働組合

渡 邊 憲 司

<プロフィール>

わたなべ けんじ（29歳）

- 1974年7月 愛知県東海市生まれ
（以後、三重県津市で生活）
- 1997年3月 (株)丸栄 入社 婦人服売場配属
- 2000年9月 丸栄労働組合
名古屋支部執行委員
- 2002年9月 丸栄労働組合
本部執行委員（専従）
現在に至る

<家族> 独 身

<趣味> バスケットボール
（今はNBA観戦など）

音楽鑑賞 ブラックミュージックなど
読 書 実用書など

はじめに

昨年の今ごろ、労働組合の専従になったばかりの私は、産政塾へ参加することになりました。「なにか豊田に行くらしい・・・？」漠然とした思いを持ちながら、申し込みの際には、「いつも“自分を客観的に見ることの大切さ”感じており、さらに広い世界の人達との交流を通じ・・・」などと動機を書きました。これは作文ではなく本当に常日頃意識していることです。「殻の外へ踏み出そう」というテーマは、今ほどピンときませんでした。自ら選択して新しい環境へ踏み出したばかりの私には、図らずもピitterであったとしか言いようがありません。

人は誰しも、「これが出来るようになりたい」とか「こういう人になりたい」という自己実現欲を持つていると思います。それをどの程度意識するかは個人差があるでしょうが、「自分の、この部分は人よりまあまあ優れていて、ある部分は人並みで、こういうところが足りないんだよなあ・・・」という事が「自分を客観的に見る」ことのひとつだとすると、そういったことを意識している私には、自分の未熟なところが気になります。もしかしたら自己実現欲が強いのかも知れません。

「自分から相手に積極的に話をしたり、何気ない雑談をすること」「自分から先頭に立って、物事を始めること」「本や新聞などの活字をじっくりと読むこと」「それ以外にもありますが、そのような点が自分にとって苦手だなあと、昨年の今ごろ思っていました。」そんな自分を少しでも変えたい」という気持ちは組合専従になるうえでの、一つの大きな動機だったと思います。

どっちがいい？

専従になってから、(百貨店内の) 売場を歩いていると「売場と(労働組合の専従と) どっちがいい？」とたまに聞かれました。何を指して「いい」というかは別にして、「仕事の内容が全然違うから何とも言い難いですネ」などと答えていましたが、今もそれぞれの仕事にやりがいと難しさがあると感じます。

少し話が変わりますが、大学生が就職活動を始めるにあたって、「まずは自己分析から」などよく言います。自分が幼い頃から、どのような生き方をしてきたか、その時々で何が得意で、或いは嫌いで、またどのような行動をとっていたかなどを振り返りながら、自分の目指す職業を見極める為です。思い込みかもしれませんが、私の自己分析は、「人に喜んでもらうのが好き」なことでした。百貨店に入社したのは、良質の商品やサービスを通じてお客様に喜んでいただきたいと思ったからです。クリスマスシーズンのおもちゃ売場で入社前の研修をしていたころ、ある日3歳ぐらいの小さな女の子が売場に来ました。おもちゃをみつけた女の子の「わたし、これがほしかったんだあ・・・」という小さな声を聞いたとき、私はこの仕事に喜びを感じました。モノを作っている訳ではありませんが、それを最終的に手にされるお客様の一番近くで、その喜びを共有できること、お客様に満足をしていただく為の全ての演出や準備も含めて、楽しいなと素直に思います。

お客様

百貨店にとって、特に店頭のお客様は主に一般消費者の方々です。私も組合専従になる前は、婦人服や子供服の売場を担当していました。小売業の様々なお店は業態を問わず、少しでもお客様に支持されるお店となるべく、色々な工夫をしてお客様の声や意見を吸い上げ、その意向に沿おうと品揃えやサービスを充実させています。ただ、今の私と言えば、一般のお客様と接客をする機会は当然ありません。前述のような理由でこの業界に入ったわけですが、喜んでいただきたい対象であるお客様との直接的な接点はなくなつたのです。

しかし、仮に普段接している組合員の皆さんが今の私にとってのお客様だと考えれば、今私がするべきことは、やはり同じことだと言えるでしょう。表面的に支持されることばかりを求める必要はないかもしれませんが、組合員の方々が何を考え、何を望んでいるのか、労働組合に関心のある方もそうでない方も含めて、組合員の気持ちを知ること努め、声を吸い上げる形で具体的な成果に結び付けていくことだと考えます。厳しい時代であることは間違いありませんが、「喜んでもらいたい」「相手が少し変わっただけです」。

カリスマ

少し宣伝になってしまっていますが、私達のお店の特徴は、「ホッとすることのできる百貨店」というところです。お客様の層としては、元々比較的年配のお客様に古くからのご愛顧を頂いていますが、

数年前から10代、20代前半の若いお客様が格段に増えました。渋谷発のいわゆる“ギャル系”と言われたファッションから始まった流れは、一過性のものとの見方もありましたが、これまでのある意味粗野なイメージからは随分と洗練されてきており、従来の百貨店ブランドと一線を画した特徴と魅力から、お客様の支持を得ています。

一時話題にもなりましたが、そのような若い世代のシヨップには“カリスマ店員”と言われる人がいます。そのブランドの商品を身に纏い、そのカリスマ店員自体の魅力がお客様を惹きつけ、自らが広告塔となるわけです。しかし実はこの“カリスマ店員”、何もそのような若者のシヨップにばかりいる訳ではありません。他の売場にもその商品を担当する“人の魅力”で面白い上げ頂くようなところはありますし、事実ミセスの婦人服シヨップの店長クラスの方は、皆さんを惹きつける魅力と個性をお持ちです。私が“カリスマ専従(?)”になれる自信はありませんが、仕事の面に限らず“少しでも魅力的な人間になりたい”と思っています。

おわりに

進化し続けるIT技術の影響もあり、社会的に人と人の繋がりが薄くなる傾向が強くなっています。また、それでも事足りることも事実です。しかしやはり最終的には、顔と顔を合わせてどれだけ話ができるかが一番大切なことだと思いますし、自らを奮い立たせるという意味で、自分を前に出し、人と接することを求めていると思います。「迷ったらやってみる！」ことです。

今年で20代最後の歳を迎える私にとって、このような機会を与えていただけたことを委員長・書記

長をはじめ皆様に感謝します。また、短い期間でしたが同じ時を過ごした第14期の塾生の皆さん、事務局の竹川さん、大変ありがとうございました。特にB班の皆さん、「またいつか一緒に飲みにでも行きたいなあ・・・」なんて思っています。

そして、産政塾にこれから参加される皆さんへ。産政塾には、少しぐらいの案件は差し置いて、なんとでも参加しましょう。二度と得られないであろう経験です。参加できない企画があったことが、私の最大の反省です。

最後に、この場を借りて今後努力してやりたいことを書いておきます。こういう皆の目に触れるところに書いてしまった方が、励みになるでしょう。

①仕事の能力を上げたい

限られた時間と、限らない仕事。少しでも能力アップしてより多くの課題に取り組みたい。

②こたわれる趣味を持ちたい

仕事に忙殺されている生活を意識出来ているうちに、生涯打ち込めるような趣味を持ちたい。

③親孝行をしたい

いつの間にかこの歳になった。親としての気持ちはまだ分からないけれど、感謝の気持ちを表したい。

乱筆をお許し下さい。短い間でしたがどうもありがとうございました。

以上

事務局の独り言

中部産政研

竹 川 智 雄

第十四期産政塾が修了しました。一月の開塾式でそれぞれの組織から派遣された塾生が初めて顔を合わせ、月一回の会合ではありましたが、あつという間に八月の閉塾式を迎えました。事務局の私自身も今期よりバトンタッチされ、今回から初めて塾の運営に関わりました。運営にあたっては十三年間続いてきた産政塾の灯を絶やさぬようにと、また各組織から多忙の中、派遣いただいているので、塾を単なるお楽しみ会にはしてはいけない、胸を張ってそれぞれが出張報告できる中身にしなければならぬといったようなブレッシヤーも実は感じており（本当はそうだったんです）、これらを意識しすぎた余り、いっしょに楽しむというよりは裏方に徹し過ぎた感じをもっております。今思うと塾生の中に入ってもっともっと議論すればよかつたかなと思います。

塾生の皆様からは今期の活動をふり返り、多くのご意見をいただきました。さらなる産政塾の発展に向け、来期の塾運営に活かしたいと思えます。いただいたご意見を見るとそれぞれが多忙の中にもかかわらず、みんな真剣な思いで、塾に参画いただいていたことが読み取れ、今さらながら改めて感謝している次第です。

ところで今回の塾誌の編纂にあたり、塾生の皆様には「塾誌の原稿書き上げが卒業の条件」と言い続け、塾生の方々のいやがる顔を思い浮かべながら、電話やメールで催促のフォローをしてまいりましたが、過去の塾誌を何気なく見ているとなんと事務局の担当ページもあることに気がつき、今こうしてあわてて筆を進めているところです。

さて、産政塾は三十代前後の若者が集い、「殻の外へ踏み出そう」をテーマに、人材交流する場で

す。三十代といえは仕事にも慣れ、仕事の進め方もプロフェッショナルになっているはずの一方で、新鮮な問題が希薄化し、既存の「殻を破る」ことへのチャレンジ精神が減退し、広い視野での独創的な発想や判断ができなくなっているのではないかと誰しもふと考えてしまう頃だと思います。だからこそ、この「殻の外へ踏み出そう」というテーマに塾生の誰もが大人なり小なり共感を覚え、自分を見つめ直す機会を欲しているのでしょう。このことは産政塾に臨むにあたつて入塾の動機を下記のように綴っている塾生たちの声からも伺えます。

・他社の方々と接し、様々な経験をさせていただく中で、新しい視野や価値観を身につけたいと思います。

・…日常の業務をこなしていく分には支障がないため、結局「時間が無い」「今度暇な時にでも」などと言いつつしながら悶々と日々を過ごしている状態が続いています。この塾が、私の感じている壁を破る一助となってくれることを望んでいます。

・…知らず知らずのうちに、社内の常識をベースに物事を考える自分に気づく今日この頃です。…考え方の異なる人と徹底的に議論して初めて別の価値観を理解し、受け入れることが出来るのではないかと考えます。異業種の同世代の人達と議論を深めることで、ありきたりの言葉ですが、考え方の幅を広げ、物事を多面的に捉える力を身につけたいと思っています。

・…現在の自分は限られた専門分野の中で物事を考えることが多くなり、視野が狭くなってしまうていることを痛感しています。貴塾の「殻の外へ踏み出そう」をテーマにした活動は「動く」範囲を広げる絶好の機会です。この機会を通じて異業種の皆さんと交流・研鑽していくことにより、新しい角度、高い視点で物事を「見る」力を養いたく、申込みいたしました。

・…幅広い知識・視野を持つてこそ、正しい判断ができ、よい活動ができると考えています。この業界に投じて十余余。業界の人とは多くの交流を持つてきましたが、今回は異業種の方も多く参加されるようで、自分の視野が一層広がればと考え、申し込みました。

・…常々「自分を客観的に見ることの大切さ」を感じてきました。目下取り組んでいる仕事、会社などの組織に所属している自分の現状、人生などの身を置く立場から一步引いて、もう少し広いものの見方をするとき、全く逆の捉え方をしてみたとき、何かに気付くと共にどこか新鮮な気持ちになれると思います。異動後僅か四ヶ月弱の間、同じ一企業・単組にいる人間でさえ、当然各個人によつて、様々な考え方や意識の違いがあることに改めて気付くと共に外部のセミナーや各種会合では強い刺激を受けることも少なくありません。さらに広い世界の人達と触れ合うなかで人間としてより見識を高めたく、意欲と好奇心をもつて応募致します。

・今回の産政塾への申込みの動機の一つは「世間知らずの私を変える」ことにあります。一企業、一組織でしか働いていない私が自分の考えや視野の狭さを思い知らされました。今回の入塾で様々な分野の業種の方と論議を交わし、自分自身を見つめ直したいと思います。

・今の職場で働いて9年経ち、最近、新鮮な問題意識が希薄になつていることを自分でも感じるようになりました。新人の頃よりも少しは発言力があるようになった今の時期こそ、広い視野での独創的な発想や総合的な判断力が必要であると感じているのですが、なかなか実践できていません。テーマ「殻の外へ踏み出そう」はそんな今の私にぴったりの問題提起であり、異業種の方と議論することにより、刺激になり、少しでも自分を変えて仕事の役に立てればと思います。

・現在、社会や経済を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、企業はもとより企業で働く私たち

自身にも何らかの変化を世の中は求めています。そのような中「自分自身は何が変わったか」と私自身考えてみると明確には答えられないことに気付きました。入社して八年ですが知らず知らずのうちに「井の中の蛙」になっていたのかも。変化することは易しいことではないのですが、この産政塾という交流の場を通じてもう一度自分自身を見つめ直し、ひとまわり大きな自分に成長したいという思いから応募しました。

・テーマ「殻の外に踏み出そう」という言葉に強く関心を持ちました。一つの組織の中に所属してはや十年、今の自分自身を客観的に見つめ直し、他業種の方と触れ合う事で、新しい自分を発見したいと思います。

・…十人十色という言葉があるように様々な見方・考え方があることを踏まえた上で検討しなければなりません。産政塾に参加することにより、異分野・異業種の仲間との交流が得られ、様々な論議を交わすことができることは、これまでの狭い視野・凝り固まった考え方を打破できるのではないかと考え、申込みました。

・異業種の方々との交流や情報交換を通じ、物事の考え方、価値観、さらには幅広い視野の発想や判断を身につける事を目標に、今回申し込み致しました。自分自身を見つめ直す良いきっかけとなるよう、志を強く持つて参加させて頂きます。

・同世代の人々と接し、現在の自分自身の考え方、価値観等を見つめ直す、又、多くものに触れ、視野を広げる機会としたい。

・今期より労働組合の執行委員となり、環境も大きく変化しました。自身の見聞を高め、広め、今後の活動につなげたい。

・入社して十年、…会社生活には、なにか「これでよいのかな？」と感ずることが多い。自分ができる範囲（「能力」）を自分で決めてしまっているような気がする。「もつとできることがあるのではないか」と自問する時がある。そんな今の自分の状況を打破したい。そのためには絶好の機会だと思えます。

・…視野が狭くなってしまうのではという焦燥感もあります。自分と異なるフィールドで活躍している方から多くのことを吸収し、自分を大きく成長させたいと強く思い、産政塾への参加を希望しました。

人は現状を変えることに抵抗を感じる、避けたいと思う。前例踏襲でいる方が楽だし、変えることは苦痛を伴うから。それでも、これではいかんとか、壁を乗り越えたいとか、視野を広げたいとか、現状の自分を変えたいと欲求している。同じ組織にいて異なる組織の人と触れ合うことによって、自分を見つめ直したい、別世界の講師の方の話を聞くこともそのきっかけとなるよい機会でしょう。

運営にあたり事前に右記のような「声」（入塾の動機）をいただいておりますので、これらが事務局には冒頭に言ったような責任とプレッシャーでした（繰り返しますが、そうだったんです）。そのため、塾生方が考えた企画にも失礼ながら内容によっては再検討を促したり、お手間をとらすようなこともしましたが、ただただ塾生方の「声」を常に意識したものとしてご理解下さい。しかしながら終わってみて塾生の欲求は満たされたのかと自問自答しています。

「殻を破る」こと、さらにはそのことを「実感できた」ということは、決して容易なことではありません。それでもまずは自分の「殻」を認識することが重要であり、立ち止まって考える機会を持つ

ことこそがその第一歩でしょう。そういう意味においては今期の22名の塾生はその第一歩を踏み出したと思います。立ち止まって考える機会を持てたと思います。私自身もよい勉強になりました。閉塾式での塾長の言葉にもあったように「各企画で体験したことを通じて、自分はこれからどうするかと考えることが重要であり、ものの見方が多少でも変わってきたことがこれからの自分の幅につながる」でしょう。この先、産政塾の同窓会があったとして、それぞれが「変わった自分を見てほしい」と再会できる日を楽しみにしております。

最後に、ご多忙の中、業務のスケジュールを調整し参加いただいた塾生の皆様、また送り出していたいただいた職場の皆様をはじめとする関係諸兄の皆様にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

日時：2003年1月21日(火)

場所：全労済豊田会館

内容：第14期産政塾開塾式、

塾長挨拶、塾生自己紹介、

グループディスカッション

親睦会



第14期産政塾に集った塾生



自己紹介ではそれぞ
れの熱い思いを

グループ討議では
議論も闊達に



03 01



小田桐塾長を囲んで
懇親会

03 01

《第2回会合》

日時：2003年3月25日（火）

場所：さなげアドベンチャーフィールド（豊田市）

内容：パリ・ダカールラリー出場チームを訪ねて

「ラリーから学んだ人生観をきく」

講話、討論、実車走行体験

懇親会

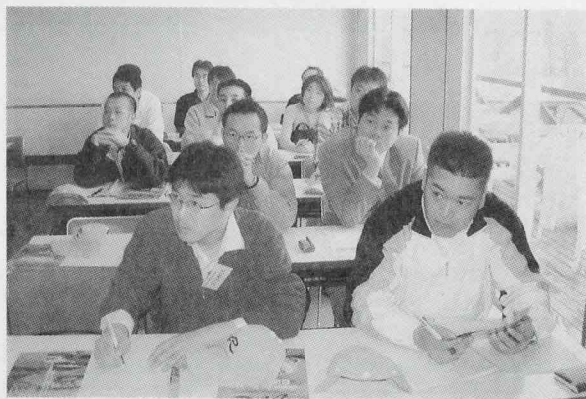


ラリー車の前にて記念撮影



講師の浅賀さん(左)
と荒川さん(右)、
チームワークの良さは
まるで仲のよい親子のよう

挑戦意欲をかきたてられ、
講話に聴き入る塾生
のみなさん



プロドライバーの
ドライブテクニック
を体感

《第3回会合》

日時：2003年4月17日（木）

場所：名古屋テレビ放送株式会社

内容：メ〜テレを訪ねて

「マスコミの裏側を見る」

テレビ局の視察、番組作り見学、

懇親会



アナウンサーの倉橋さん（中央右）と生放送後のスタジオで記念撮影、いろいろお話を聞かせていただきました



講師のコンテンツセ
ンターニュース担当
記者の伊藤貴宣さん

興味津々、普段では聞
けなかったことを積極
的にアタック



舞台裏での出来事を
いろいろ説明してい
ただきました

《第4回会合》

日時：2003年5月15日（木）

場所：自衛隊（豊川駐屯地）（豊川市）

内容：自衛隊を訪ねて

「日本の防衛の現状を知る」

講話、史料館見学、基本教練体験、

懇親会



基本の大切さ、難しさを学びました



貴重な資料を通じ、
三河の歴史に始まり
自衛隊の現在に至る
まで中川准尉よりご
説明いただきました
(右から2番目)

単純動作にも
基本あり！
基本教練では、川尻二
曹(左)と澤田三曹(右)
より労働に対する姿勢
を学びました



号令を掛ける難しさ
は業務で指示を出す
難しさに通じます

《第5回会合》

日時：2003年6月19日（水）～20日（木）

場所：北九州市エコタウンとスペースワールド（北九州市）

内容：「地球環境・資源循環型社会について学ぶ」

講和、視察、宇宙飛行士の訓練体験、

懇親会

（天候不順により中止）

企画内容

第5回産政塾企画案（担当：Cグループ）	
リーダー	堀田 大祐 〔名古屋鉄道（株）〕
サブリーダー	苑田 隆之 〔中部電力（株）〕
記録係	奥 丈治 〔（株）松坂屋〕
フォーラム係	小嶋 直樹 〔松坂屋労働組合〕
テーマ	「地球環境・資源循環型社会」について学ぶ
企画内容	●ねらい ・資源循環型社会を目指して、環境問題やリサイクル事業に企業・地域が一体となって取り組んでいる現地を視察することにより、認識を深め、企業人としての今後の活動に役立てる。 ・産政塾のテーマである『殻の外に踏み出そう』に絡めて、地球（大気圏）という殻の外の世界である宇宙とふれあうことにより、地球の大切さ・資源の有効活用等について考える機会とする。
	●講演内容 ・「北九州市エコタウン事業」の環境未来都市の形成に向けた取り組みを通した、資源の有効活用策、最新の技術・取り組み紹介、企業と地域の連携、得られた成果、社会市民としてあるべき姿等について、苦労話も 交えながら、お話をお聞かせいただく。
	●視察・体験 ・北九州市エコタウンでの取り組みを視察 ・スペースワールドの宇宙体験学習（スペースキャンプ）に参加、各種トレーニング機器を使い、宇宙飛行士の訓練を体験
日程	2003年6月19日（木）～20日（金） 1泊2日
講師	新日本製鐵㈱八幡製鐵所総務部開発企画グループ部長川崎順一氏 （北九州市エコタウン事業の民間側のコーディネーター）
場所	福岡県北九州市（北九州市エコタウンセンター、スペースワールド）

《第6回会合》

日時：2003年7月17日（木）

場所：南禅寺（京都市）

内容：京都禅寺を訪ねて

「精神鍛錬 プレッシャーに打ち勝とう」

法話、座禅・写経体験、

懇親会

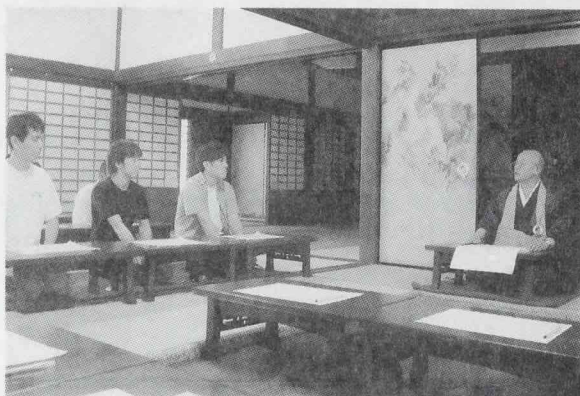
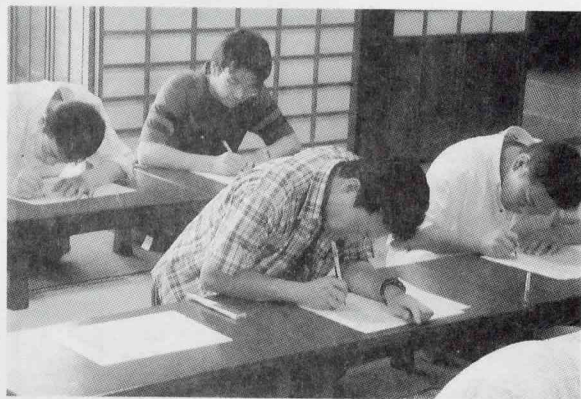


当日は祇園祭と重なり、大賑わいでした



座禅／正しい姿勢や
呼吸の仕方など座禅
の組み方からご指導
いただきました

写経／一心不乱に筆を
運ぶ塾生、いつの間
に周り忘れ、集中力
が高まっていました



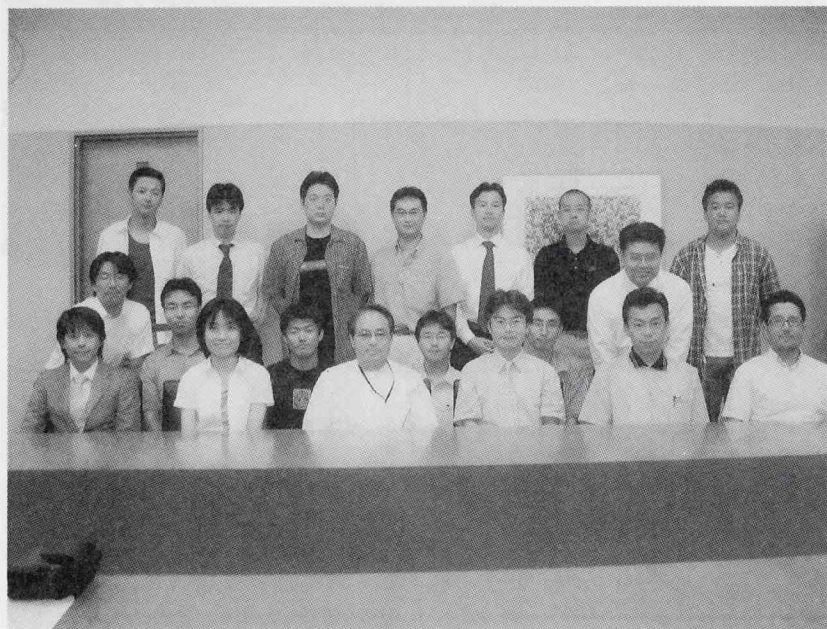
法話／座禅も写経も
穏やかな気持ちを保
つための精神鍛錬、
怒りと欲望との闘い
です

《第7回会合》

日時：2003年8月29日（金）

場所：青少年公園／金山アビタン（名古屋市）

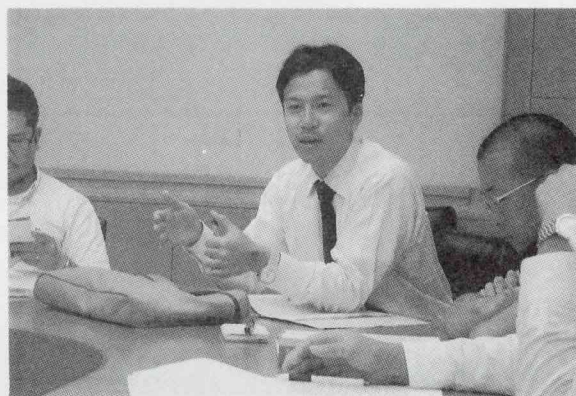
内容：万博会場視察、第14期産政塾閉塾式、
「殻の外に踏み出そう」について討論
打ち上げ懇親会



（閉塾式）みなさんお疲れ様でした。
みなさんの今後のますますのご活躍を期待しております



(万博) 2005 年の
開催に向けて着々と
進んでいます



(閉塾式)「殻の外に
踏み出そう」について
塾生全員で議論



(閉塾式) 小田桐塾
長より激励の言葉

産政塾歴代卒業生

※
組織名は参加当時の名称

第2期生 (14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 小西 正晃 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株) (株)デンソー)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生 (14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株) (株)デンソー)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

竹内 順治 豊田合成労働組合

朝日 和寛 日本電装(株) (株デンソー)

田中 義和 トヨタ自動車労働組合

村田 滋 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)

沢田大八郎 豊田自動織機労働組合

原 年幸 トヨタ自動車(株)

中村 武司 アイシン精機(株)

宮坂 和行 松坂屋労働組合

山田 法夫 名古屋鉄道(株)

秋葉 覚 中部電力(株)

駒沢 修 アイシン労働組合

岡 啓視 中部電力労働組合本部

加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合

松野景之介 トヨタ車体(株)

相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合

大島 一峰 アイシン精機(株)

大西 勝彦 豊田自動織機労働組合

神谷 直 アイシン労働組合

岸田 竜茂 中部電力(株)

雲井 浩 丸栄労働組合

近藤 郁也 トヨタ車体(株)

島川誠一郎 トヨタ自動車(株)

関谷 俊司 日本電装(株) (株デンソー)

竹下 裕之 トヨタ車体労働組合

塚本 和宏 全松坂屋労働組合

遠山 泰弘 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)

深谷 修 豊田合成(株)

宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株) (株)デンソー)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 横田 晴充 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行))
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株) (株)デンソー)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)

第8期生 (22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生 (17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株) (株)デンソー)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 白井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)

第10期生

(21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生

(21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行 (株)UFJ 銀行)
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第12期生 (22名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)UFJ銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第11期生 (25名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大寫 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 綿次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学大学院国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行 (株)UFJ銀行)
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第13期生 (21名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
内田 恭介 中部電力労働組合本部
梅田 清孝 フタバ産業(株)
太田 正樹 松坂屋労働組合
門井 徳孝 デンソー労働組合
熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
佐野 智弘 アイシン精機(株)
鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
鈴木 武 名古屋鉄道(株)
田中 亘人 (株)豊田自動織機
茅和田光紀 豊田市役所
出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
中川 年史 アイシン労働組合
野坂 利次 トヨタ自動車(株)
服部 淳二 豊田工機労働組合
水野 雅通 アスモ労働組合
宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
村口 文希 刈谷市役所
森 章浩 (株)UFJ銀行
森 勝 東邦ガス労働組合
山本 徹真 アラコ(株)

産 政 塾

2004年1月 第5刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 小田桐勝巳

塾 生

東海理化労働組合	浅野 清輝
デンソー労働組合	大川 博
株式会社松坂屋	奥 丈治
トヨタ車体株式会社	梶田 進
豊田自動織機労働組合	梶原 昭二
株式会社デンソー	川崎 貴之
アイシン精機株式会社	栗原 尚子
松坂屋労働組合	小嶋 直樹
アラコ株式会社	佐藤 源信
刈谷市役所	白井 崇夫
全トヨタ労働組合連合会	鈴木 輝行
中部電力労働組合	鈴木 利幸
中部電力株式会社	苑田 隆之
トヨタ車体労働組合	千種 徳充
豊田市役所	柘植 孝悦
トヨタ自動車株式会社	長岡 享史
アラコ労働組合	藤原 誠二
名古屋鉄道株式会社	堀田 大祐
トヨタ自動車労働組合	山口 健
アイシン労働組合	山下 邦彦
株式会社豊田自動織機	吉田 研太
丸栄労働組合	渡辺 憲司

中 部 産 政 研 竹川 智雄